

第5章 竪穴式石槨内出土の遺物

1 概要

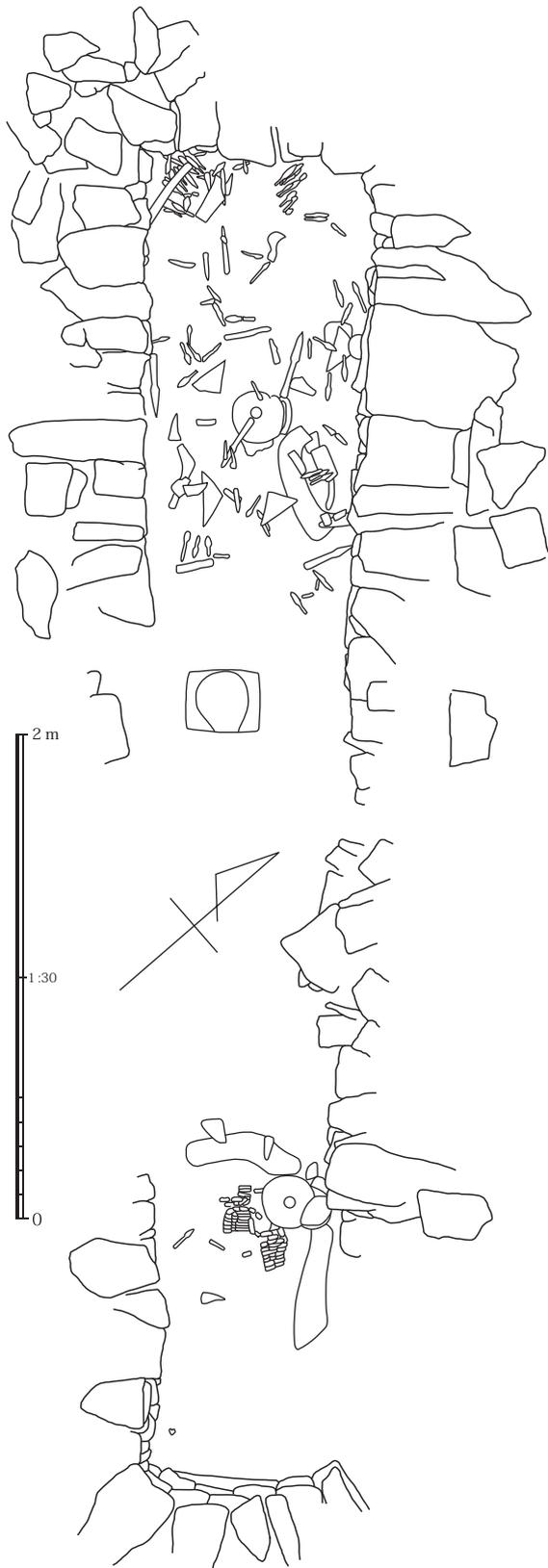
(1) 品目と数

発掘報告によると竪穴式石槨内からは、埴製枕1点、漢式鏡1点、玻璃製小玉3点、鹿角装刀子破片2点、鉄鉾4点、罽1点、細根鉄鏃257点、四方白鉄地金銅装眉庇付冑1点、鉄地金銅装眉庇付冑1点、同破片若干、短甲片2点以上、挂甲1点、鉄地金銅装頸鎧完1破3、籠手1点、竪形斧頭1点、不明鉄製具1点が出土したとされる。整理作業の結果として竪穴式石槨内出土遺物と認定した遺物と、発掘報告において記載された遺物との対照を第3表に示した。

眉庇付冑の破片については四方白鉄地金銅装眉庇付冑(冑2)や鉄地金銅装眉庇付冑(冑1)とは別個体となる可能性も言及されていたが、今回の調査により冑1と同一個体の破片であると判断した。これにより竪穴式石槨内出土の眉庇付冑は2点と確定した。また、鉄地金銅装眉庇付冑にともなう鋳として報告された個体の中に、肩甲が含まれていたことが判明している。小札群は挂甲として報告されているが、多数現存する小札のうち、竪穴式石槨内出土のものとは確定できたものはほとんどなく、ここでは確定できた篠状鉄札と方頭小札についてのみ報告する。鉄鏃は257点があるとされたが、現状で計測する限りその数値は破片全点の計測数であった可能性が高いとみられ、鏃身部や関部の計測により最小の個体数としては177点という数字を得たため、それ以上として報告する。そのほか、竪穴式石槨内出土の可能性が高い遺物として鉄刀剣片3点以上と、鉞1点、器種不明の鉄製品1点を確認している。刀子は他例とはやや形状が異なるが、新たに1点を確認している。(川畑 純)

第3表 竪穴式石槨内出土遺物一覧

品目	現状点数	発掘報告[網干1962]における名称	点数	
埴製枕	1	埴製枕	1	
銅鏡	1	漢式鏡	1	
玉類	現物なし	玻璃製小玉	3	
武具	眉庇付冑	四方白鉄地金銅装眉庇付冑	1	
		鉄地金銅装眉庇付冑	1	
		同 破片	若干	
	鋳	2	鋳	2
	短甲	2	短甲片	2
	頸甲	1	鉄地金銅装頸鎧	完1破3
	肩甲	1	—	—
	小札群	挂甲	1	
武器	篠状鉄札	8片	籠手	1
	方頭小札	2片	—	—
	鉄鏃	177以上	細根鉄鏃	257
	刀剣	3以上	—	—
	鉄鉾	4	鉄鉾	4
農工具	石突	1	罽	1
	斧	1	竪形斧頭	1
	鑿	1	不明鉄製具	1
	鉞	1	—	—
刀子	3	鹿角装刀子	破片2	
不明鉄製品	1	—	—	



第 10 図 豎穴式石槨内遺物出土状況

(2) 配 置 (第 10 図)

発掘報告によると豎穴式石槨内出土遺物のうち副葬位置をほぼ反映するとみられるものは、埴製枕 1 点、銅鏡 1 点、玉類 3 点、短甲 2 点、眉庇付冑 2 点、鋨 2 点、頸甲 1 点、小札一括、篠状鉄札一括、鉄銚 3 点、鉄鏃 69 点以上である。遺物の配列は主として次の 3 箇所に分けられる。

1. 石槨内北西部：短甲 1 点、眉庇付冑 1 点、鋨 1 点、頸甲 1 点、鉄銚 3 点、鉄鏃 69 点以上がある。

2. 石槨内中央部：埴製枕 1 点、鉄鏃数点がある。石槨内中央部は、盗掘の影響をもっとも受けた箇所とされ、副葬品はほとんど確認されていない。埴製枕の存在から、被葬者の埋葬位置はこの箇所に当たると考えられるが、そのことも副葬品が希薄なことと関連するとみられる。調査所見では埴製枕は原位置を保つとされ、そうであるならば被葬者の頭位方向は北西となる。この埴製枕の周辺から鉄鏃片数点が出土したが、盗掘の影響によりほかの場所から混入したものか、もともと埴製枕の周辺に鉄鏃が置かれていたのかは明らかでない。

3. 石槨内南東部：短甲 1 点、眉庇付冑 1 点、鋨 1 点、小札一括、玉類 3 点がある。眉庇付冑の内側に鋨と篠状鉄札が入り込んでいる。短甲は後胴押付板のみが眉庇付冑の西側より出土したが、そのほかの部位については明らかでない。小札は一括で眉庇付冑の下でまとまって検出された。小札の下には礫石が敷かれており、この礫石の上に小札を置き、その上に眉庇付冑および短甲がセットで置かれたものと考えられる。鉄鏃は短甲の周辺部で数点が出土したが、先端の向きが揃わず数点のみの検出であるため、盗掘の影響を受けたものと推定される。これらとはやや離れた小口側の南隅で、玉類 3 点が検出された。

(初村武寛)

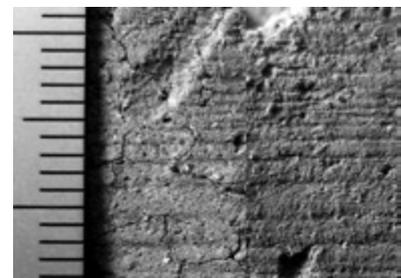
2 埴製枕 (図版1・2、第11・12図)

発掘報告によれば、竪穴式石槨のほぼ中央付近にて検出されたようである。埴輪などを転用したものではなく、当初から枕として造られた埴製品であり、底部付近に一部欠損はあるもののほぼ完存といつてよい状態である。胎土はやや粗く、直径3mm以内の砂粒(チャート、石英、黒色粒)を多く含んでおり、埴輪と同様な印象を受ける。なお、奥田尚氏による器壁表面にみられる砂礫の観察によれば、埴輪や埴製枕における砂礫種構成は同じ類型に属するもので、紀の川(吉野川)右岸に位置する五條市近内町から今井町に至る範囲でみられるものであるとのことである。焼成は良好で、黒斑はみられない。色調は黄白色であり、埴輪と比べるとやや白っぽい印象を受ける。内外面には赤色顔料が塗布されている。

平面形は横に長い長方形であり、最大値で横30.9cm、縦24.1cmとなっている。高さは最高値が15.1cmで、器壁の厚さは1.2～1.6cmである。両小口は、ドーナツを半分にしたような形状となっているが、半円形の透孔のようにになっている部分は、成形後に穿孔したものではないようである。内面の観察などから判断して大まかな製作過程を復元するならば、おそらく側面となる四面をそれぞれ粘土板状に形造った後に接合し、そこに被葬者の頭部を載せる凹部を接合して成形したものと考えられる。底面は基本的に水平となっており、これは棺底内面の形状を反映している可能性がある。

外面では凹部や側面にハケがほどこされている。凹部では被葬者の後頭部が載るもっとも凹んだ部分に横方向のハケをほどこした後に、凹みの縁辺に沿うようにハケや板ナデにみえるような調整をほどこしている。四面ある側面のうちの頭頂部側の側面では横方向に何回もヨコハケがほどこされており、一部には静止痕もみられる。なお、既に中間報告などでも紹介したように、この部分のハケメと埴輪(第157図9)のハケメが一致することを確認しており(第11図)、この埴製枕と埴輪の製作者が極めて近い関係にあることが推測される。このことは、埴輪や埴製枕に含まれる砂礫種構成が同じ類型であるという奥田尚氏の鑑定結果とも一致する。

内面ではナデや板ナデにみえる調整がほどこされている。また、被葬者の頭部を載せる凹部となる境界の屈曲部分に沿って爪のような痕跡が残存している。(加藤一郎)



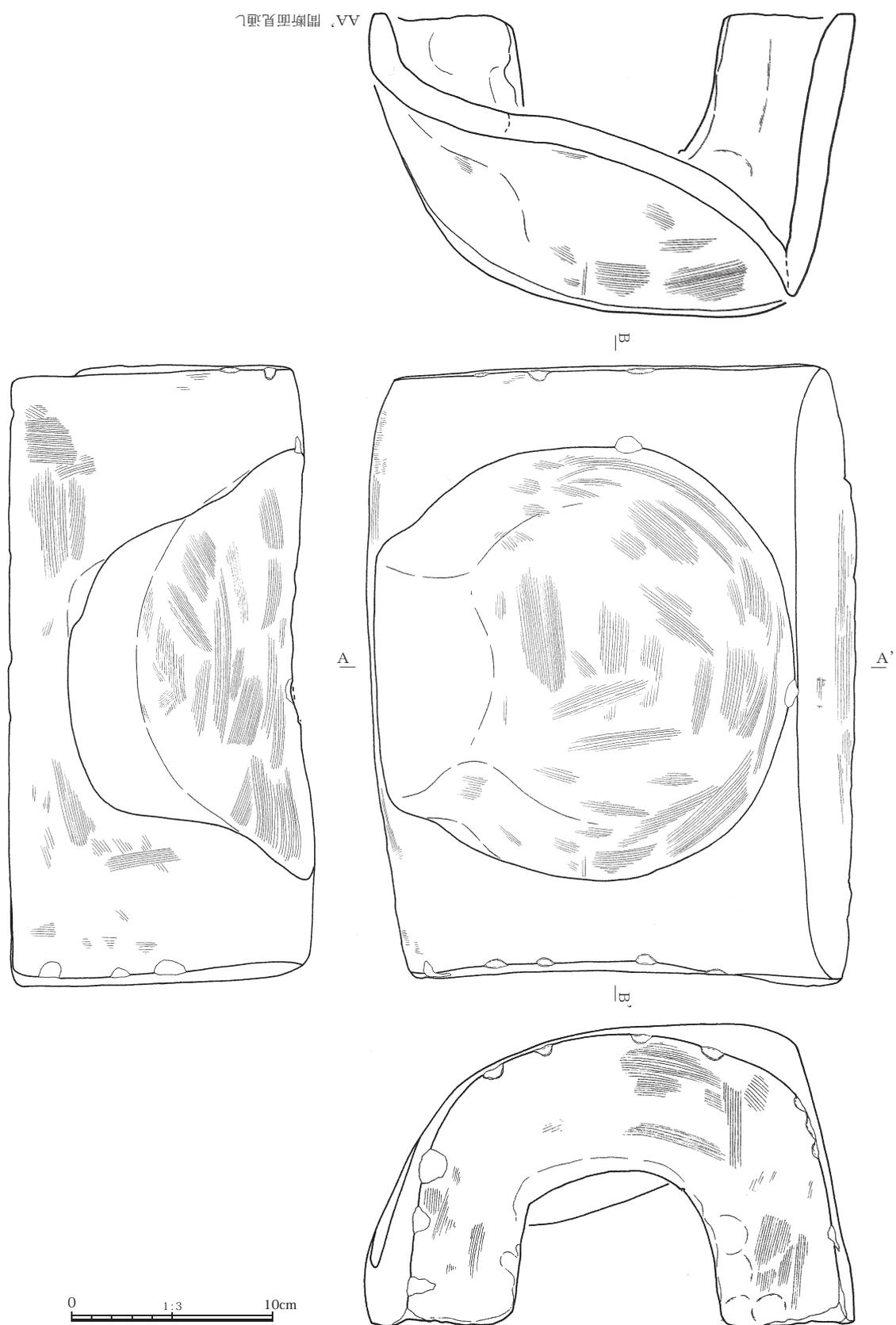
第11図 埴製枕(左)と円筒埴輪(右)のハケメ一致状況

3 銅鏡 (図版3、第13図)

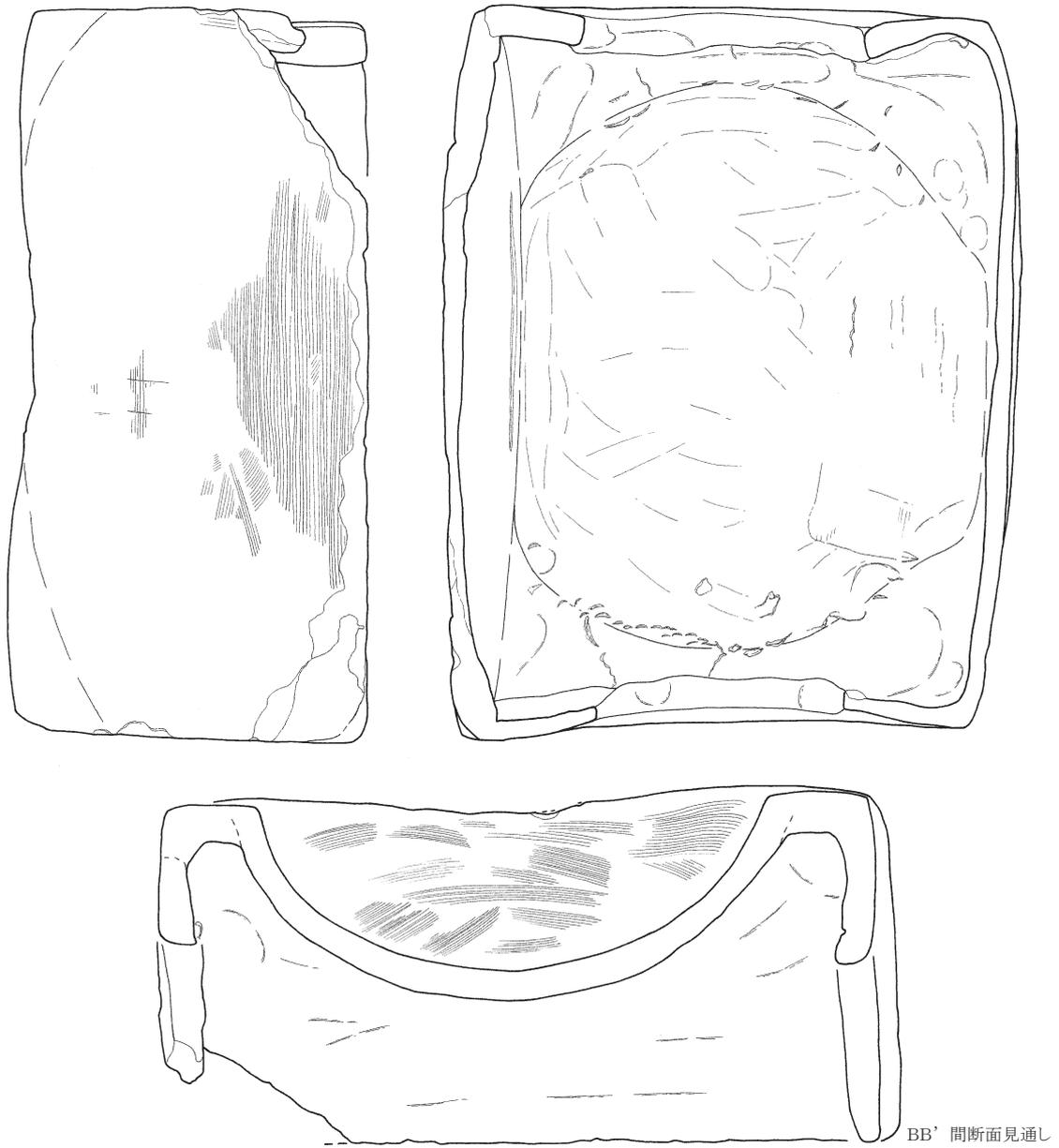
竪穴式石槨内の側壁に沿うようにして青銅鏡が1面出土した。珠文鏡と呼ばれる鏡式に属する資料であり、日本列島で製作されたいわゆる仿製鏡である。鏡は鈕孔が上に向くように立てかけられた状態で出土したが、埋葬施設は広範囲に渡って大規模な攪乱を受けており、そうした出土状況が本来の副葬時のあり方を反映しているとは考えにくい。検出状況については、副葬時の位置から相当程度移動している可能性を考慮しておく必要がある。

遺存状態 欠損のない完形品である。遺存状態は良好であり、鏡背面には部分的に布が付着する。薄

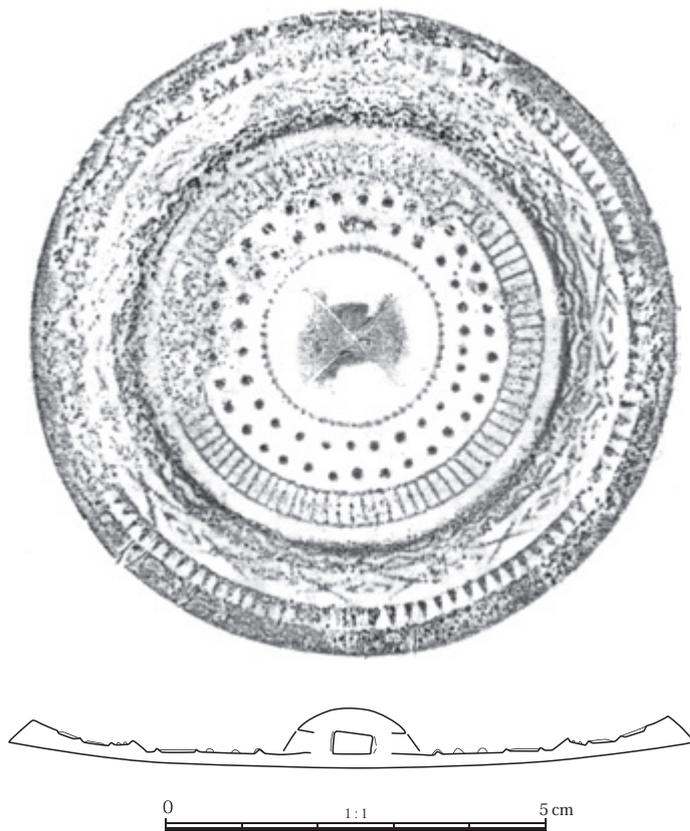
2 埴製枕



第12図



埴製枕実測図



第 13 図 銅鏡拓影・実測図

り不良の影響を想定しうる。なお、鈕孔の下辺は鏡背面の高さと一致する。鈕座は断面蒲鉾形の圏帯であり、細線を密に重ねることによって重弧文状の装飾をほどこす。

内区主文部は珠文を大まかながら 2 重に列状に配する。おおむね一定の間隔で珠文を並べるのを基本とするが、部分的に間隔が不揃いなところもある。珠文は上面に丸みを持つ半球形のものである。

内区外周部は内区主文部と 1 条の圏線で区画される。幅約 5.0mm の文様帯が巡らされ、やや間隔の粗い櫛歯文を充填する。文様帯の外周も 1 条の圏線によって区画される。

一段高い外区には、3 条の文様帯を巡らす。内側から複線波文—菱雲文—鋸歯文を配する。それぞれの文様帯は圏線によって区画される。中央の文様帯に配される菱雲文は細線のみで表現されるやや簡素なものである。外区の形状は全体に反りのある匙面を呈し、内外区の境界部分が厚くなる。最外周の文様帯である鋸歯文の外側には無文の部分があり、徐々に厚みを増す。縁部形状は斜縁に近いものとなる。

鑄造・研磨 文様の表出は鮮明であり、鑄上がりは非常に良好といえる。そのためか、肉眼観察では湯口も判然としない。X線画像の観察においても、内部に鑄巣が目立って集中する部分は認められず、湯口と想定しうる場所を特定することは困難である。唯一、湯口の位置を反映すると考えうる特徴としては、上述したように一方の鈕孔の上辺がややいびつな形状を呈する点である。この特徴を積極的に評価するならば、湯口の位置は図の上にあたる鈕孔の開口方向に相当する可能性を想定しうる。

仕上げの研磨は鏡面ならびに鏡背面の上部、縁部端と全体的に極めて丁寧にほどこされており、研磨の単位などを確認することはできない。

(岩本 崇)

い錆が付着する部分が多いものの、僅かに白銅色の地金のみえる部分がある。保存処理はなされていない。

法 量 直径は 9.1cm である。厚さは内区で 1.0～1.5mm 程度、外区で 1.5～2.0mm 程度、縁端部でおよそ 4.0mm である。現状での鏡面の反りは平均的な部分で約 3.5mm 程度となっており、やや強い。重量は 100.1 g である。

文様・形態 中心に鈕がある。直径が約 1.9cm、鏡背面からの高さがおよそ 6.0mm と、面径に比してやや大きめの鈕であり、若干高さの低い偏平な半球形を呈する。鈕孔は一方は幅約 5.0mm、高さ 2.0～2.5mm の整った長方形を呈する。孔付近はごく浅く面取りされる。もう一方は上辺がややいびつな形状であり、湯廻

4 玉 類

発掘報告では玻璃製小玉とされたもので、小口側の南隅から3点出土したとされる。「(前略) 玻璃製で濃青色を呈している。その大きさは径三耗程度のもので、あまり精巧、良質のものとはいえない。〔網干編 1962 p.43〕」とあるが、実測図・写真のいずれも提示されておらず、詳細は不明である。今回の再整理にともない探索をおこなったが、現物の所在は確認できなかった。(川畑 純)

5 武 具

竪穴式石槨内からは、小札鉾留眉庇付冑2点、鍔2点、三角板革綴短甲2点、頸甲1点、肩甲1点、小札一括、篠状鉄札一括という多数の武具が出土した。出土状況から、石槨内北西側より出土した小札鉾留眉庇付冑(冑1)・鍔・三角板革綴短甲(短甲1)・頸甲・肩甲と、石槨内南東部側より出土した小札鉾留眉庇付冑(冑2)・鍔・三角板革綴短甲(短甲2)・小札という少なくとも2セットの甲冑が存在したことがわかる。(初村武寛)

(1) 眉庇付冑

①冑 1 (図版4～9、第14～16図)

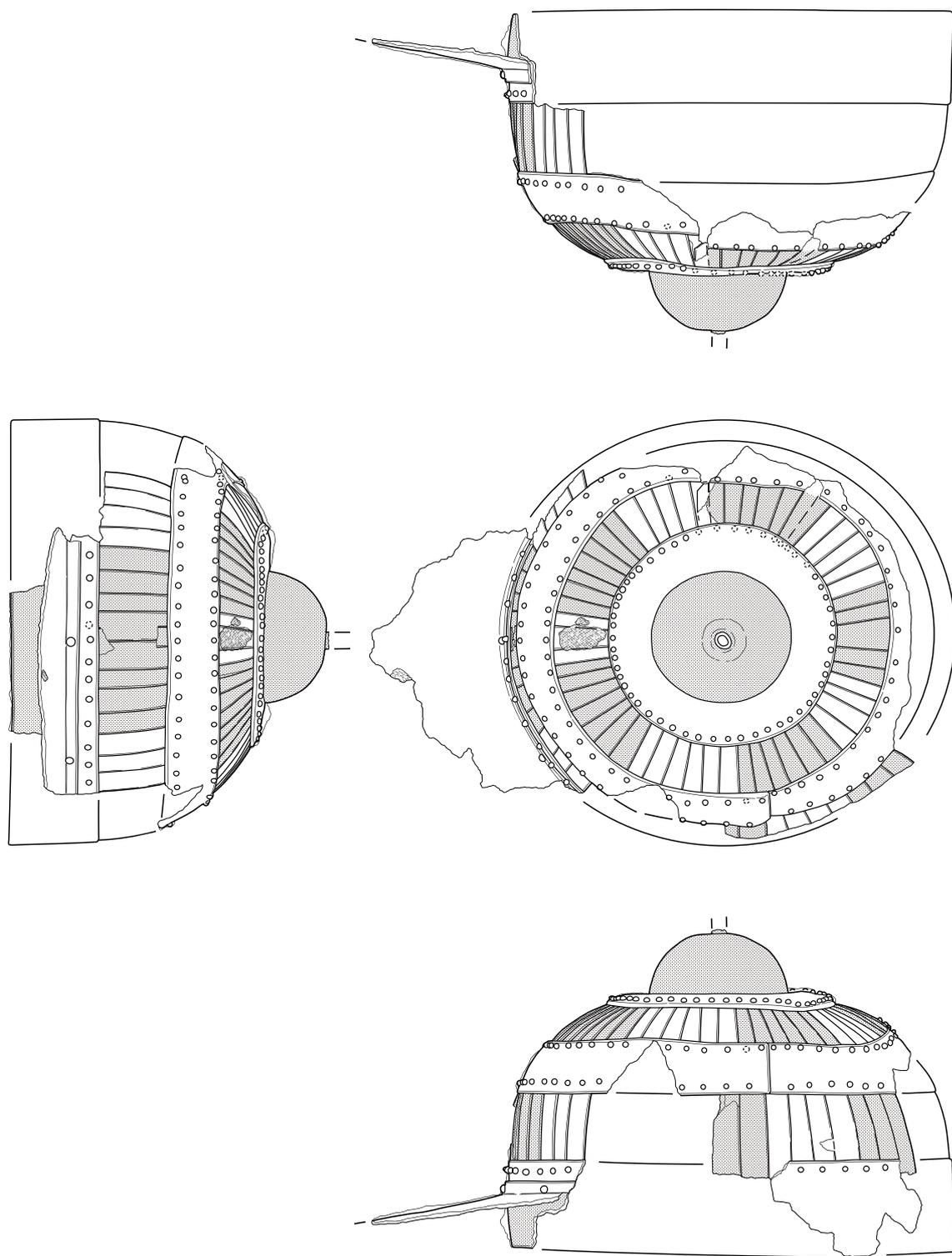
構成と法量 伏鉢および地板の一部、腰巻板の一部を金銅装とする、金銅装小札鉾留眉庇付冑である。管は現存しない。伏板・地板第1段・胴巻板・地板第2段・腰巻板からなる通常の5段構成である。保存処理がおこなわれている。

左側頭部では胴巻板から腰巻板にかけて、右側頭部から後頭部では胴巻板以下を大きく欠損しており、現在は樹脂による補填・復元がなされている。第16図として別に提示した破片は欠損部に該当するとみて矛盾はないが、現状で接点の確認ができないため図上での復元配置はおこなっていない。また、庇部の外縁部も欠損するが、同じく第16図に提示した庇部外縁部の破片は本個体との接点の確認できないが、ほかに充足すべき眉庇付冑が存在しないため、本来は本個体にとまうものであったと考える。

各部の計測値は、現存高15.1cm、現存前後径25.6cm、左右径18.7cmで、本来は冑鉢本体の前後径20.0cm、左右径20.0cmほどに復元できる。鉾頭径3mm、鉾頭高1mm、鉾孔径2mmである。厚さ1～2mm程度の鉄板を用いる。

伏鉢・管 伏鉢は鉄地金銅張で、高さ2.8cm、前後径6.6cm、左右径6.3cmである。伏鉢の頂部はおおよそ径2.0cmの範囲で1～2mmほど窪んでおり、その中心に径8mmの孔がある。孔には、厚さ1mmほどの鉄板を直径おおよそ8mmに丸めた筒状品が通っており、伏鉢頂部から約2mmほど上に突出し、折損している。筒状品は伏板を貫通し、冑鉢内面で3方向に割り開かれて固定されたとみられるが、錆化のため判然としない。孔の周囲には管の痕跡がみられる。なお伏鉢は、出土後のいずれかの段階で左側頭部側の幅約1cmほどが削り抜かれたようであり、内面が観察できる。

伏板 伏板は、高さ6～9mm、前後径10.8cm、左右径10.7cmで部分的に歪みがあるもののほぼ真円に近い。周縁に沿って地板第1段の地板上端を留める鉾列が巡る。右側頭部から後頭部にかけて鉾



第 14 图 冢 1 实测图 (外面)

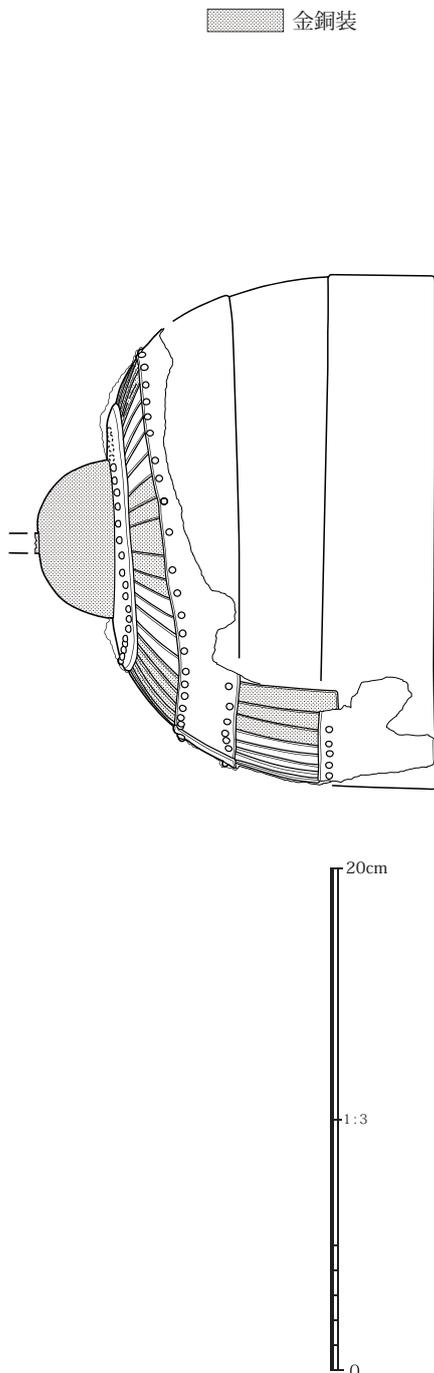
頭を欠失する箇所があるものの、本来は55個の釘が巡っていたと復元できる。

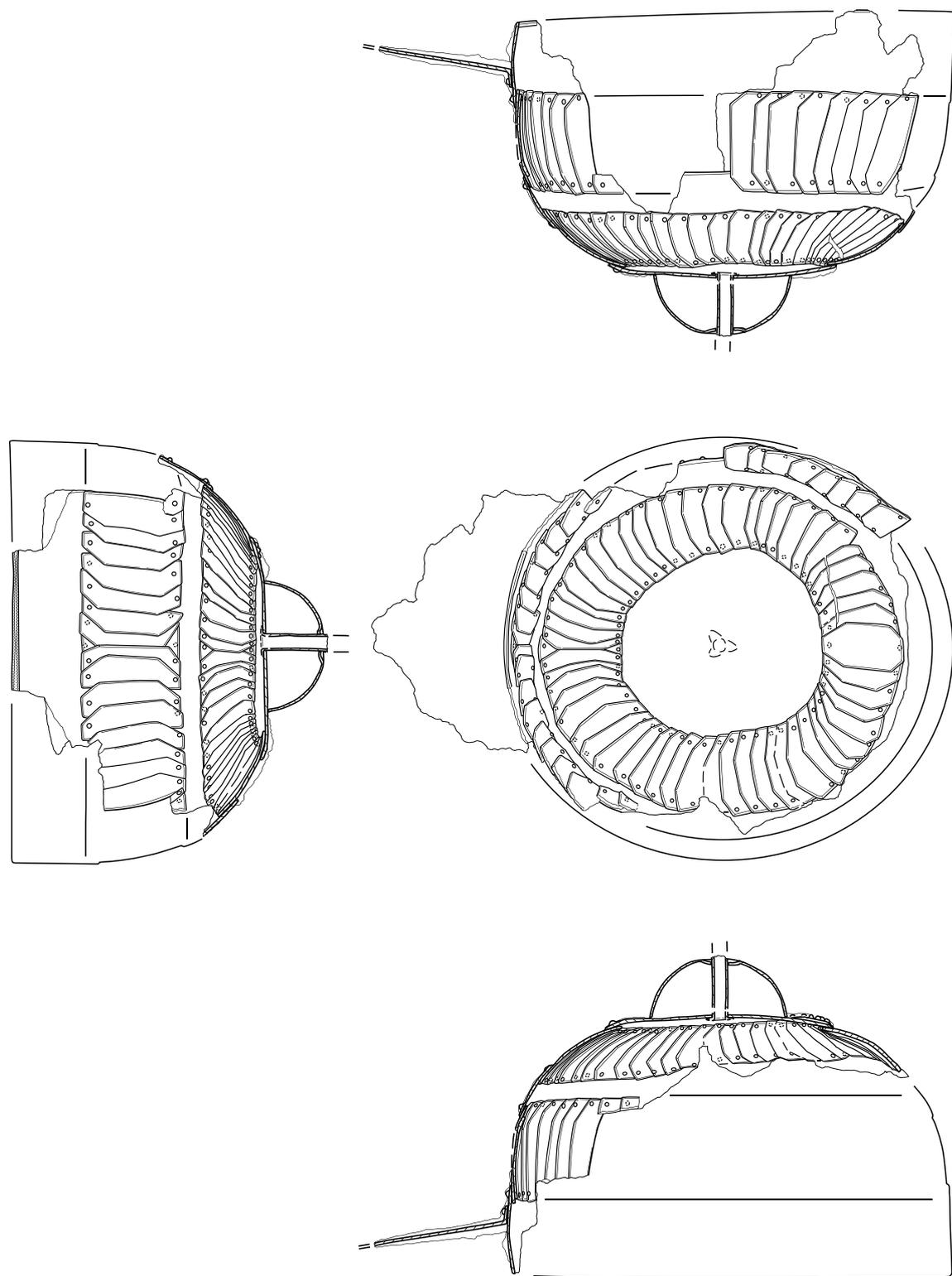
地板第1段 地板第1段は、右側頭部側で高さ約1.0cmの箇所があるものの、欠損が大きい箇所であり埋納後の歪みによるものと考えられる。本来は左側頭部側の高さ約1.7cmほどであったとみられる。小札55枚で構成される。小札の重ね合わせは、外面からみた場合に背面中央の小札に順次上重ねとする通則に全て則っている。すなわち、正面中央に小札1枚を配置し、順次外面からみて下重ねに右側頭部側に27枚、左側頭部側に26枚の小札を重ね、もっとも下重ねとなる背面中央に小札1枚を配置する。いずれの小札も伏板や胴巻板とはそれぞれ1個の釘で接続されている。

正面中央の小札は上辺約0.8cm、下辺約1.1cmの等脚台形である。左右両側の小札は前頭部側の上下角を切り落としたかのような不整六角形であり、伏板や胴巻板との接続箇所では地板が2枚以上重なることにより生じる、いわゆる3枚留めの回避に成功している。地板同士の重なりのため確定はできないが、小札の幅はいずれも1.5cmほどとみられる。小札の展開長は5.2cmである。背面中央の小札は上下左右の角を切り落としたかのような八角形であり、上方の最大幅2.1cm、下方の最大幅2.3cmである。

右前面の7枚、左前面の7枚、右側頭部後方の7枚、左側頭部後方の6枚、背面中央の5枚の小札は、鉄地金銅張とされる。なお、正面中央の小札外面には布が付着しているが、由来は不明である。

胴巻板 胴巻板は幅3.7cmである。左側頭部の一部と、右側頭部から後頭部にかけての下半を欠損する。上辺に沿って地板第1段の小札下端を留める釘列が巡る。釘頭がうしなわれている箇所もあるが、釘数は地板枚数と同じ55個に加えて、後述する左側頭部での胴巻板の重ね合わせ部にも1個あり、計56個と復元できる。さらに、下辺に沿って地板第2段の小札上端を留める釘列が巡る。欠失のため現状で確認できる釘頭数は29個であるが、いずれも地板1枚を釘1個で接続しているため、本





第 15 図 冑 1 実測図 (内面)

来の数は想定される地板枚数におおむね等しかったと考
える。ただし、後述のように本個体の後頭部に復元配置
できる第16図8では後頭部中央の小札と腰巻板の接続
に釘が3個用いられている。後頭部中央の小札は上半を
欠失しているため胴巻板との接続に釘が何個用いられた
のかは確定できないが、腰巻板との接続個数を参照する
と1個ではなかった可能性もある。

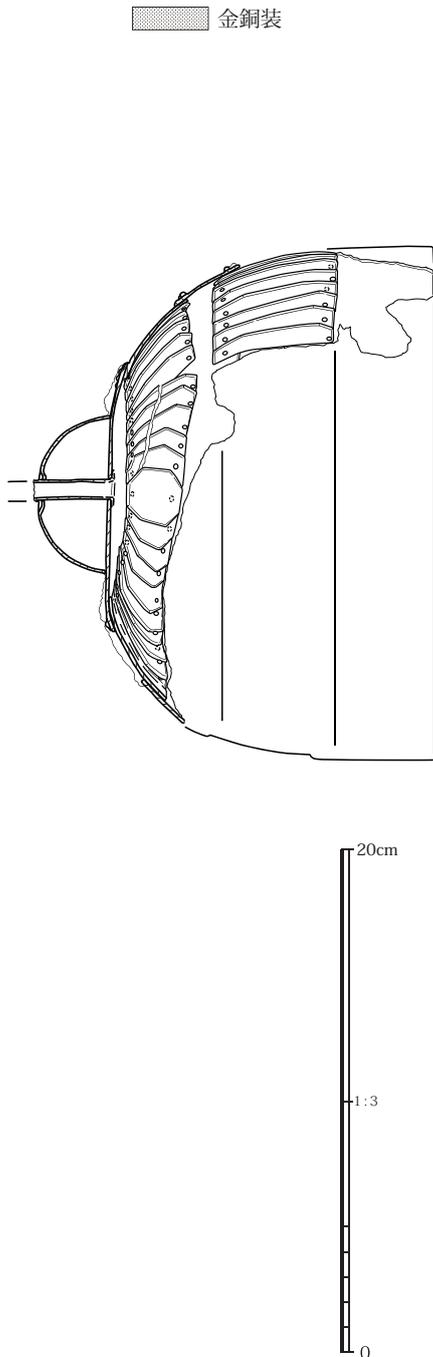
胴巻板の重ね合わせ箇所は、左側側面の僅かに後ろ寄
りの位置にある。重ね合わせは前側が上に位置しており、
重ね合わせ箇所を留める釘が上辺にある。下辺にも
存在した可能性があるが、現状では確定できない。

地板第2段 地板第2段は、高さ約3.3cmである。大
半がうしなわれており確定できないが、遺存箇所をみる
限り地板第1段と第2段の小札の配置が上下でほぼ揃う
ため、本来の地板枚数は地板第1段と同数の55枚程度
であったのだろう。小札の重ね合わせは地板第1段と同
じく、後頭部側が内側に前頭部側が外側となる通則に
則っている。いずれの小札も胴巻板や腰巻板とはそれぞ
れ1個の釘で接続されている。

正面中央の小札は中央部を欠失するが上辺約1.0cm、
下辺約1.3cmの等脚台形とみられる。左右両側の小札は
前頭部側の上下角を切り落としたかのような不整六角形
であり、胴巻板や腰巻板との接続箇所地板が2枚以上
重なることにより生じるいわゆる3枚留めの回避に成功
している。地板同士の重なりのため確定できないが、小
札の幅はいずれも1.5cmほどとみられ、地板第1段のも
のと大きな差はない。小札の展開長は6.4cmである。

正面の9枚、左側面の2枚、左側頭部後方の3枚の小
札は鉄地金銅張とされるが、金銅板の遺存状態はそれほ
ど良くない。欠損箇所が多いが、金銅装の箇所は地板第
1段と1～3枚程度重なりを持ちつつ上下で互い違いに
なるように配置されていたようである。

腰巻板 腰巻板は幅4.0～4.5cmである。前頭部側
と左側頭部後側の一部が遺存するのみである。上辺に
沿って地板第2段の小札下端を留める釘列が巡る。現存
する釘は17個だが、地板1枚に対して1個の釘で接続



5 武 具

しており、本来の総数は地板の枚数に近かったと想定できる。前頭部側には、上辺から約1cm下の位置に底部が取り付けられている。

底部の下の箇所である前額部には金銅板が張り付けられている。前頭部の内面には、下縁に沿って幅3～4mmの範囲で金銅板の痕跡が残る。外面に金銅板を張り付け、端部を内側に折り込んで固定した痕跡である。同様の痕跡は左側頭部にはみられないため、底部の下側にのみ金銅板を張り付けていたと考えられる。

底 部 底部は、正面中央での現存長6.3cmで、現存幅12.6cmである。底部の内端部全体をL字形に折り曲げて腰巻板と接続している。底部と腰巻板を接続する鋲は現状で2個のみが遺存する。

底部の大半がうしなわれており、本来の外縁形態や金銅装などの有無は本個体のみからは復元できない。しかし、第16図として提示した底部の破片は本個体にもなうものと考えられるため、復元が可能である。詳細は後述する。

受鉢破片 第16図1は受鉢の破片である。現存部分で縦3.3cm、横2.8cmで、球状の曲面をなす。以下に述べるほかの破片と同じく胃1のものとしたが確定はできず、胃2の受鉢となる可能性もある。

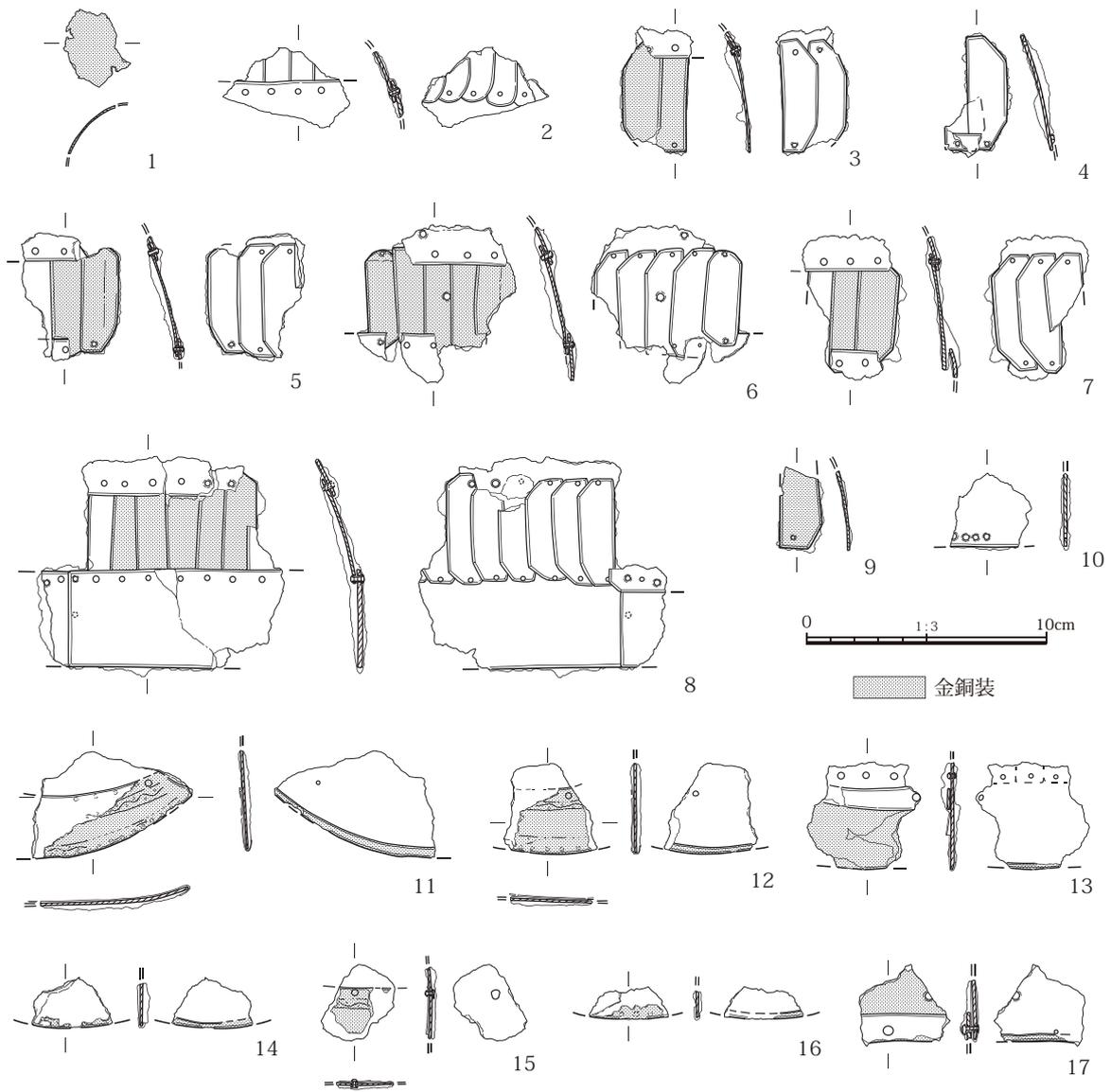
胃鉢破片 第16図2～10・13である。いずれも本来は胃1にもなっていたとみられるが、胃1の樹脂による補填・復元の際に組み込まれなかった破片である。いずれも胃1の各所に配置した際に特に大きな矛盾は生じない。

2～4は左側頭部の胴巻板から腰巻板にかけての破片である。胃1の遺存部位と同じく前頭部側の上下を切り落としたかのような不整六角形をなす。ただし、2のみ小札下端がやや丸みを帯びており、若干様相が異なる。

5～8は右側頭部の胴巻板から腰巻板にかけての破片である。8では内面からみてもっとも右寄りの小札が右端を欠損するものの現存幅2.3cmとなっており、ほかの小札と比べて明らかに幅が広い。また、その小札は腰巻板と3個の鋲で接続されており、明らかにほかの小札と様相が異なる。そのため、この小札は後頭部中央に該当すると考える。その場合、8にみられる腰巻板の合わせ目は、後頭部中央の小札のすぐ右側に位置することになる。なお、この場合も腰巻板の合わせ目が前頭部側が外側に、後頭部側が内側に入り込むこととなり、通則に則る。また、腰巻板の合わせ目は1個の鋲で留められている。また8では連続で金銅装とされる地板の枚数は5枚である。

13は地板第2段の下端から腰巻板にかけての破片である。腰巻板の幅は4.3cmで、地板は小札3枚分が腰巻板と重なり合う部分のみ遺存しているようであるが、外見上はやや判然としない。上縁から1cmほど下方には底部が接続されており、鋲が1個みられる。ただし遺存しているのは底部内縁の折り曲げ箇所のみで、平面部分はみられない。底部よりも下縁側の外面、すなわち前額部には金銅板が張り付けられており、腰巻板下縁で2～3mmほど内面に折り込んでいる。地板の前頭部側上下角が切り落とされている通則から考えて、前頭部側でも右側に復元配置できる。底部を接続する鋲の位置から、さらに位置を絞り込むことも可能かもしれない。

10は配置箇所は不明だが、腰巻板の破片である。下端に4点の鋲孔がある。左端の穿孔が途中で欠損しており、さらに左側に穿孔が連続していた可能性も否定しきれないが、後述する鋲の穿孔は4孔一組のため、腰巻板の鋲孔も4孔一組とみてよい。



第16図 甕1破片実測図

底部破片 11・12・14～16は底部の破片である。外縁端部が弧状をなす厚さ1～2mmの鉄板の外縁部に、幅1.5～2.5cm、厚さ約0.5mmの金銅板を上重ねする。金銅板は外縁端部で5mmほど内側に折り返されて地の鉄板を覆っており、また金銅板の内縁端部付近は地の鉄板と鉚留されている。金銅板と鉄板を接続する鉚の鉚頭径は約3mmで、金銅製である。11の右側には金銅板の端部が遺存しており、底部左側端部であることがわかる。甕鉢本体に接していたと考えられるが、折り曲げ部分は遺存していない。底部と腰巻板の接続に際しては、地の鉄板部分の内縁端部のみを折り曲げており、金銅板は折り曲げていなかったことがわかる。

金銅板の外縁付近と内縁付近にはそれぞれ文様帯が外形に沿って弧状に巡る。外縁付近には端部に近接する位置に外面からの打ち込みによる点文が、心々間約4mm間隔で並ぶ。その内側には蹴り彫りと打ち込み点文による波状列点文があり、さらに内側に蹴り彫りによる弧線が外形に沿って1条巡る。内縁付近では外縁側から蹴り彫りによる弧線、波状列点文、弧線がおよそ1cmの幅で巡る。内縁端部には心々

5 武 具

間約1cmで打ち込みによる点文があるが、確認できない箇所もある。蹴り彫りの単位はいずれも1mmほどで、連続して配される。外縁側の蹴り彫りは右側頭部側から左側頭部側へ打ち進められているが、反対に内縁側では左側頭部側から右側頭部側へと打ち進められている。

破片はいずれもかなり細片化しているが、外縁はいずれの箇所も単純な弧状であり、割り込み部はみられない。そのため底部外縁は花卉状ではなく弧状をなし、底部全体として団扇形をなしていたと考えてよい。ただし、冑2とは異なり、底部に金銅板を張り付けた箇所は外縁部付近のみである。

そのほかの破片 17は2枚の鉄板が2cmほどの重なりをもって重なっており、さらに上層の鉄板には金銅製の鋲を用いて金銅板を張り付けている。冑鉢本体や底部片の可能性を考えたが、想定復元による冑鉢本体には該当する箇所がなく、金銅板に蹴り彫りもみられないことから底部にも該当しない。確定はできないが次に述べる鋲の最下段に鋲留される袖鋲となる可能性も考えておきたい。

②冑1付属鋲（図版10・11、第17図）

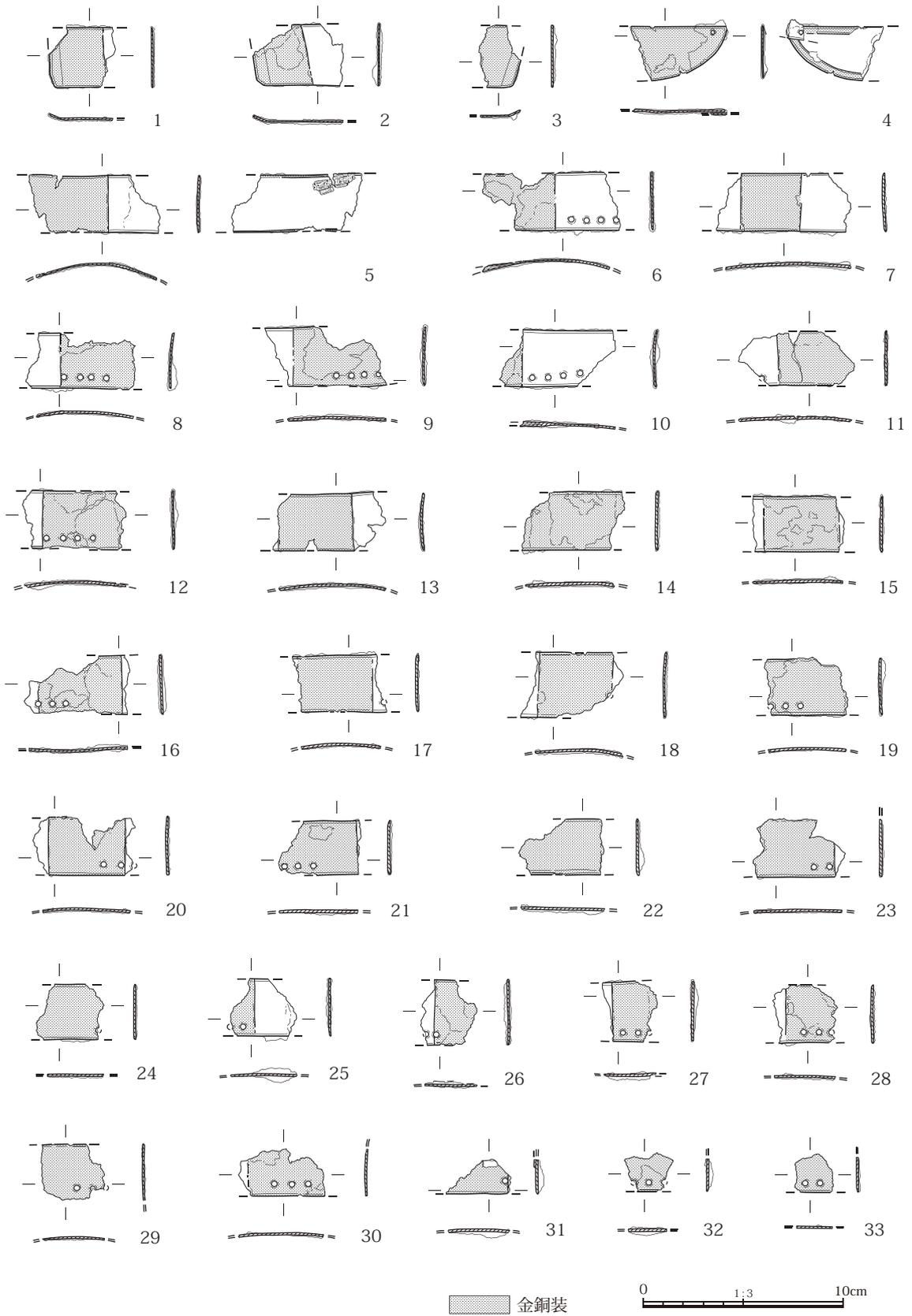
多数の破片が存在するが細片化がいちじるしく、段数や詳細な全体形は確定できない。いずれも幅約3.1cm、厚さ約1.5mmである。金銅装の部分と鉄地のままの部分交互に配置される。金銅板の横幅は2.0～3.1cmであるが、金銅板2枚分が同一個体に遺存するものはなく、鉄地のままの部分の横幅は不明である。現状では3.1cmのものが最大である。金銅板は大部分が剥離してうしなわれているが、実測図では金銅板が遺存していなくても本来配されていた範囲を全て網掛けとした。後述する肩甲も本資料と同じく金銅装の部分と鉄地の部分が交互に配置されるため、本節で提示した資料の中にも肩甲が混在している可能性は否定できない。発掘報告による限り、離れた位置から出土した冑2付属の鋲片が混在している可能性は低いが、盗掘坑からの出土などの可能性を考えれば、冑2のものが含まれる可能性もある。

緘孔はいずれも4孔一組で、遺存する個体でおよそ20箇所となるため、すべてを冑1にともなう鋲片としたならば、4段構成で緘孔4方向とすると緘孔の数が多くなりすぎる。そのため少なくとも5段構成4方向もしくは4段構成5方向、あるいは5段構成5方向などが想定できる。ただし、肩甲や冑2にともなう鋲片が混在したと考える場合には4段構成4方向も想定可能である。

1と2は左側前端部で、3は右側前端部である。いずれも前端は上方が僅かに前方に突出し、さらに前端を7mmほどの幅で外側に僅かに折り曲げている。前端から2.5～3.0cmほどの範囲には金銅板が剥離した痕跡がみられ、当該部分の内側の上縁・下縁には金銅板を内側に2～3mmほど折り込んだ痕跡がある。鋲前端部は本来全ての段で揃っていたと考えられるため、前端部は左右いずれも全て金銅装であり、続いて鉄地の部分が縦に揃って並んでいた可能性が高い。

4は左側袖鋲の後端である。後端部で下縁が弧状をなして上縁につながる。外面には部分的に金銅板の剥離痕跡がみられ、内面の端部には金銅板を折り込んだ痕跡が4mmほど良好に遺存する。後端部分には一段上の鋲の細片が鋲留されているが、それには金銅板の折り込み部分がみられないため袖鋲先端部分で金銅装部分と鉄地のままの部分が入れ替わっていたのであろう。なお、先述の通り、第16図17も袖鋲部分の破片の可能性がある。

6・8～12・16～21・23～33には緘孔がみられ、また金銅板の剥離痕跡がある。一組の緘孔全てを遺存する個体は限られるが、金銅張の箇所と緘孔の位置関係が類似するものがある。



第17図 冑1付属鍔実測図

6・10・17は緘孔が4孔とも鉄地部分に収まるとみられ、かつ左端の緘孔が金銅板との境界に近い。8・12は緘孔が4孔とも金銅板の範囲内に収まり、かつ左端の緘孔付近に金銅板の左端が位置する。28・30も左端の緘孔と金銅板の左端の位置がやや離れるが比較的類似している。27も欠損により確定できないが、28・30に類似する可能性がある。9・25は緘孔が4孔とも金銅板の範囲内に収まるとみられるが、右端の緘孔付近に金銅板の右端が位置する。欠損により確定できないが、29も同様の可能性が高い。20・23は左側2孔が金銅板の部分に、右側2孔が鉄地の部分に位置するとみられる。確定はできないが、16・19・21は右側3孔が金銅板の部分に、左端1孔が鉄地の部分に位置する可能性が高い。27はこの類型となる可能性もある。

以上のように、緘孔の位置と金銅張の位置との関係が一致する個体があることは、金銅装と鉄地部分の配置がランダムになされたのではなく、縦縞状や市松模様などある程度規則的な配置がなされていた可能性を想起させる。その中でも現存する前端部はいずれも金銅装という点からは、縦に金銅装の部分の揃った縦縞状の可能性を高く考えることができる。ただし、現状で遺存する前端部分は1～3の3点のみであり、本来鉄地のままの前端部分がほかに存在した可能性は否定できない。また、仮に前端部が全て金銅装であったとした場合にも、必ずしもそこから後ろ側も全てそれに倣って金銅装の部分の揃ったとは確定できず、別個の幾何学文様を構成していた可能性も否定できない。

なお、比較的大型の小札が用いられているため後頭部中央の下段に該当すると考えた第16図8の腰巻板には鋳孔がみられない。鋳孔を5方向に配置する場合、後頭部中央の部分に鋳孔が配置されるのが一般的であるが、そういった状況はみられない。もちろん、8は後頭部中央から左寄りの部分がうしなわれているため僅かに左寄りの箇所にも鋳孔が設けられていた可能性は否定できないが、そのように考えると胃1の鋳孔は5方向ではなく4方向であった可能性がもっとも高いことになる。このように鋳孔が4方向と考え、提示した破片がいずれも胃1の鋳孔とした場合には、緘孔の合計数が20箇所ほどとなるため、5段構成であったと復元できる。

以上をまとめると、復元案の一つとして、5段構成で最下段の前端部付近には袖鋳孔が付属し、緘孔は4方向、金銅装の部分が縦縞状に配置されていた可能性が想定できる。ただし、これはさまざまな前提の上に成り立った結論であり、特に金銅装部分の配置や段構成については、確定できない部分が多い。

③小 結

胃1と鋳の特徴をまとめると、以下のようになる。

1. 伏鉢および前額部、地板の一部、底部端部を金銅装とする。同様に、頂部装飾・前額部・地板・底部を金銅装とする例として、五條猫塚古墳出土の胃2をあげうる。また、可能性のあるものとしては、滋賀県塚越古墳出土小札鋳留眉庇付胃〔林・細川 2012〕がある。橋本達也氏の金銅装眉庇付胃の装飾法の分類案〔橋本 2005 p.278〕では「部分金銅装A」に相当する。
2. 地板第1段は55枚の小札、地板第2段は復元値であるが55枚程度の小札で構成される。
3. 地板のうち、第1段は32枚を、第2段は復元値であるが37枚を金銅装とするとみられる。金銅装の箇所は、上下が千鳥状になるように配置される。
4. 底部は「Ⅲb型」〔橋本 1995 p.8〕とみられ、蹴り彫りによる文様をほどこす。

5. 冑鉢本体の鋳孔、鋳の緘孔は4孔一組で、冑鉢本体の後頭部に緘孔がみられないため、4箇所配置している可能性が高い。
6. 鋳は多段構成で袖鋳が接続される。段構成は不明だが、緘孔の数から5段の可能性もある。各段の下辺に近い位置に緘孔を持ち、古谷毅氏の分類〔古谷 1988 pp.10-11〕の「D形式」に相当する。
7. 鋳は部分的に金銅張とされている。現存する前端部は全て金銅装であり、各段で金銅板の位置が左右に揃い、金銅装の部分と鉄地の部分とが縦縞文様をなしていた可能性がある。（川畑 純）

④冑 2（図版 12～17、第 18・19 図）

構成と法量 冑全体の構成としては、伏鉢および腰巻板の底部接合部の下部、地板の一部、底部を金銅装とする、金銅装小札鋳留眉庇付冑である。受鉢と管を欠損し、底部を部分的にうしなうが、ほぼ全形を留める。冑鉢本体は伏板・地板第1段・胴巻板・地板第2段・腰巻板からなる通有の5段構成である。

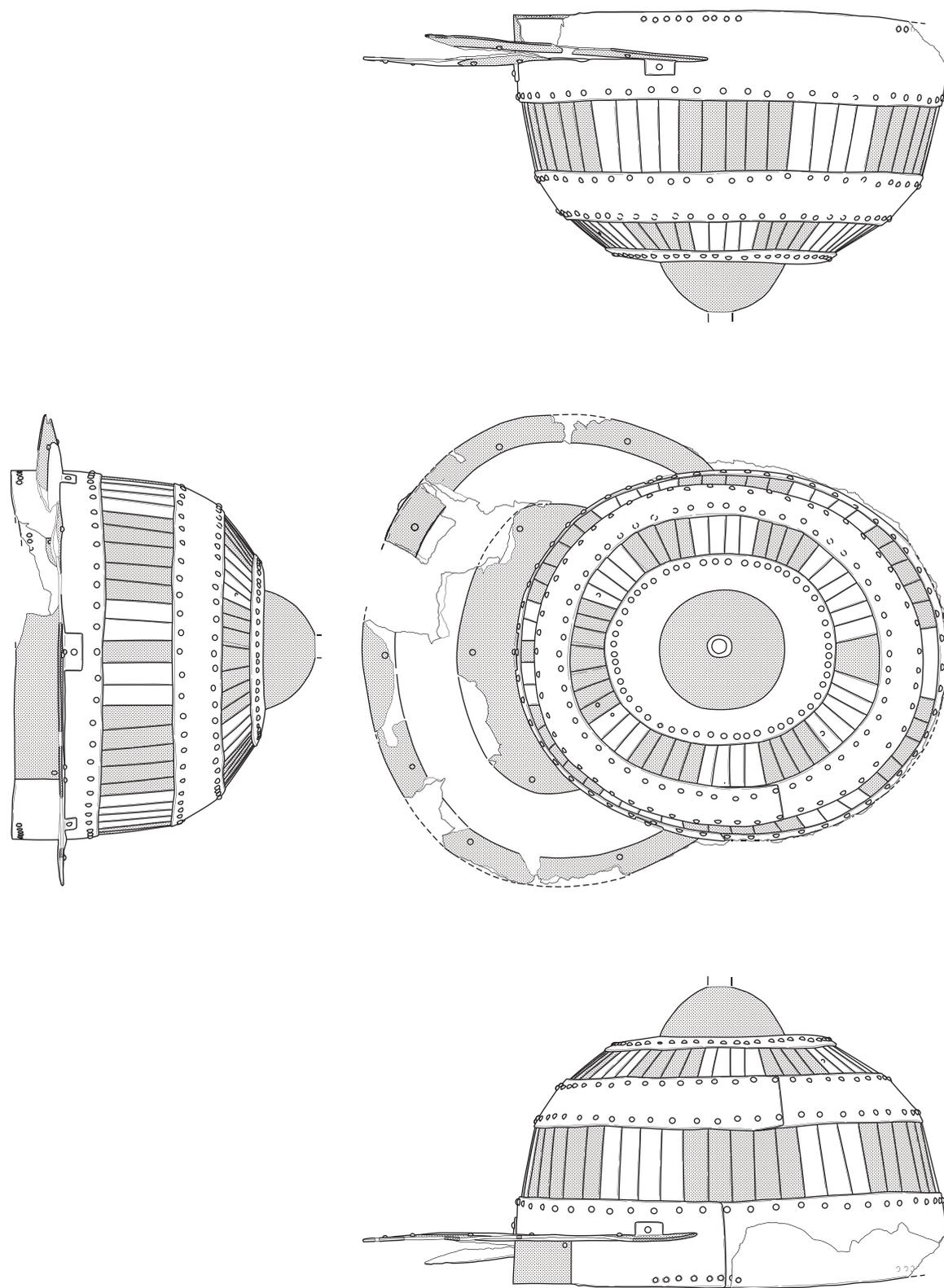
各部の計測値は、現存高 14.7cm、全長 28.4cm、最大幅 23.2cm（復元値）、冑鉢本体の前後径 21.0cm、左右径 18.2cm、鋳頭径 3mm、鋳頭高 1mm、鋳孔径 2mm、現重量 995.1g である。厚さ 1～2mm 程度の鉄板を用いる。保存処理はおこなわれていない。

伏鉢・管 伏鉢は鉄地金銅張で、高さ 2.5cm、前後径 6.0cm、左右径 5.9cm である。伏鉢の頂部に 7mm の孔があり、その周囲には径 1.1～1.2cm の管の痕跡が残存する。孔の内部では、厚さ 2mm 弱の鉄板を直径 8mm 程に丸めた筒状品が伏鉢の上端で上部を折損している状況を確認できる。冑鉢本体の内面からは、伏板から突出した筒状品の端部を切り分けて、4方向に折り曲げる様子を見て取れる。以上の状況から、筒状品は、受鉢・管・伏鉢・伏板を貫通させて両端をかしめることで、これらを固定したものと考えうる。

伏板 伏板は高さ 5～8mm、前後径 11.2cm、左右径 9.5cm である。周縁に沿って地板第1段の地板上端を留める鋳列が巡る。現存する鋳は 52 個を数える。このほか鋳頭を脱落したもの 1 個があり、本来の総数は 53 個となる。

地板第1段 地板第1段は、高さ 1.2～1.5cm であり、小札 50 枚で構成される。小札の重ね合わせは、背面中央の小札に順次上重ねとする通則に全て則っている。すなわち、正面中央に小札 1 枚を配置し、順次外面からみて下重ねに向かって右側に 23 枚、左側に 25 枚の小札を重ね、もっとも下重ねとなる背面中央に幅広の小札 1 枚を配置する。内面の観察によれば、小札の四隅は丸く裁断されており、隅丸台形を呈する。背面中央の幅広の小札は上辺長約 1.5cm、下辺長約 3.1cm、展開高約 4.3cm であり、それ以外の小札は上辺長約 0.9cm 前後、下辺長 1.3cm 前後、展開高約 4.0cm 前後である。なお、正面の 7 枚、左前面の 4 枚、左背面の 4 枚、右前面の 4 枚、右背面の 4 枚、背面中央の 1 枚の小札は、金銅張によって装飾がほどこされている。

胴巻板 胴巻板は高さ 2.3～2.7cm、前後最大径 18.8cm、左右最大径 16.8cm である。上辺に沿って地板第1段の小札下端を留める鋳列が巡る。直接確認できる鋳は 48 個を数え、このほか錆で直接確認できないものが 6 個あり、総数は 54 個となる。さらに、下辺に沿って地板第2段の小札上端を留める鋳列が巡る。直接確認できる鋳が 53 個あり、このほか錆で直接確認できないものが 1 個、総数は 54 個を数える。なお、胴巻板の重ね合わせ箇所が左側の側面、僅かに後ろ側にある。重ね合わせは前側が



第 18 图 冑 2 実測图 (外面)

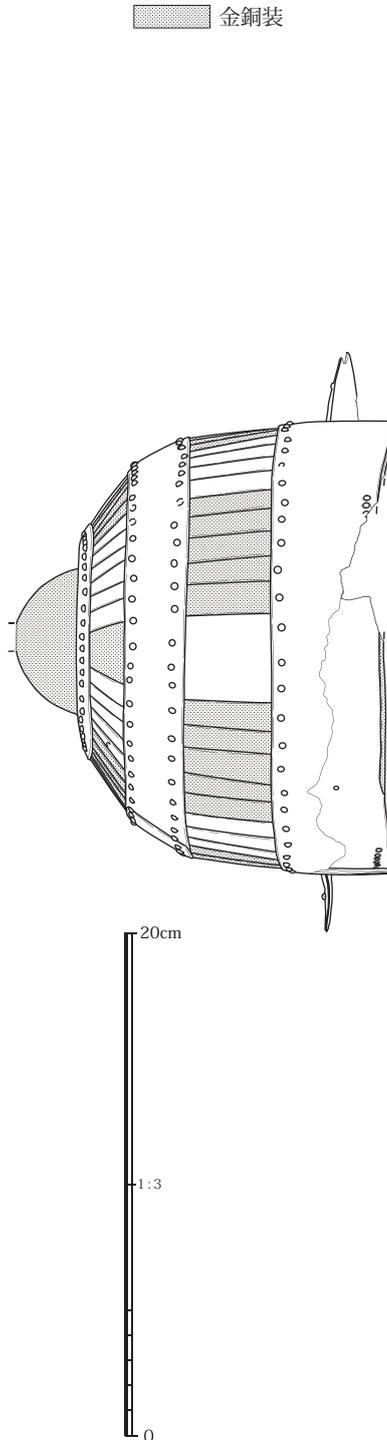
上に位置しており、重ね合わせ箇所を留める鉾は、上辺と下辺に認められる。

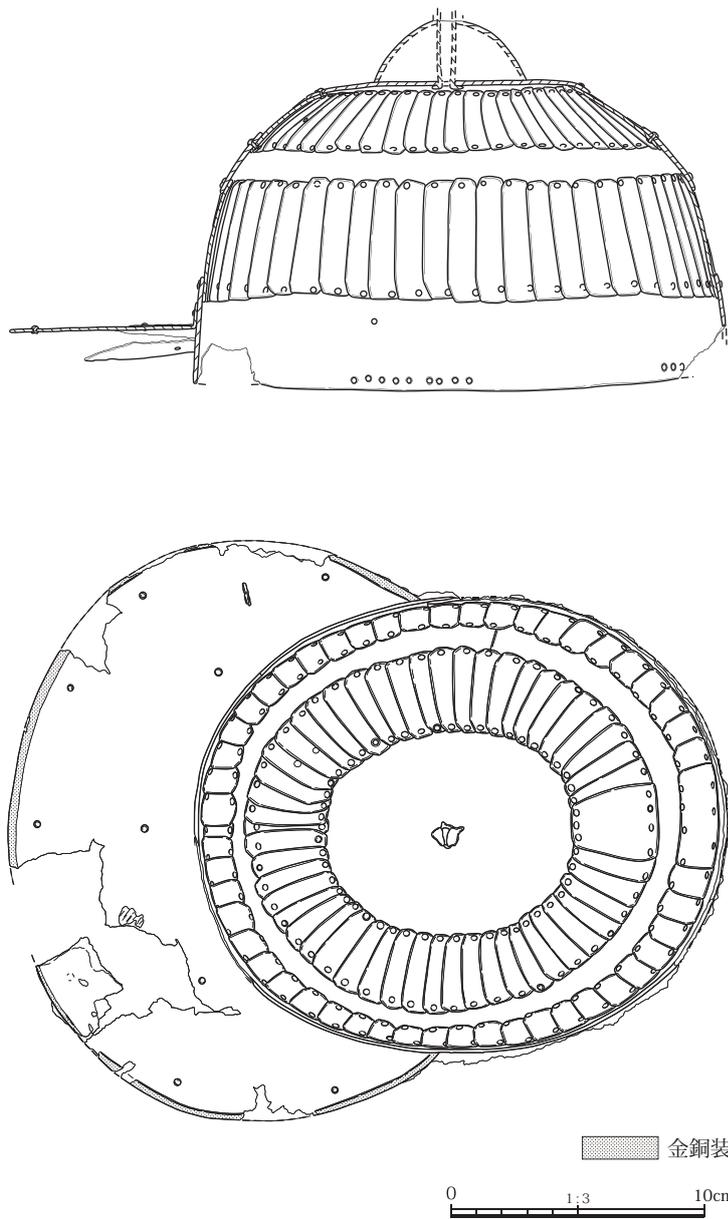
地板第2段 地板第2段は、高さ3.2～3.6cmであり、小札51枚で構成される。小札の重ね合わせは、背面中央の小札に順次上重ねとする通則に全て則っている。すなわち、正面中央に小札1枚を配置し、順次外面からみて下重ねに向かって右側に24枚、左側に25枚の小札を重ね、もっとも下重ねとなる背面中央に幅広の小札1枚を配置する。内面の観察によれば、地板第1段と同様に小札の四隅は丸く裁断されており、隅丸台形を呈する。背面中央の幅広の小札は上辺長約3.7cm、下辺長約4.3cm、展開高約5.2cmであり、それ以外の小札は上辺長約1.2cm前後、下辺長1.4cm前後、展開高約5.0cm前後である。なお、正面の1枚、左前面の5枚、左側面の5枚、左背面の5枚、右前面の5枚、右側面の5枚、右背面の5枚の小札は、金銅張によって装飾がほどこされている。

腰巻板 腰巻板は高さ4.1～4.5cm、前後径21.0cm、左右径18.2cmである。上辺に沿って地板第2段の小札下端を留める鉾列が巡る。現存する鉾は52個を数え、このほか錆により視認できない鉾が1個あり、総数は53個となる。腰巻板の前半部には、上辺から1.6～2.2cm下の位置に底部が取り付けられている。底部左後端部よりもやや後方に、腰巻板の重ね合わせ箇所がある。重ね合わせ箇所を留める鉾は、上辺に沿って巡る鉾のほかには認められない。

底部の下（以下、前額部）には、金銅板を取り付けている（図版15-2）。外面からみえる部分で高さ約2.1cm、幅11.8cm、展開幅13.2cmとなる。上端を底部に接するようにして金銅板の左右両端を鉾留し、下端を腰巻板内面に2～3mm折り返すことで固定する（図版15-3）。波状列点文や裏面打出列点文などの装飾はほどこされていない。金銅板を取り付ける前額部のみ、腰巻板の下辺に浅い抉りを入れる。

腰巻板の下辺に沿って左右側頭部および右後頭部の3箇所に綴孔列が穿たれる。左後頭部にも同様に綴孔が存





第19図 冑2実測図(内面)

在したものであるが、欠損のため不明である。欠損のみられない、全容を把握できる右側頭部では9個の穿孔がほどこされ、欠損のある左側頭部には7孔、右後頭部には3孔が穿たれる。綴孔径は2mmである。

底部 底部は、正面中央での前後長7.5cm、最大幅23.2cm(復元値)である。冑鉢本体との接合方法は、底部の端部を全体に折り曲げて鉸留するのではなく、底部の3箇所において舌状ののびる突起を残し、これを折り曲げて突起と冑鉢本体とを鉸留する、ほかに例のないものである(図版15-5~8)。

底部は、平面形が三日月形を呈するものであり、先端部分に幅1.4cmに渡って帯状の金銅板を鉸留する(図版15-1)。現存する鉸が7個あり、さらに1個の存在を復元しうるので、鉸の本来の総数は8個となる。金銅板の端部

は、底部の端を幅3~4mmほど裏面側に折り曲げて固定する(図版15-4)。また、冑鉢本体に近い部分においても、三日月形に加工した別の金銅板が鉸留される。鉸留は3箇所においてなされる。底部において金銅板を鉸留する鉸はいずれも金銅装がほどこされている。なお、本例は橋本達也氏の分類のⅢb型の標識資料〔橋本1995 p8〕となるものである。

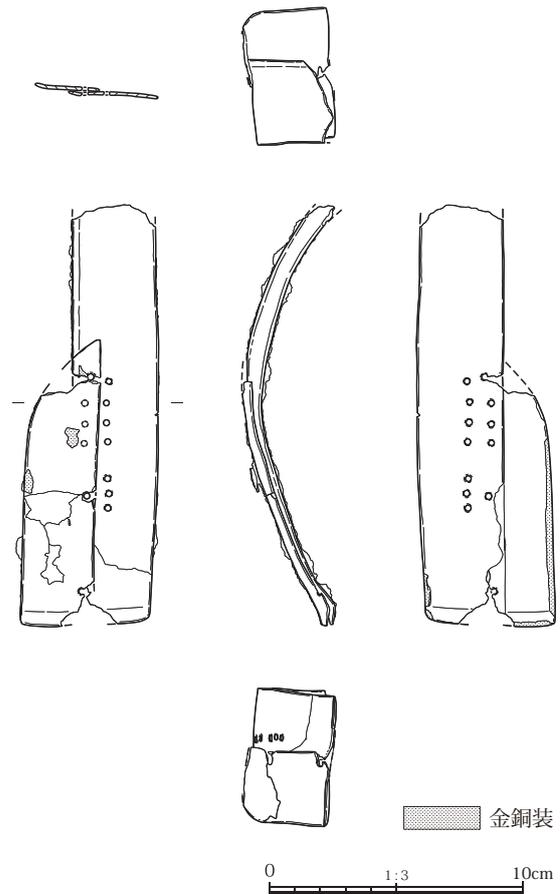
⑤冑2付属鍔(図版17、第20図)

左側面部に相当する破片である。最下段の破片とみられ、下辺には袖鍔が付属する。

最下段は、長さ16.7cmを留める。高さは約3.5cmである。鉄板の厚さは1.5mmである。鉄板の前端から6mmほどをやや外方に折り曲げる形態を持つ。下端の前端付近に1孔、それより約4cm後方において

さらに1孔、さらに約2cm後方に4孔一組の穿孔がほどこされる。前端より後方の2箇所については側面部に位置するものであり、側面部にはさらに上方、各段の中央付近に3孔一組と4孔一組の穿孔がみられる。孔径は3mmほどである。有機質がまったく遺存していないため、どのように孔が使用されたのかは不明である。位置関係からおそらくは鉄板の中位に並ぶ4孔一組の穿孔列が緘孔として機能したものと考える。製作過程において設計変更などがなされたために、不使用孔となったものであろうか。

なお、本例については、残存する部品の表面に金銅装がほどこされる。鉄地に金銅板を張る構造であり、金銅板の端部を幅3mm程折り返すことによって固定している状況を観察できる。ただし、金銅装の遺存状態は極めて悪く、全体に断片的にその存在を確認できるのみである。



第20図 冑2付属鍔実測図

⑥小 結

冑2と鍔についてその特徴をまとめると、以下のようなになる。

1. 伏鉢および前額部、地板の一部、底部を金銅装とする。同様に、頂部装飾と前額部、地板、底部を金銅装とする例として、五條猫塚古墳出土の冑1をあげうる。また、可能性のあるものとしては、滋賀県塚越古墳出土小札鉾留眉庇付冑〔林・細川 2012〕がある。橋本達也氏の金銅装眉庇付冑の装飾法の分類案〔橋本 2005 p.278〕では「部分金銅装A」に相当する。
2. 地板第1段を50枚の小札、地板第2段を51枚の小札で構成する。
3. 幅広腰巻板を使用する。
4. 底部は「Ⅲb型」である。
5. 底部端部接合手法はほかに例のないものであり、底部の3箇所において突起を舌状に残して、これを折り曲げて冑鉢本体と鉾留する。
6. 小札鉾留眉庇付冑の鍔孔、鍔の緘孔は4孔一組と推測される。
7. 鍔には袖鍔が付属することから、多段鍔と想定できる。
8. 鍔には残存する全面に金銅装がほどこされる。
9. 鍔の鉄板中位の穿孔列が緘孔と想定され、古谷毅氏の分類〔古谷 1988 pp.11-12〕による「第Ⅱ形式」に相当する。

(岩本 崇)

(2) 短 甲

①短甲の個体識別

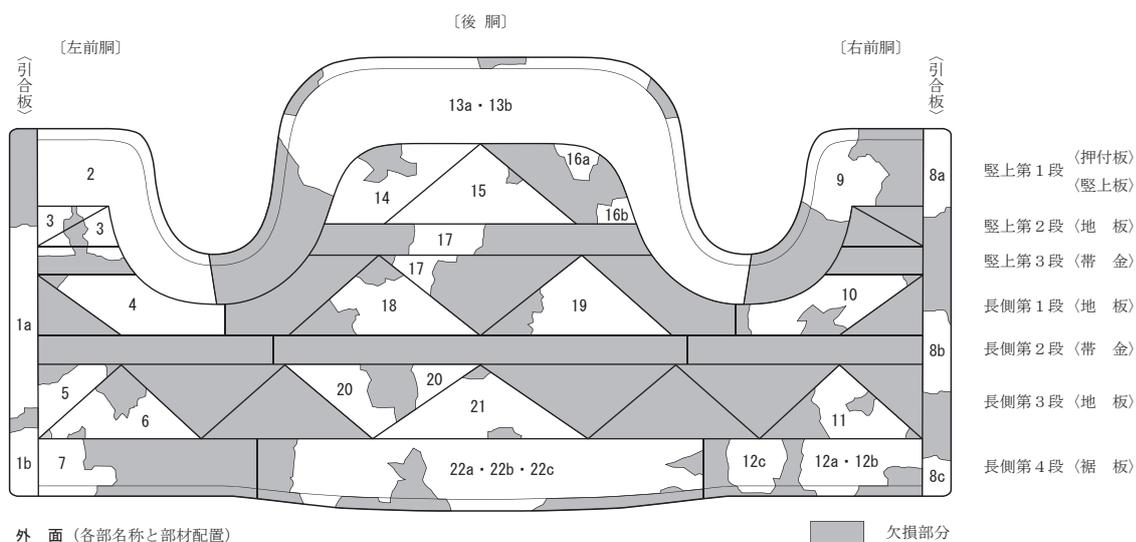
短甲の出土位置 短甲片は、全て竪穴式石槨内から出土している。発掘報告の記載にあるように、石槨内は過去に盗掘されており、短甲もその影響を受けている。石槨内北西側では、後胴押付板および左前胴竪上板などの大きな部材片のほか、多数の三角形の地板が比較的まとまって検出されたことから、この付近に三角板革綴短甲が副葬されていたものと想定されている〔網干 1962 p.29〕。そして石槨内南東側においては、後胴の押付板が確認されている。ただし、後胴押付板以外に短甲片が存在したかについては言及されていない。したがって、発掘調査時においては、短甲片のほとんどが石槨内北西側から出土したようである。

発掘報告での掲載状況 短甲は、後胴竪上第1段の押付板の点数から、少なくとも2領以上存在したことが指摘されている〔網干 1962 p.84〕。発掘報告では実測図・写真図版を合わせて計10点の短甲片が掲載されており、おおむね遺存状態が良好で、なおかつ部位を確定できる破片を選択して報告したようである。特に三角形地板に関しては、「三角板は多量にあるが、そのうち形のわかるものをあげた」〔網干 1962 pp.84-85〕と記載されている。

再整理の過程 そうした状況を踏まえ、保管されている短甲片の数を確認したところ、掲載された破片数を大きく上回り、なおかつ接合可能な個体や三角形地板以外の破片も多く含まれていることが判明した。したがって、短甲の地板構成などに関する情報が得られる可能性が高いと判断し、以下の手順で整理を進め、個体識別および部位同定をおこなった(第21図)。

1. 発掘報告の出土状況図にみられる短甲片と掲載実測図・写真図版との照合
2. 保管されている短甲片と発掘報告掲載の出土状況図および遺物実測図・写真図版との照合
3. 保管されている短甲片全体の接合検討、形態から推定される部位の同定

作業2を経て、短甲2領分の後胴押付板を確認した。すなわち、発掘報告記載の石槨内北西側および



第21図 短甲1展開模式図

南東側で検出された後胴押付板である。再整理をおこなうにあたり、前者を「短甲1」、後者を「短甲2」と呼ぶことにした。接合後の破片数は38点であり、接合作業を経てもなお、発掘報告に掲載されている点数を大きく上回っている状況が明らかとなった。

発掘報告の記載にもあるように、短甲片は石槨内北西側、すなわち短甲1の後胴押付板が確認された周辺にまとまっている。短甲2の後胴押付板が検出された南東側とは、被葬者を挟んで2mほどの距離がある。したがって、北西側の短甲片のまとまりは、そのほとんどが短甲1に帰属するものとみて大過ないであろう。また、先述のように南東側では、短甲2の後胴押付板が確認されたことのほかに、短甲片に関する記載はない。後述の観察所見で述べるように、接合検討の過程においても、短甲1の後胴押付板の周辺で検出されたと考えられる破片とほかの破片が接合するにしたいが、位置関係が明確になったものなどが多く存在する。

結果として、保管されている短甲片のほとんどが短甲1に帰属するものと考えられ、それに該当しないものは短甲2に帰属するものと判断した。計38点の短甲片のうち、33点が短甲1、5点が短甲2に該当する。なお、3領以上の短甲の存在を示す破片は確認できなかった。(細川晋太郎)

②短甲1 (図版18~21、第21~27図)

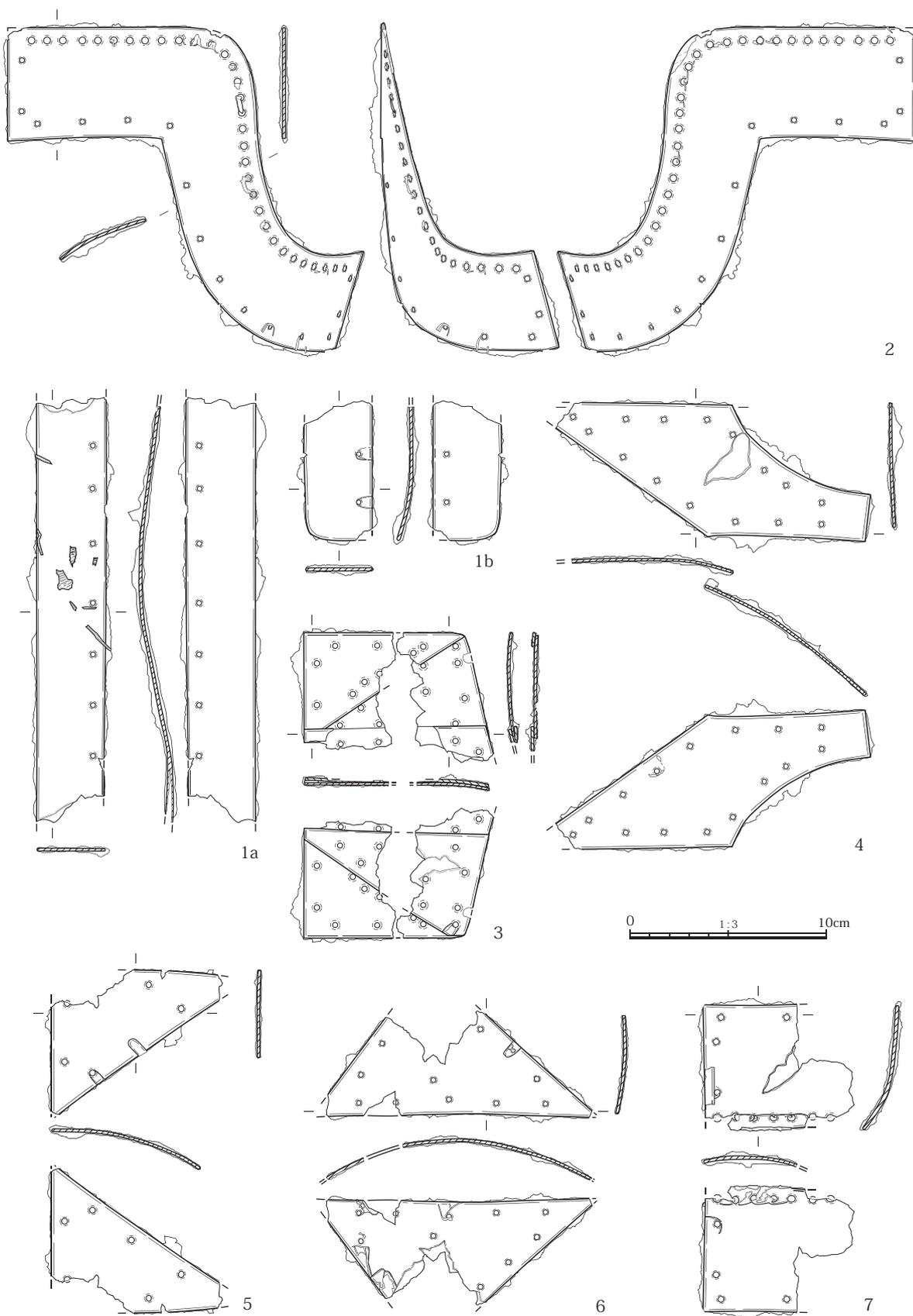
概要 地板は破損がいちじるしく、短甲全体の残存率は60%程度である。長側第2段の帯金は前胴・後胴ともに遺存しないが、そのほかの鉄板の残存状況から、竪上第3段・長側第4段の計7段で構成される胴一連の三角板革綴短甲と判断できる。現状で確認できる地板の数は25枚である。前胴が左右対称の構成であると仮定した場合、本来の地板の枚数は41枚に復元できる。革綴および外縁にほどこされた革組覆輪の遺存状態は良好とはいえず、部分的に観察できる程度である(図版20-1・3・4)。革綴の技法は高橋工氏の分類による「綴第1技法」に該当する〔高橋1995 p.40〕。この技法は「第一形式」〔末永1934 p.27〕、「第一手法」〔吉村1988 p.36・高橋1993 p.17〕、「直交綴」〔橋本1996 pp.263-264〕とも呼ばれる。なお、地板の表面では、黒漆が塗布された部分を観察できる(図版20-2)。

以下の観察所見において、「縦」「横」「左」「右」などの部位を指し示す表記は、着装者からみた場合の方向を示す。

前胴の構成 左前胴は長側第2段の帯金をうしなっているが、ほかの段は地板が残存する。竪上第2段地板や長側第1段の不整形地板などの存在により、位置関係をおおむね把握でき、12枚の鉄板により構成されていたと復元できる。

一方、右前胴は左前胴に比べると欠損部位が多く、竪上第2段・第3段および長側第2段は残っていない。長側第1段において左前胴と左右対称になる不整形地板を使用していることから、左前胴と同じ地板構成であった蓋然性が高い。

左前胴 (第22図) 引合板は、下辺を含む1片(1b)と、湾曲の状況から腹部および胸部に位置すると考えられる1片(1a)が残存しているが、上辺を含む部分は欠損している。残存率は2片合わせて70%ほどである。このうち1aは、発掘報告の図版第27に掲載された破片と今回の整理過程で接合関係が判明した破片を合わせたものである。1aの外面には、矢柄の一部と想定される断面半円状の木質が付着している。綴孔の心々間の距離は1.4cm前後である。1aは残存上下幅21.8cm、中央付近の



第22图 短甲1实测图(1):左前胴

横幅 3.5cmである。1 b は残存上下幅は 7.2cm、横幅 3.4cmである。下辺は一方が弧を描くよう処理されているが、裾板側は欠損しており本来の形状は不明である。

2 は竪上第 1 段の竪上板であり、一部に欠損が認められるものの、ほぼ完形に近い遺存状態である。発掘報告の第 48 図 1 に該当する。引合板側の端部長は 5.8cm(復元長)、後胴押付板側の端部長は 5.1cm、竪上第 2 段地板と接する直線部分の長さは 7.8cmである。全体の縦幅は 16.6cm、横幅は 18.1cmである。上辺には革組覆輪がほどこされているが、内外面ともに遺存状態は良好ではなく、覆輪技法は明らかにできない。しかし、かろうじて引合板側から後胴側に向かってほどこされているのを確認できる。覆輪孔の心々間の距離は 0.8cm前後である。なお外面には、矢柄と考えられる断面半円状を呈する木質が付着している。

3 は竪上第 2 段の地板であり、2 枚の三角形地板が接続した状態を保ったまま大きく 2 片に分かれている。また、それぞれ竪上第 3 段の帯金の一部がともなっている。竪上第 2 段は、2 枚の三角形地板を用いて縦幅 5.6cm、上辺幅 8.2cm、下辺幅 9.4cm (いずれも復元値) の台形状の地板を構成している。三角形地板の合わせ目には、心々間 0.8cm前後の間隔で綴孔が設けられている。下に配置される三角形地板の中央付近には、ワタガミ受緒孔と考えられる孔が 1 箇所確認できる。欠損部分があるため定かではないものの、本来は 2 孔一組を成していたであろう。

4 は長側第 1 段の不整形地板であり、発掘報告の第 48 図 4 に該当する。保管されていたほかの破片と接合することが判明し、全形がほぼ明らかになった。残存上辺幅 7.7cm、下辺幅 8.0cm、後胴側の端部長は 2.4cm、中央部付近の縦幅は 6.9cmである。

長側第 3 段を構成する地板は 2 点残存している。5 は引合板と接続する三角形地板である。それぞれの角が欠損している。残存縦幅 7.4cm、残存横幅 8.7cmである。6 は上部および下辺の両端を欠損している。地板中央付近において、腰緒孔を一つ確認できる。残存縦幅 5.4cm、残存下辺幅 13.3cmである。7 は長側第 4 段の裾板片であり、30%ほどが残存している。下辺には革組覆輪が認められるが、遺存状態は良好ではない。引合板との綴孔は二つある。中央付近での縦幅 6.5cm、残存横幅 7.6cm、残存上辺幅 4.8cmである。

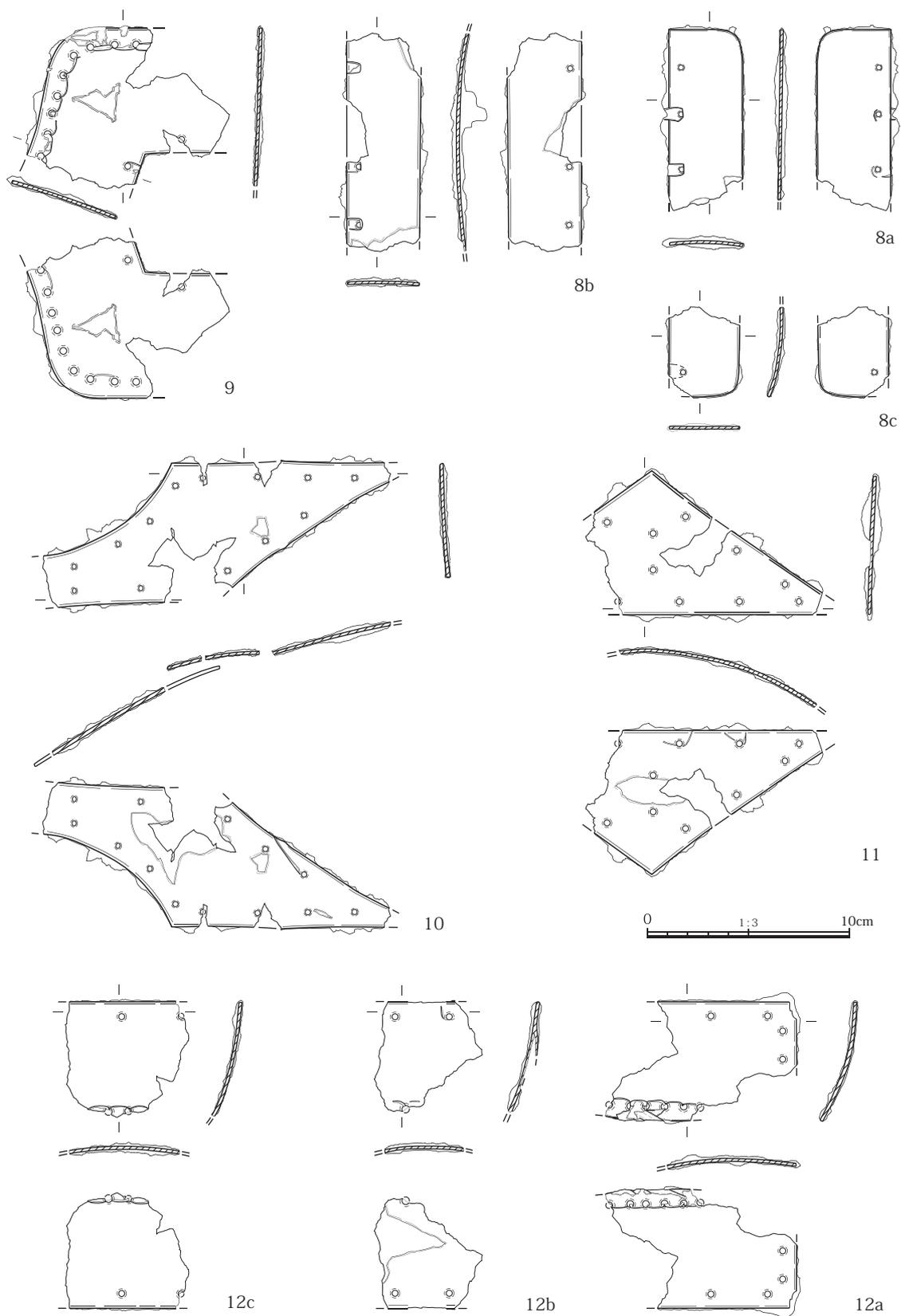
右前胴 (第 23 図) 引合板は 3 片あり、上辺および下辺に該当する破片が確認できる。8 a は上辺を含む破片である。上辺は竪上板と接する側を直角に、もう一方は弧を描くように加工している。残存縦幅 9.0cm、横幅 3.65cmである。8 b は残存縦幅 10.9cm、横幅 3.6cmで、湾曲具合から胸部付近に該当するものと考えられる。8 c は下辺を含んでおり、残存縦幅 4.5cm、横幅 3.5cmである。下辺は、裾板側が欠損し本来の形状を留めていないが、もう一方は弧状に処理されている。

9 は竪上第 1 段の竪上板片である。引合板側および脇部側が大きく欠損しており、残存縦幅 8.1cm、残存横幅 10.0cmである。上辺には革組覆輪が遺存するが、その状態は良好ではなく、技法などは不明である。覆輪孔の心々間の距離は 1 cm前後である。

10 は長側第 1 段を構成する不整形地板である。引合板側および後胴側の端部などが欠損し、中心付近では歪みが生じている。縦幅 7.2cm、残存上辺幅 10.6cm、残存下辺幅 5.2cm、後胴と接する端部付近の縦幅は 2.6cmである。

11 は長側第 3 段の三角形地板である。後胴側が大きく欠損している。中心付近には腰緒孔があり、

5 武 具



第 23 图 短甲 1 实测图 (2) : 右前胸

二つの孔が縦に並んでいる。残存縦幅 7.2cm、残存下辺幅は 9.4cmである。

裾板は 3 片ある。そのうち 12a と 12b は接合関係にあるが、破断面が錆化のため変形しており接着できない。全体としての残存率は 80%程度である。12a は引合板と接する部分を含む破片である。発掘報告では第 48 図 8 として右下の下辺を含む部分が破片として図化されているが、今回の検討作業により接合することが判明した。下辺には革組覆輪がほどこされており、引合板側から後胴側に向かう状況を確認できる（図版 20 - 4）。覆輪孔の心々間の距離は 0.9cm前後である。12b を合わせた上下幅は 5.9cm、残存上辺幅は約 10.2cmである。12c は下辺に革組覆輪を確認できる。遺存状態は良好ではないが、引合板側から後胴側に向かって進行している部分を確認できる。残存上下幅は 5.7cm、残存上辺幅 5.3cmである。

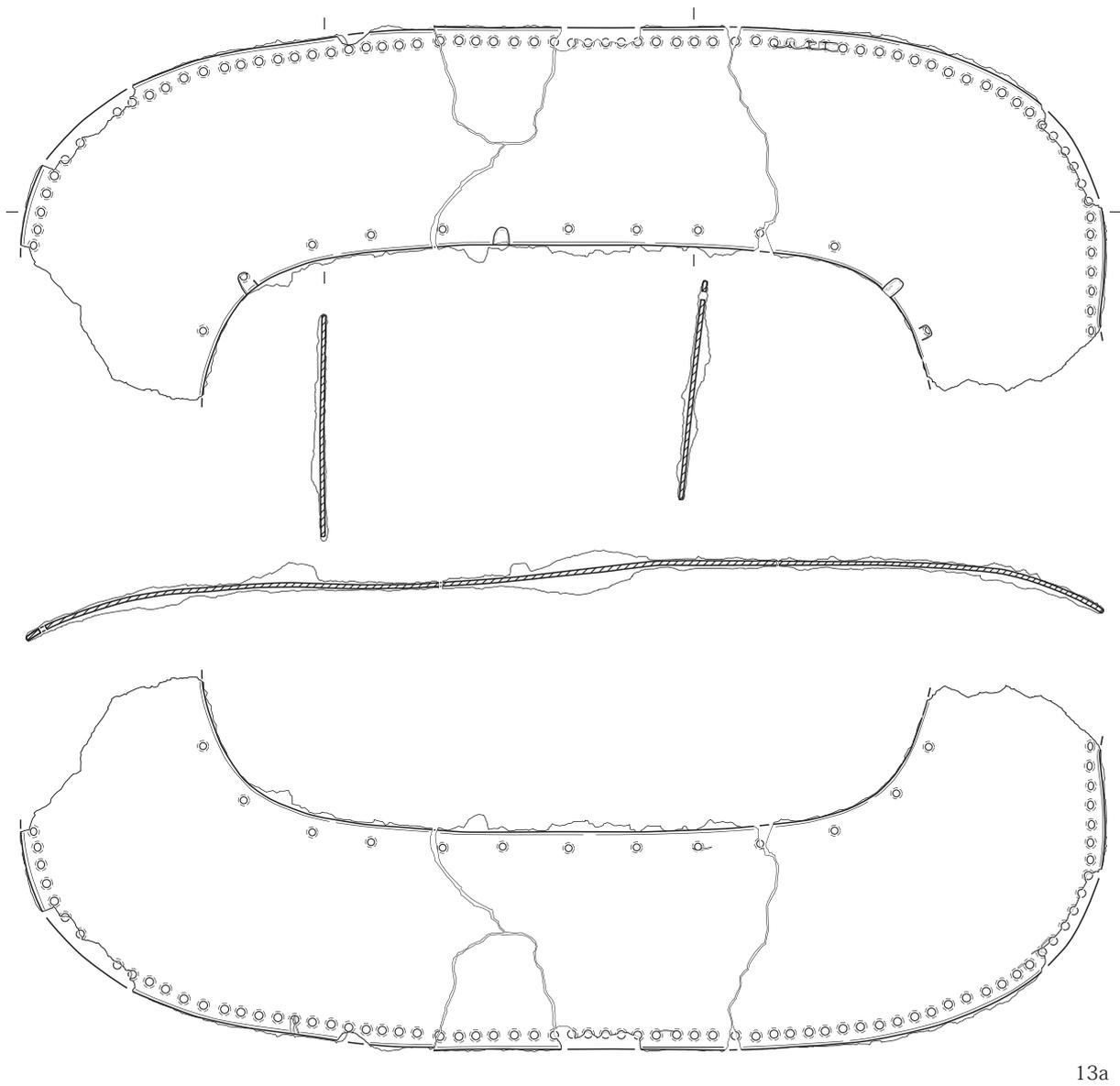
後胴の構成 前胴と同じく、長側第 2 段の帯金は全てうしなわれている。地板の残存状況からは、竪上第 1 段が押付板 1 枚、竪上第 2 段が地板 3 枚、竪上第 3 段が帯金 1 枚、長側第 1 段が地板 5 枚、長側第 2 段が帯金 1 枚、長側第 3 段が地板 5 枚、長側第 4 段が裾板 1 枚の計 17 枚構成であったと想定される。

後 胴（第 24 ~ 26 図） 竪上第 1 段の押付板は、外縁が直線的な背の部分（13a）と右脇に該当する部分（13b）の 2 片があり、左脇部は欠損している。残存率は約 80%である。13a は発掘報告の第 48 図 7 に該当し、13b は発掘報告図版第 27 において 13a と接合した状態で提示されている。本来二つの部材は接合関係にあるが、現状では破断面の錆化により接着が困難であったため、個別に実測図を作成した。13a の残存横幅は 46.7cmであり、両破片を合わせた場合の縦幅は 25cm程度、13b の右前胴竪上板と接する部分の長さは 4.5cmである。2 片とも上辺には革組覆輪が認められるが、遺存状態は良好ではなく、技法や進行方向はわからない。覆輪孔における心々間の距離は 0.8cm前後である。

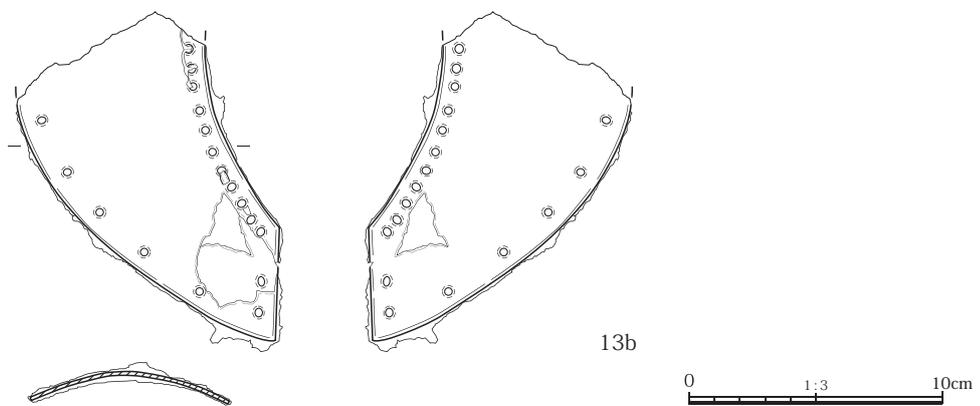
竪上第 2 段は、2 枚の扇形地板（14・16a・16b）とその間に配置する三角形地板（15）の計 3 枚で構成されている。14 は左側に位置する扇形地板であり、一部を欠損するが全形を知りうるほどに遺存している。竪上第 2 段の中央側に向かいながら幅を減じていき、先端を直線状に切断している。これは左右の地板が重ならないための処置と捉えうる。また、三角形地板寄りに、斜めに並んだ 2 孔一組のワタガミ懸緒孔が認められる。縦幅 9.5cm、下辺幅 7.0cm、三角形地板と接続する部分の長さは 12.6cmである。右側の扇形地板は破損がいちじるしく、上辺の湾曲部（16a）と角を含む下辺の破片（16b）のみが遺存する。16a は残存縦幅 4.1cm、残存横幅 5.2cmである。16b は残存縦幅 2.8cm、残存下辺幅 3.6cmである。15 は中央に位置する扁平な二等辺三角形の地板であり、発掘報告の第 48 図 3 に該当する。検討作業の過程ではかの破片と接合し、全形が明らかとなった。一部欠損が認められるが、比較的良好に遺存している。縦幅 8.9cm、残存下辺幅 22.3cm、扇形地板に接する部分は左右ともに 14cm前後である。

17 は竪上第 3 段の帯金と長側第 1 段の地板が、接続した状態のまま破損したものである。発掘報告の第 48 図 2 に該当する。帯金の縦幅は 2.7cm、残存幅は 7.5cmである。三角形地板の残存縦幅は 3.4cm、残存上辺幅 8.4cmである。

長側第 1 段を構成する地板は、ほかに三角形の地板が 2 片残存している（18・19）。18 は上部および左脇部側が欠損しているものの、中央地板側は直線状に加工された端部が遺存する。残存縦幅 6.8cm、残存下辺幅 12.3cmである。19 の三角形地板は、それぞれの角が欠損している。残存縦幅 8.7cm、残存下辺幅 11.6cmである。

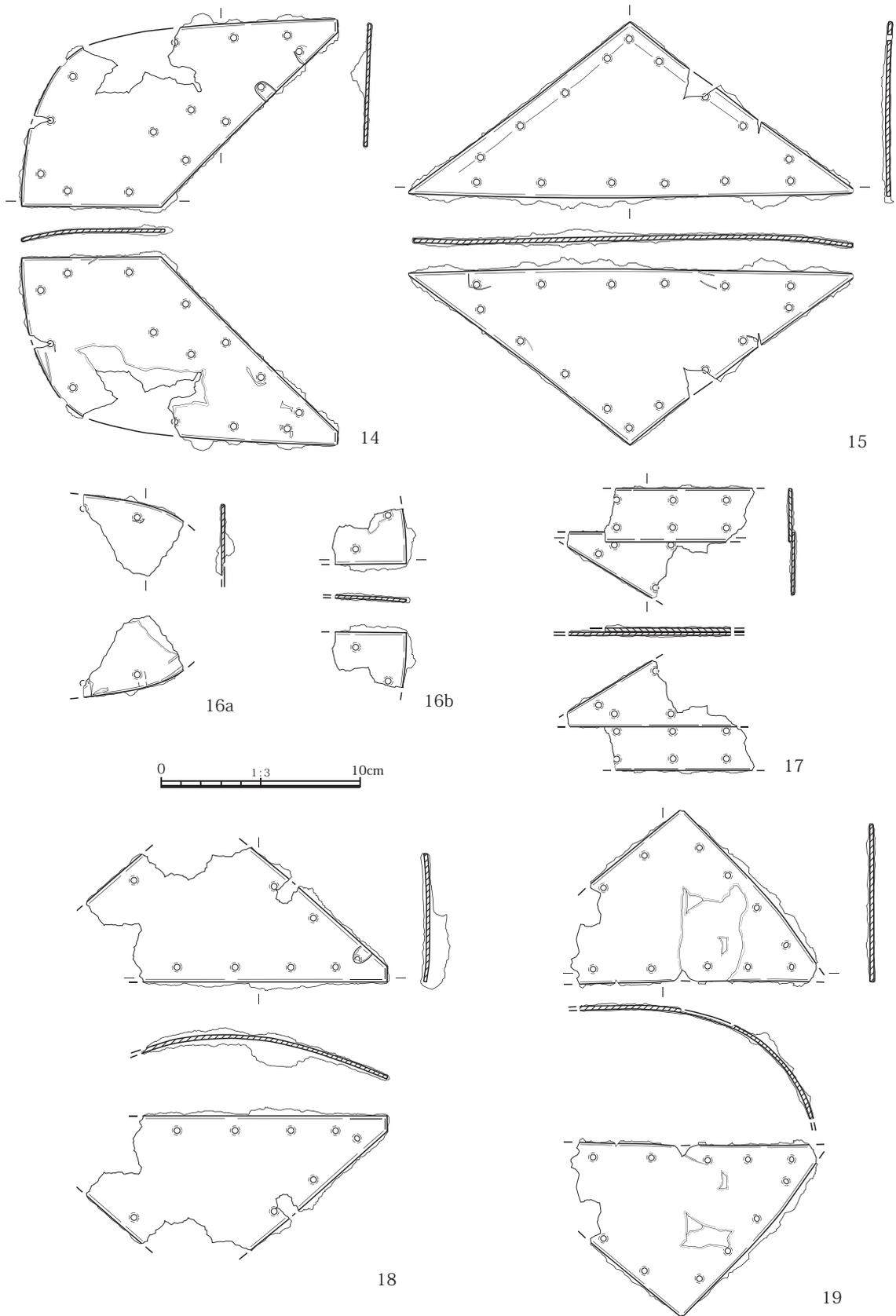


13a



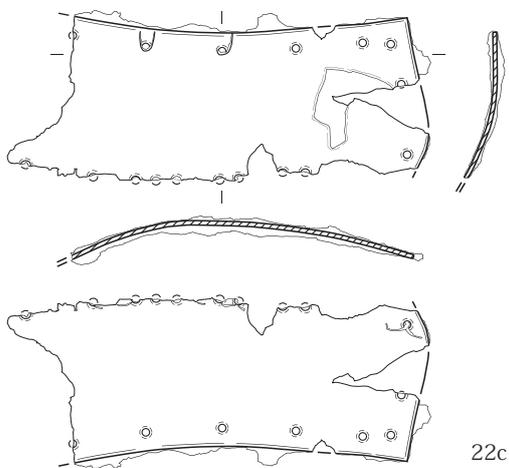
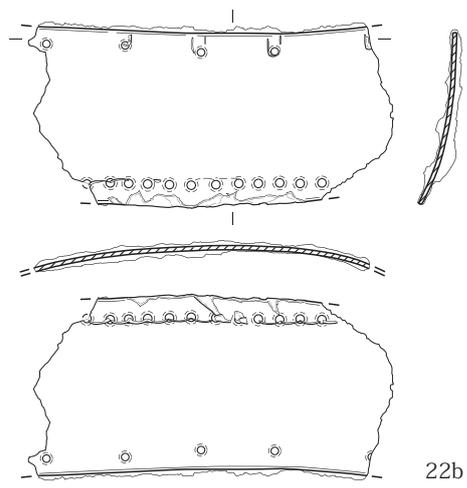
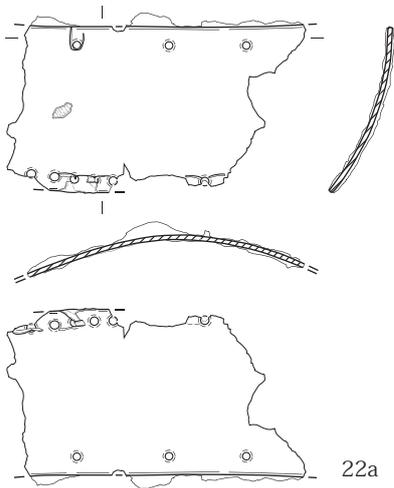
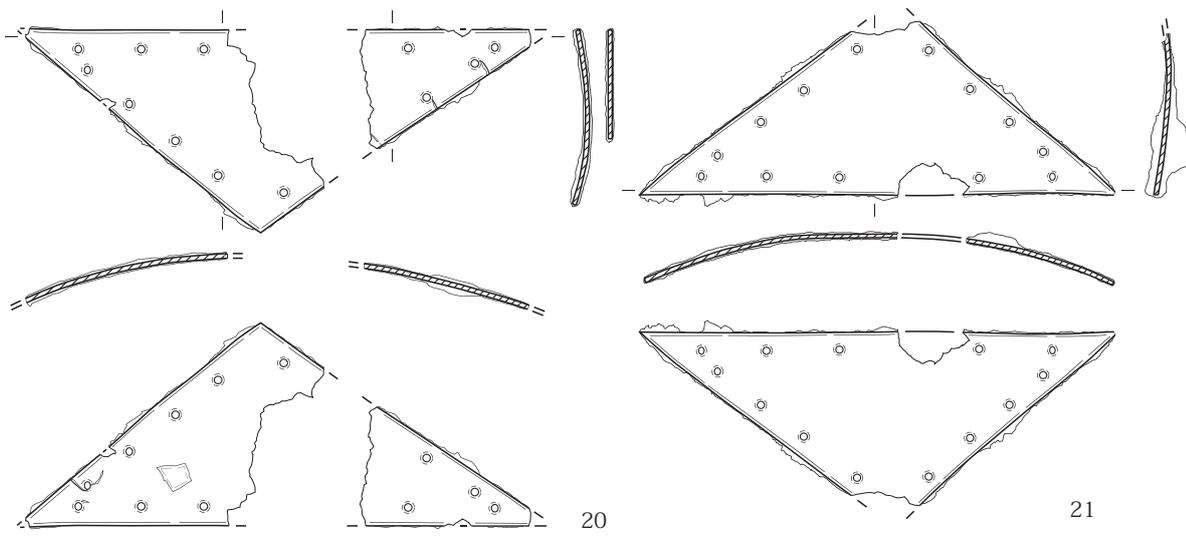
13b

第 24 図 短甲 1 実測図 (3) : 後胴 (1)



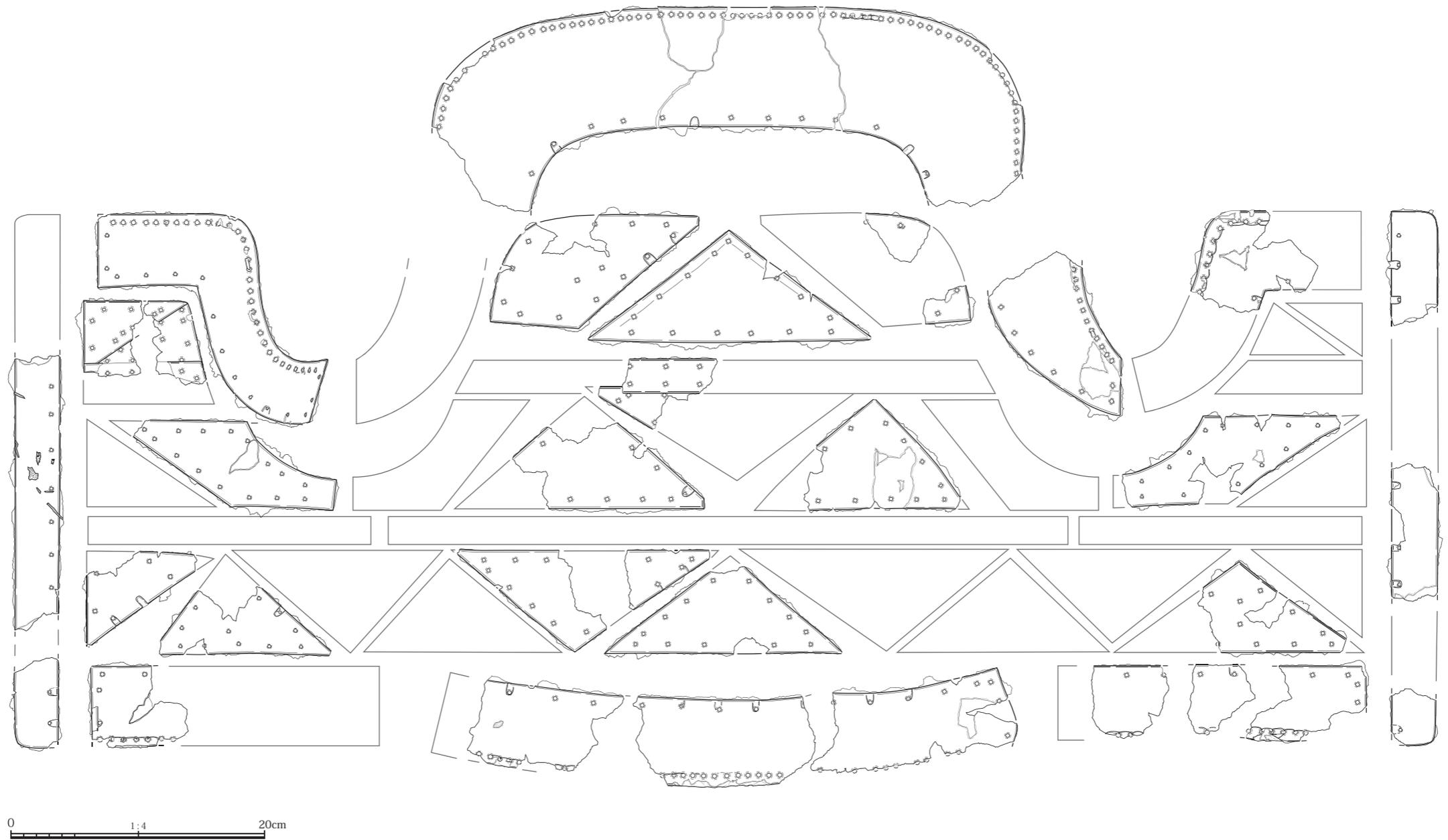
第25図 短甲1実測図(4):後胴(2)

5 武 具



0 1:3 10cm

第 26 图 短甲 1 实测图 (5): 後胴 (3)



第27図 短甲1展開図

長側第3段を構成する部材は、三角形の地板を2片確認できる(20・21)。20は2片に分かれ、破断面の破損により接合できないが、位置関係を考慮し配置している。内面には鉄片が付着しているが、こういった部材の一部であるかは不明である。残存縦幅8.0cm、復元上辺幅20.7cmである。21は中央に配置される二等辺三角形の地板で、発掘報告の第48図5に該当する。ほぼ左右対称になるよう湾曲し、上部および下辺の一部を欠損している。残存縦幅6.9cm、残存下辺幅18.7cmである。

長側第4段の裾板は、大きく3片に破損している(22a・22b・22c)。このうち発掘報告には第48図6として22bのみが掲載されており、前胴の裾板として報告されていた。しかし、今回の整理過程においてほかの破片との接合関係が明らかになり、合わせて後胴の裾板であることが判明した。3片はそれぞれ接合関係にあるが、破断面の錆化にともなう変形などにより接着が困難であったため、個別に部材実測図を作成している。左前胴側の端部を欠失するものの(22a)、そのほかは右前胴側の端部に至るまで遺存しており、1枚の鉄板で造られていることが確認できる。右前胴と接続する部分は、下辺側を弧を描くように加工しているようである。上辺下辺ともに遺存する22bの中心部付近の縦幅は6.8cm、3片合わせた残存上辺幅は約36cmである。下辺には革組覆輪がほどこされているが、遺存状態は良好ではない。残存部分において、かろうじて右前胴から左前胴に進行している状況を確認できる程度である。なお、22aの外面には、矢柄と想定される有機質が付着している。

小 結 短甲1は良好な遺存状態とはいいがたいものの、地板配置における特徴など、明らかになった点がある。まず前胴に関しては、長側第1段における不整形地板の存在および左前胴長側第3段の状況などから、小林謙一氏によるB型〔小林1974 pp.39-40〕、鈴木一有氏による菱形系統〔鈴木1996 p.34〕に属する。また、後胴に使用される地板の形態的特徴などからは、阪口英毅氏のいう鈍角系の三角板革綴短甲〔阪口1998〕の一例に該当する。

短甲の外縁にほどこされた革組覆輪の遺存状況は、全体的に良好ではなかった。竪上第1段の押付板・竪上板の覆輪技法は不明である。進行方向は、左前胴において引合板側から後胴側に向かう状況をかろうじて観察できる程度である。裾板の覆輪技法は、右前胴での遺存部分を観察する限り、高橋工氏の分類による「革組Ⅲ技法」〔高橋1995〕と考えられる(図版20-1・3・4)。進行方向は、短甲を正立させて上からみた場合、時計回りに進行している。(細川晋太郎)

③短甲2(図版22・23、第28図)

概要 押付板1点(1)、竪上板1点(2)、地板2点(3・4)の破片が遺存しているのみであるが、3の形状から三角板革綴短甲であることがわかる。革綴の技法は「綴第1技法」〔高橋1995 p.40〕である。この技法は、「第一形式」〔末永1934 p.27〕、「第一手法」〔吉村1988 p.36、高橋1993 p.17〕、「直交綴」〔橋本1996 pp.263-264〕とも呼称される。綴孔は径2.5～3.0mm、覆輪孔は径3.0～4.0mm、鉄板の厚さは1.5mm程度である。以下、観察所見において部位を指し示す「縦」「横」「左」「右」などの表記は、全て短甲を正立させた状態で、着装者からみた場合の方向を示す。

観察所見 1は押付板の破片である。右肩部から右脇部にかけてを欠損しており、残存率は70%程度である。現存する破片も、想定される中軸からやや左肩よりの部位で、2片に折損している。両片は接合することが明らかであるが、破面の一部が錆化により変形しているため、接着することはできない。

5 武 具

左肩部の上辺や左脇部の隅角に欠損が目立つ。残存横幅 37.7cm、高 22.0cm、中央部縦幅 9.9cm、左堅上板側の端部長 5.0cm（復元値）を測る。上辺には革組覆輪がほどこされているが、遺存状況が良好ではないため、その技法は確定できない。短甲を正立させて上からみた場合、覆輪は時計回りに進行している（図中矢印の方向）。覆輪孔の心々間距離は 1.2cm を測る。

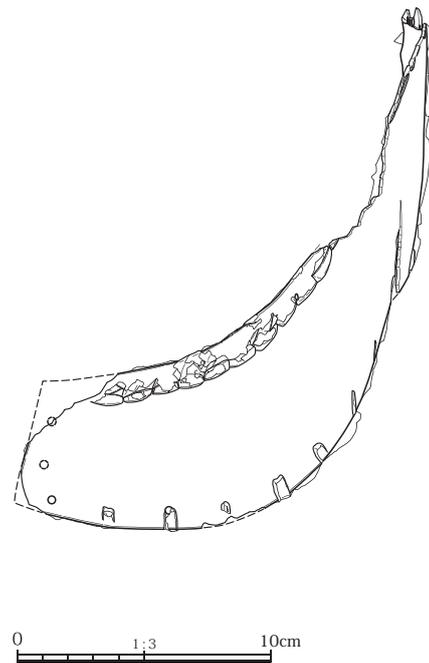
2 は左堅上板の破片である。引合板側では引合板や堅上第 2 段の地板と接する辺を全て、押付板側では屈曲部の下半を欠損しており、残存率は 40% 程度である。残存横幅 8.6cm、残存高 14.6cm を測る。上辺には革組覆輪がほどこされている。遺存状況が良好ではないため、その技法や進行方向については確定できない。覆輪孔の心々間距離は 1.1cm を測る。

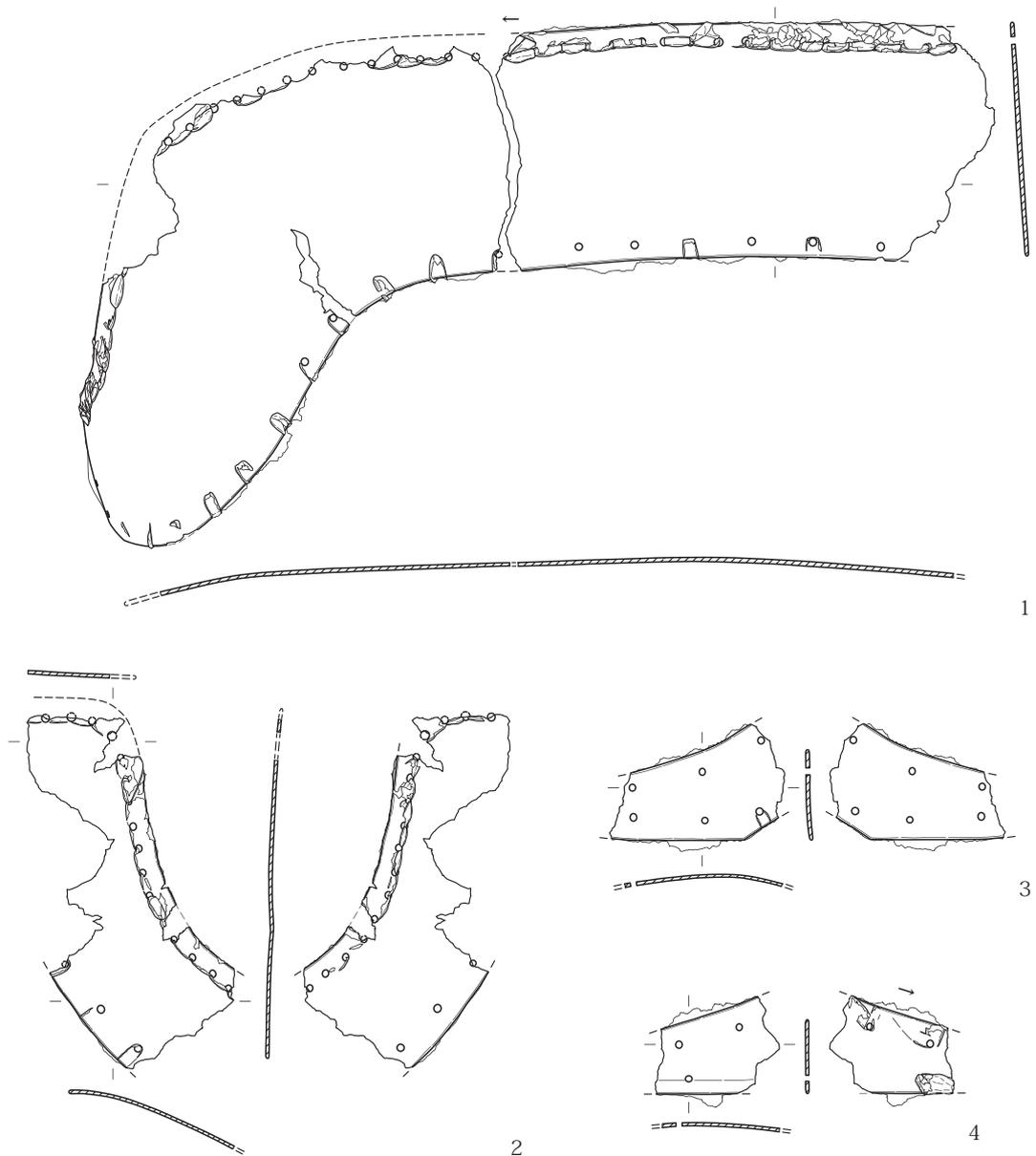
3 は長側第 1 段脇部の地板の破片である。上辺は押付板ないし堅上板と接続し、下辺は長側第 2 段の帯金と接続する。下辺と鈍角をなす辺の一部が遺存していることから、この地板が三角板革綴短甲の構成部材であることがわかる。また、この辺と交わる綴目が外面に観察されることから、鉄板の重ね合わせが後胴中央の鉄板に順次上重ねの関係となる通則に則るものであるならば、左脇部の地板と判断できる。残存横幅 7.2cm、残存高 4.8cm を測る。内面に綴革は遺存していない。

4 は長側第 1 段脇部の地板の破片である。上辺は押付板ないし堅上板と接続し、下辺は長側第 2 段の帯金と接続する。2 辺のみの遺存に留まるため、三角形地板である可能性も完全には排除できないが、その場合には頂角がいちじるしく鈍角になることから、脇部の地板と判断した。3 が左脇部の地板であるならば、右脇部の地板となる。残存横幅 5.0cm、残存高 4.1cm を測る。内面に綴革が良好に遺存しており、上辺の進行方向を判断しうる（図中矢印の方向）。

小 結 短甲 2 は部材 4 点の破片が遺存しているのみであり、全体の構成をうかがうことはできないが、小片とはいえ 3 の存在により三角板革綴短甲と確定できる。革組覆輪や綴革の遺存状況も良好ではなく、得られる情報量は少ない。現存する破片を観察する限りでは、取り立てて特徴的な事柄は見当たらない。

（阪口英毅）

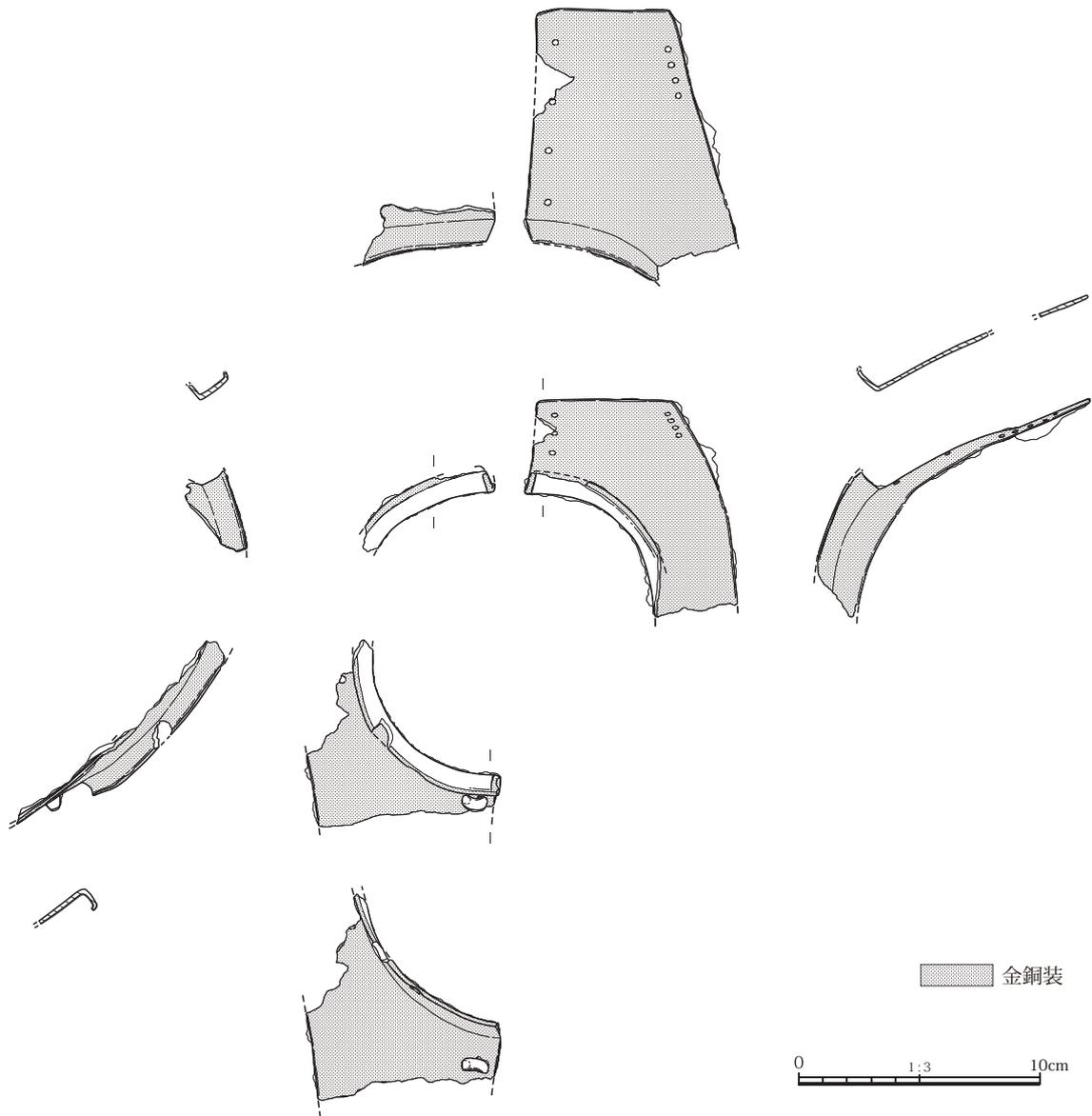




第28図 短甲2実測図

(3) 頸 甲 (図版 24・25、第29図)

出土状況図によれば、頸甲は部品が分散した状態で検出されたことが明らかである。もともと遺存状態の良好な部品が竪穴式石槨内の西隅付近で鉄鍬群とともに、その次に良好に残る部品が石槨内の北西側で検出された冑1の北側において出土している。いずれの部品も被葬者の頭部の位置をある程度反映する埴製枕より北西側の範囲でその存在が確認されており、本来の副葬位置はおおむね石槨内の北西半であったことをうかがうことが可能である。本来は冑1・短甲1とともに甲冑のセットをなすものと考えられる。ただし、副葬状況の詳細については攪乱が及んでいるため、不明な点が多い。



第 29 図 頸甲実測図

構成と法量 基本的な構造は、本体を左右 2 枚の鉄板で構成する打延式頸甲である。また、鉄地の表面側を金銅装とする点は本例にみる最大の特色である（図版 25 - 1）。ただし、遺存状況は全体としてはあまり良好ではなく、右肩側の鉄板は 2 片に分かれた破片の状態の一部が残存するのみとなっており、左肩側の鉄板についてもおおむね背面を残す程度である。また、正面・背面ともに引合板を欠いた状態である。

左右 2 枚の鉄板の正面立面形は、極めて限定的な残存状況であるために確定はできないものの、肩が下降する逆台形を呈するものになるとみて差し支えないであろう。下縁部は左肩背面の形状から、おおむね一直線に揃うものとする。平面形は外側へ緩く弧状に張り出すようであり、内側はやや直線的な形状となる。

各部位の計測値を藤田和尊氏による計測部位名称〔藤田 1984 p.56〕にしたがって可能な限り記すと、

全体復元高 11.8cm程度、脇部復元幅 2.8cm程度、肩部下降値は 1 cm前後となろう。鉄板の厚さは 2 mm前後、孔径約 3 mmである。そのほかの数値については遺存状態が悪いために、不明ないし復元すら困難な状況である。

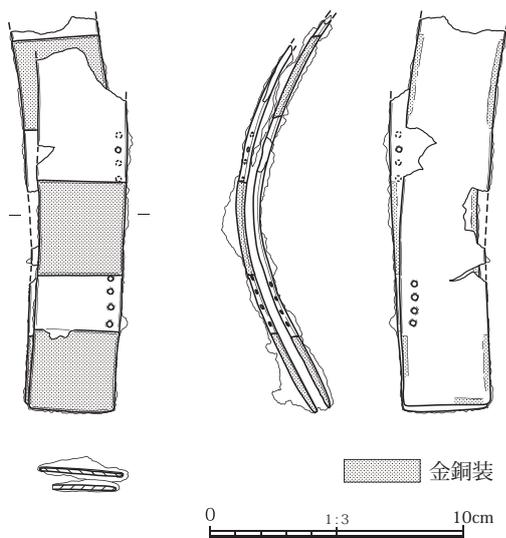
頸甲本体 襟部は、上部の半円形の袂り込みの端部を外上方に立ち上げることによって造り出される。襟部の上縁は外方に折り返される鉄折覆輪となっている。

左肩側の鉄板は背面のおおむね全形を留める。鍍金表面に樹脂が塗布されているようであるが、保存処理は実施されていない。現重量は 77.8g である。幅をほぼ残し、その数値は約 9 cmである。背面下縁幅は 5.6cmである。襟部長については復元すれば 1 cmほど、襟部高は 7 mm程度と見込まれる。背面の引合板側の端部には、背面引合板との接続のための綴孔がおおむね等間隔に四つ縦位に穿たれている。肩甲側の端部には、肩甲との接続のための綴孔が背面中位よりやや下端側に 6～7 mmのほぼ等間隔で縦位に 4 孔認められる。なお、内面側には何らかの有機質や砂礫等が付着しているが、詳細については不明である。

右肩側の鉄板は、正面の上部と背面の襟部を一部残すのみである。法量などについては、遺存状態が悪く、正確な数値を提示しがたい。現重量は 2 片で 60.0g である。保存処理は実施されていない。

正面の引合板側の端部には、穿孔が一つほどこされており、断面隅丸長方形を呈する幅 4 mm程度、厚さ 2 mm程度の板状の鉄材が認められる（図版 25 - 3）。この鉄材は C 字状に折り曲げられ、本体から外面側へ 4～5 mmの高さをもって突出する。内面側は砂礫などが付着しており、詳細は不明であるが、残存する端部についてはかきしめて留めているようであるが、もう一方の引合板側の端部は本体と接合されていないようである。位置や構造さらには形状から、引合受金具に相当するものとみてよいであろう。このほかの詳細については、内面が付着物のために表面状態を観察することが難しい遺存状態であり、不明な点が多い。

小 結 本例については、残存する破片の全てにおいて、表面側を金銅装としている点が特筆される。鉄地の表面に金銅板を張る構造であり、金銅板の端部の幅 3 mmほどを内面側に折り曲げて固定している状況を確認できる（図版 25 - 2・4）。このほか注目すべき点として、頸甲本体の右前面に引合受金具を備えるという特徴があげられる。類例が熊本県マロ塚古墳と大阪府野中古墳にある〔北野 1976、杉井・上野編 2012、古谷 2012 p.167〕。引合受金具を持つ頸甲は限られており、マロ塚古墳では 2 号頸甲と 3 号頸甲、野中古墳では 6 号頸甲と 11 号頸甲に確認される。マロ塚古墳 2 号頸甲と野中古墳 6 号頸甲の引合受金具は、釘状の頂部が逆 L 字状を呈する。それとは異なるのが、マロ塚古墳 3 号頸甲と野中古墳 11 号頸甲であり、偏平鋌の一方に爪状の突起を付した形状となる。このように現状においては、頸甲の引合受金具には形状を異にする大きく 2 者が存在する。本例の引合受金具は、マロ塚古墳 2 号頸甲と野中古墳 6 号頸甲のそれと構造および形状が共通する。本例は、各部の鉄板の接合状況を留めていないため、その位置付けをにわかには決定しがたいところがある。ただし、金銅装をほどこす点や、さらには特に引合受金具をかきしめて本体に留めるという特徴を重視するならば、鋌留甲冑の技術系譜上にある鉄製打延式鋌留頸甲と評価しうるであろう。したがって、全体の形状も考慮すると、藤田和尊氏の分類のⅢ類 c 式に位置付けられる〔藤田 1984・2006〕。 (岩本 崇)



第 30 図 肩甲実測図

(4) 肩 甲 (図版 26、第 30 図)

冑 1 の鍔として発掘報告において取り扱われたもののなかに、肩甲の破片と考える部品が存在する。大半はいちじるしく細片化しているが、本来の形状をある程度留める部分が僅かにある。それらの出土地点は冑 1 の周辺であり、先述の金銅装頸甲とセットをなすものとする。ただし、副葬状態の詳細については、攪乱のために不明な点が多いといわざるを得ない。

確実に肩甲と認定しうるのは、錆着した 2 枚の鉄板からなる部品のみである。端部を遺存するものの、遺存状態が極めて限定されるために、前後左右の位置関係を確定することは困難である。湾曲の度

合いを考慮すれば、残存部位は正面側である可能性が高く、そうであるならば左肩側を保護する甲に相当することになる。

残存する前後幅は約 16cm であり、鉄板の幅は 2 枚とも 3.3～3.5cm、厚さが 2mm 程度、緘孔径が 2～3mm である。端部は直線的に裁断されている。頸甲側とは反対側の長辺端部には、正面ないし背面の下位と中位に、4 孔一組の緘孔が 6mm 程の等間隔で鉄板に対して縦位に穿たれる。緘革はまったく残存しておらず、どのような緘技法で連貫していたのかは不明である。

なお、上の鉄板の端部からおよそ 3.3cm までの範囲とおよそ 6～10cm 程度までの範囲、下の鉄板の端部からおよそ 3cm までの範囲とおよそ 12.0～15.5cm 程度までの範囲において、金銅装が縞状にほどこされる。鉄地に带状の金銅板を巻き付けることによって装飾をほどこす。金銅板の巻き付けは、端部の 2mm ほどを内側に折り込むものである(図版 26-5)。(岩本 崇)

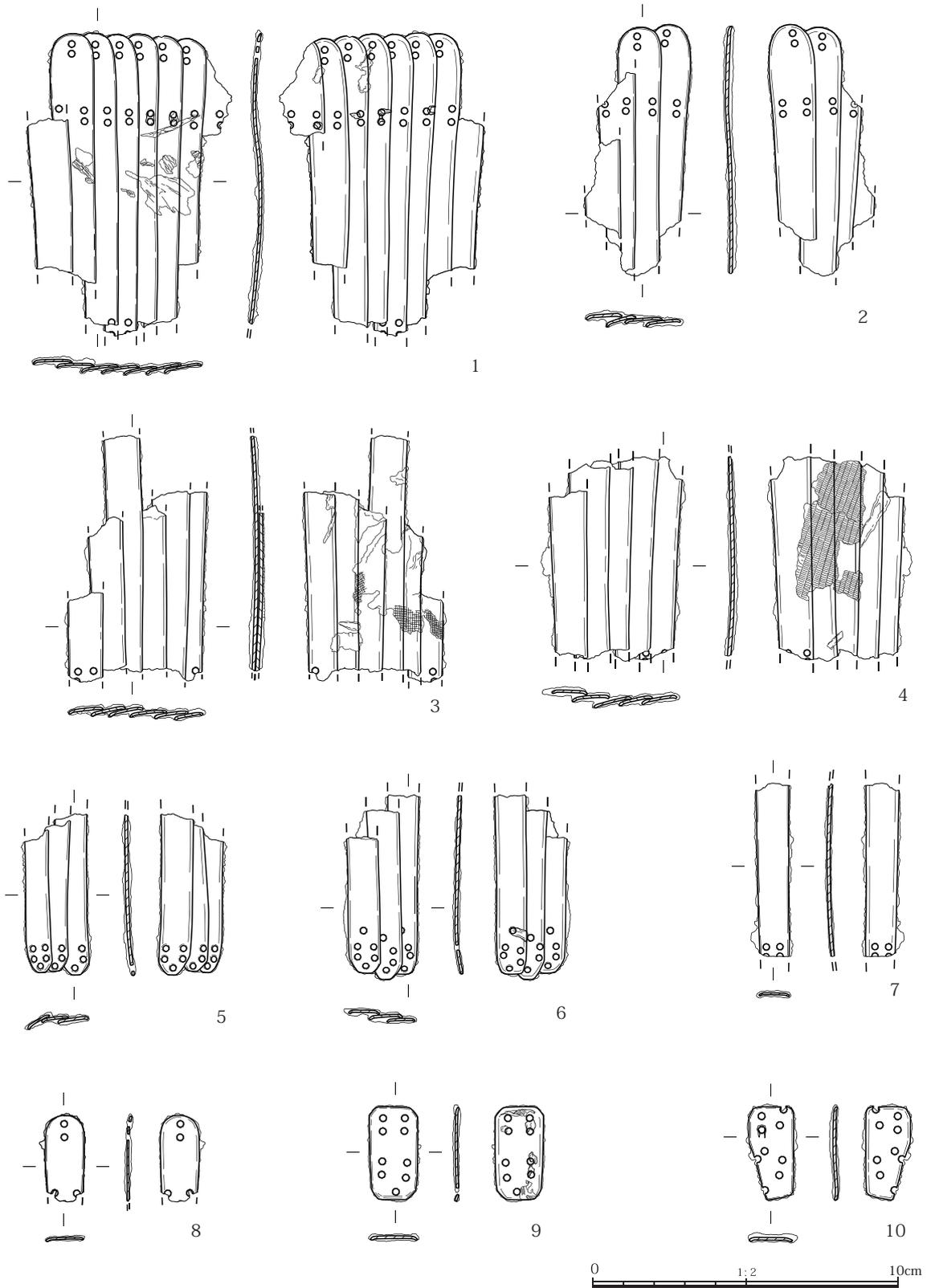
(5) 小 札 群 (図版 27、第 31 図)

① 篠状鉄札

竪穴式石槨内南東側で検出された冑 2 の下より出土した。8 群を図化した。

完形のものも存在しておらず、いずれも一部を欠いている。現状でもっとも残りの良い篠状鉄札は、残存長 9.9cm、最大幅 1.5cm、厚さ 1mm である。頭部に 1 列に並んだ緘孔が 2 孔、その下に 2 列に並んだ綴孔が 4 孔、篠状鉄札の札足付近に 2 列に並んだ綴孔が 4 孔、その下に下搦孔が 1 孔、それぞれ穿たれている。中には、札足付近に穿たれた綴孔の上に緘孔が 1 孔穿たれているものも存在する。縦断面形はいずれも緩く S 字形に湾曲している。篠状鉄札の重ね方については、いずれも左上重ねである。なお、出土位置不明の小札の中にも、同様の篠状鉄札が含まれている。

1 は 8 点の篠状鉄札が左上重ねされたものである。下部を欠損している。残存長 9.9cm、最大幅 6.8cm である。篠状鉄札の頭部の緘孔には、有機質が遺存していない。綴孔では、表面で綴紐が立取となり、裏面では凸凹状になるものと思われる。このような綴技法は、日本列島出土小札式甲冑では稀であり、



第31図 小札群実測図

5 武 具

五條猫塚古墳石槨外出土方頭小札 A 類や滋賀県新開 1 号墳出土篠状鉄札〔西田ほか 1961〕などで確認できるものである。表面には革状の有機質が付着している。

2 は 4 点の篠状鉄札が左上重ねされたものである。下部を欠損している。残存長 8.2cm、最大幅 3.5cm である。緘孔や綴孔に有機質は確認できなかった。

3 は 6 点の篠状鉄札が左上重ねされたものである。上部・下部を欠損している。残存長 8.0cm、最大幅 4.6cm である。綴孔を確認することができるが、綴紐は確認することができなかった。裏面には布や革が付着していることが確認できる。

4 は 5 点の篠状鉄札が左上重ねされたものである。上部・下部を欠損している。残存長 6.7cm、最大幅 4.4cm である。綴孔を確認することができるが、綴紐は確認することはできなかった。裏面には布が面的に付着している。布目は篠状鉄札に対してやや斜めになっており、もともと篠状鉄札に縫い付けられていたものではなく、別個のものが付着したものと考えられる。

5 は 3 点の篠状鉄札が左上重ねされたものである。上部を欠損している。残存長 5.3cm、最大幅 2.0cm である。綴孔・下捌孔が確認できるが、綴紐や下捌紐は確認できなかった。

6 は 3 点の篠状鉄札が左上重ねされたものである。上部を欠損している。残存長 6.0cm、最大幅 2.3cm である。綴孔・下捌孔が確認でき、その上に緘孔が確認できる。綴紐・下捌紐は確認できなかったが、緘紐は、小札の裏面で横取となる。この緘紐により、篠状鉄札以下に小札が連貫されるものと思われる。

7 は 1 点の篠状鉄札である。上部・下部を欠損している。残存長 5.7cm、最大幅 1.0cm である。綴孔が確認できるが、綴紐は確認できなかった。

8 は 1 点の篠状鉄札である。下部を欠損している。残存長 2.8cm、最大幅 1.3cm である。緘孔・綴孔が確認できるが、緘紐・綴紐は確認できなかった。

②方頭小札

篠状鉄札と同じ保管箱に、2 点の方頭小札が収められていた。

9 は完形で、全長 3.1cm、最大幅 1.6cm、厚さ 1mm である。石槨外出土小札の方頭小札 D 類と同様の形態と構造である。頭部付近に 2 列に並んだ緘孔が 4 孔、その下に 2 列に並んだ綴孔が 4 孔、札足付近に下捌孔が 1 孔穿たれている。小札の縦断面形は平坦である。小札の平面形態は基本的に方形であるが、頭部・札足の両端を斜めに裁断し、面取りしている。表面には有機質の遺存は確認できないが、裏面では緘孔に立取となる緘紐が遺存しており、通段緘技法 a 類〔初村 2011〕により連貫されていたものと思われる。鳥毛質の有機質の付着も確認できるが、これは方頭小札に関連するものかどうかは明らかではない。

10 は完形の方頭小札であるが、9 とはやや構造が異なり表面左側辺が斜めに裁断されている。全長 3.0cm、最大幅 1.5cm である。斜めに裁断された左側辺上に 2 孔が穿たれている。さらには、小札の上辺上にも 1 孔が穿たれている。孔の組み合わせと配置は 9 と同一だが、その位置はやや異なっている。表面において、緘紐の遺存が確認できる。 (初村武寛)

6 武器

発掘報告に記載された竪穴式石槨内出土武器は、鉄鏃が257点、鉄鉾が4点、石突が1点である。今回の再整理により、鉄鏃177点以上、鉄刀剣3点以上、鉄鉾4点、石突1点を確認した。

(1) 鉄 鏃 (図版28～41、第32～41図)

概要 石槨内から出土した鉄鏃は、平面形態から大きく6形式に区分した。それぞれ短頸三角式55点、短頸柳葉式67点、剣身式14点、段違い柳葉式10点、鳥舌式24点、短茎長三角式1点で、形式不明や実測不可のものを含めると合計177点以上となる。いずれの形式も第6章で報告する石槨外からも出土しており、数量的にも形式組成的にも石槨内出土鉄鏃は石槨外出土鉄鏃に包含される。また、発掘報告でも述べられているように、短茎式鏃が1点だけと非常に少ない点も特徴的である。

短頸三角式 (1～55) 55点ある。切先がやや丸みを帯びた長三角形の鏃身部から直角の鏃身関を経て棒状の頸部に至り、さらに頸部から直角の茎関を経て先端が先細りとなる茎部に至る。鏃身関が鋭角的に切り返し腸状となる個体もあるがあまり明確ではなく、いずれの個体も腸状を持たないとみる。鏃身部長は1.8～3.1cmで2.6～2.8cmのものが中心を占める。頸部長は1のみが短く3.3cmだが、ほかは4.1～5.7cm、茎部長は先端欠失のため不明な個体が多いが3.0～4.7cmである。鏃身部幅は1.1～1.7cm、茎関部幅は0.8～1.1cmである。大きさは多様だが、いずれかの大きさにまとまる様子はない。

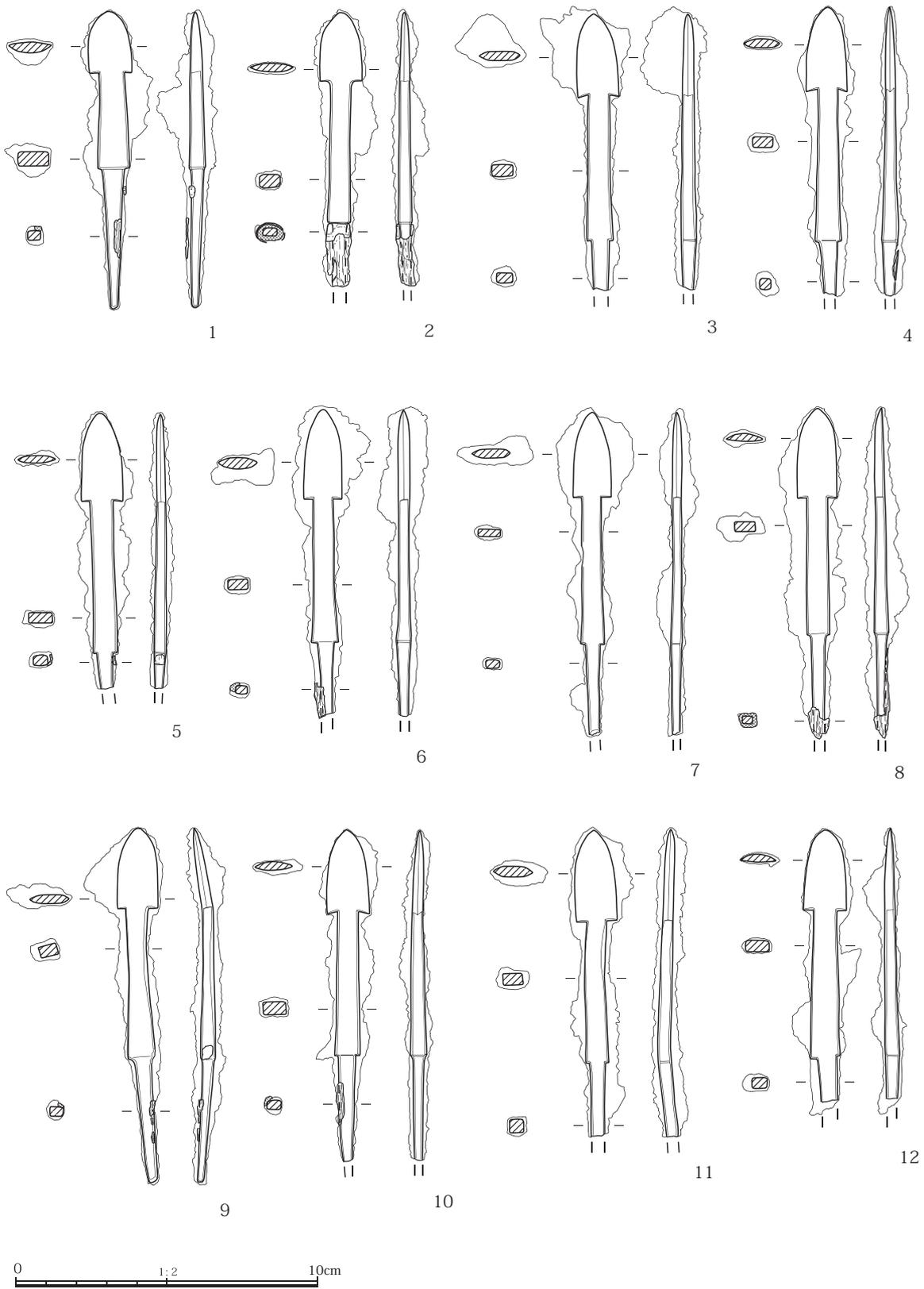
鏃身部の横断面形はレンズ形のものと同片平造のものがある。頸部から茎部にかけての横断面形は長方形である。鏃身部の厚さは4mm前後で、茎関付近で厚さが最大になるものもあるが5mmほどであり、全体的に鏃身部先端から茎部先端まで厚みの変化がほとんどない。頸部と茎部の厚みの差もほとんどなく、関部に立体的な段差を造り出さない。

矢柄にともなう有機質の遺存状態はいちじるしく悪く、矢柄形態の細部は確認できないが、2では先細りとなる矢柄先端部に緊縛用の口巻きとして樹皮を巻き付けていることがわかる。ほかの個体も同様の技法によると考えてよい。茎部には茎巻きと呼称される繊維や糸を巻き付けて矢柄から抜けにくくする造作をおこなう鏃も知られるが、本例ではいずれの個体にも確認できていない。ただし、もともと茎巻きがほどこされていなかったのか、それともうしなわれてしまったのかは不明である。

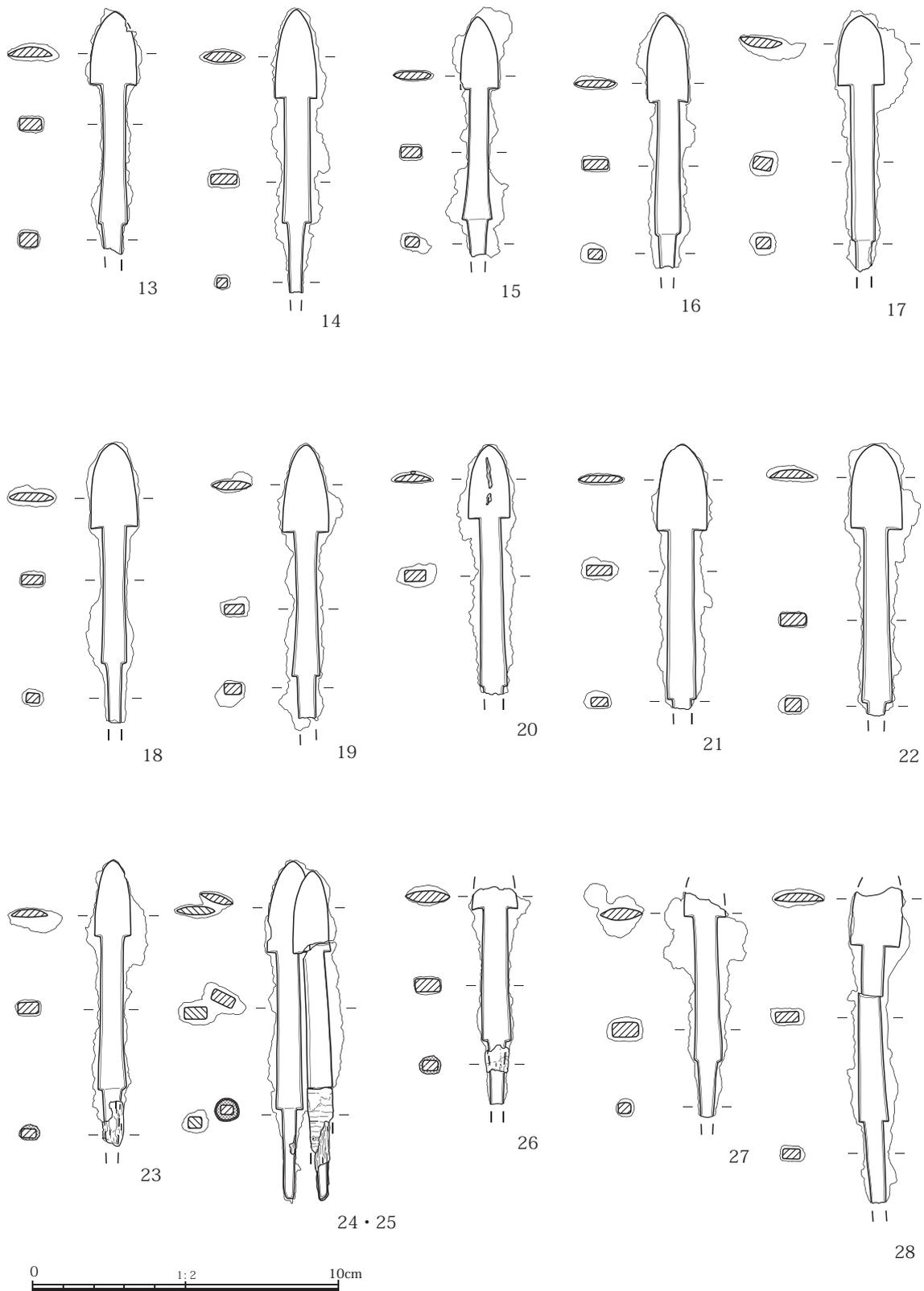
短頸柳葉式 (56～106) 細片化のため図化しなかった個体を合わせて67点ある。柳葉形の鏃身部からナデ関状の鏃身関を経て頸部へと至り、頸部から直角の茎関を経て茎部に至る。鏃身部長は2.3～4.1cmだが3.0～3.5cmが中心である。頸部長は2.9～4.1cm、茎部長は先端欠失のため不明な個体が多いが3.1cm～4.4cmである。鏃身部幅は0.9～1.3cm、茎関部幅は0.6～1.1cmである。大きさは多様だが、いずれかの大きさにまとまる様子はない。

鏃身部の横断面形は基本的にレンズ形だが、56・86・87は片平造に近く、82は両鑄造に近い。頸部から茎部にかけての横断面形は長方形である。鏃身部の厚さは3mm程度のものから、最大で6mmに及ぶものまでである。薄手のもの58のように頸部最大厚が4mmほどで鏃身部から茎部までほとんど厚みが変わらない。一方の厚手のもの56や59のように茎関部付近の頸部最大厚が9mmとなり、全体的に非常に肉厚で頸部から茎部へと明確に段落ちしており、立体的な段差を造り出す。両者は平面形態を

6 武器

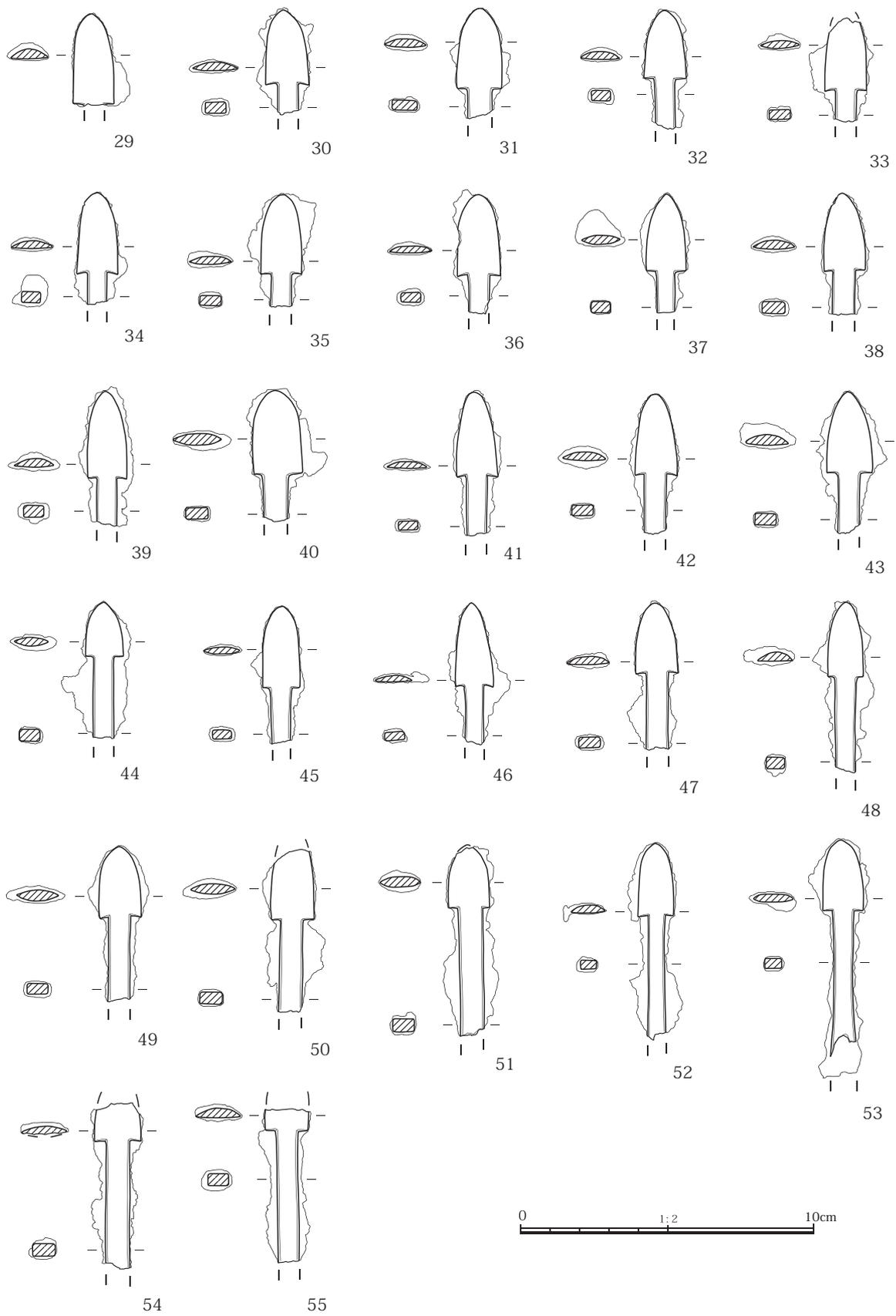


第32図 鉄鏃実測図(1):短頸三角式(1)

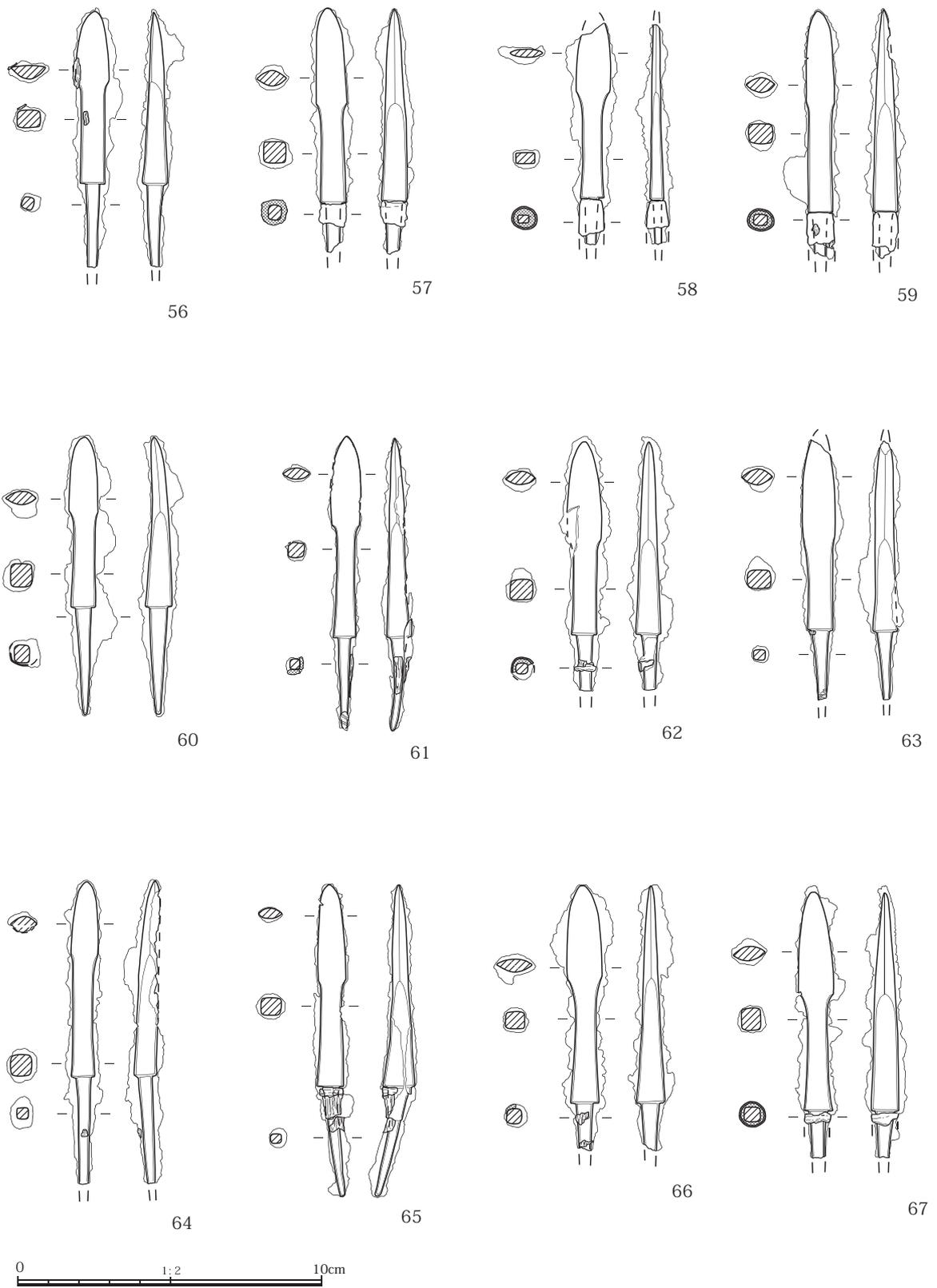


第33図 鉄鍬実測図(2): 短頸三角式(2)

6 武器

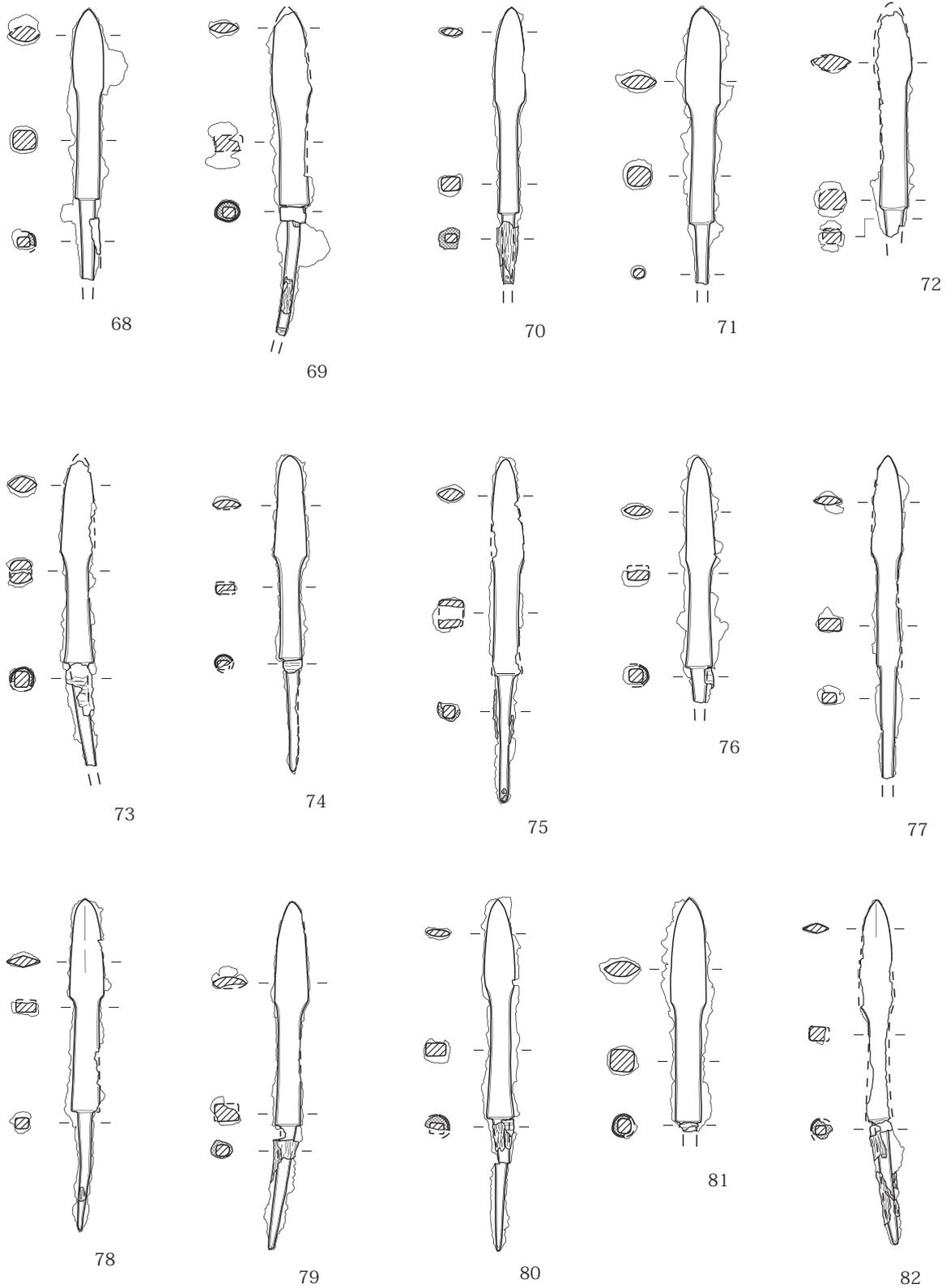


第34図 鉄鏃実測図(3):短頸三角式(3)

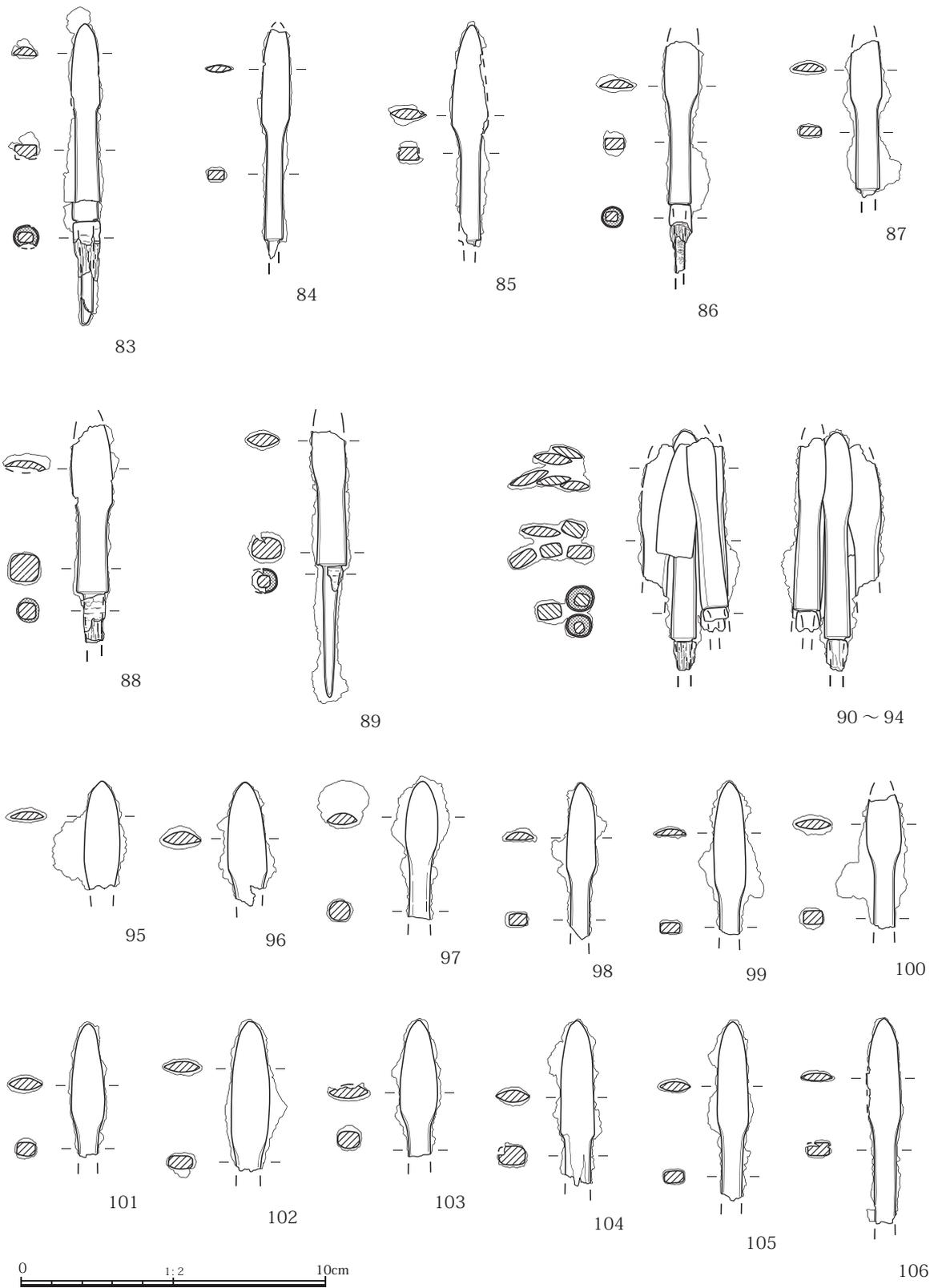


第35図 鉄鏃実測図(4):短頸柳葉式(1)

6 武器



第36図 鉄鏃実測図(5):短頸柳葉式(2)



第37図 鉄鍔実測図(6):短頸柳葉式(3)

重視して同一形式としたが、厚みの違いや側面形態から2種に細分できる。なお、厚手のものは銹化の進行がいちじるしく、全体が針状に剥離しかけているものも多い。

矢柄にともなう有機質の遺存状態は悪いが、基本的に先細りとなる矢柄先端に口巻きとして樹皮を巻いていたとみてよい。ただし、造りが厚手のものについては茎部の厚さに起因するのだろうか、矢柄先端の先細り具合がやや乏しい感がある。61や86には茎部に繊維質が巻き付けられる茎巻きが確認できる。

剣身式 (107～120) 14点ある。切先付近と刃部関付近の幅がほぼ一定となる柳葉形の鍔身部からナデ関状の刃部関を経て鍔身下半部へと至り、鍔身下半部から直角の茎関を経て茎部に至る。全体形は短頸柳葉式に似るが、相対的に鍔身部が長く鍔身下半部（頸部相当箇所）が短く、また、刃部最大幅が短頸柳葉式よりも幅広で刃部関が明瞭に張り出すことから別形式とした。ただし、いわゆる一般的な剣身式と比べると鍔身下半部が長めで、剣身式と短頸柳葉式の間のような形態とした方が適切かもしれない。刃部長は4.0～4.6cm、鍔身下半部長は2.2～2.7cmで、茎部長は唯一完存する114で3.3cmである。刃部幅は1.1～1.2cm、茎関部幅は0.8～0.9cmである。全体的に大きさにまとまりがあるが、個体数が少ないためかもしれない。

刃部の横断面形はレンズ形で、鍔身下半部から茎部の横断面形は長方形である。刃部最大厚は4mm、鍔身下半部最大厚は5mmほどで、刃部から鍔身下半部にかけては全体的に平坦だが、鍔身下半部から茎部にかけて、茎関部で急に厚みを減じるものが多く、109・113・115・116では僅かに茎関部で段落ちするとみた。茎部での厚みの減じ方はやや特徴的だが、偏平な側面形態は短頸三角式に近い。

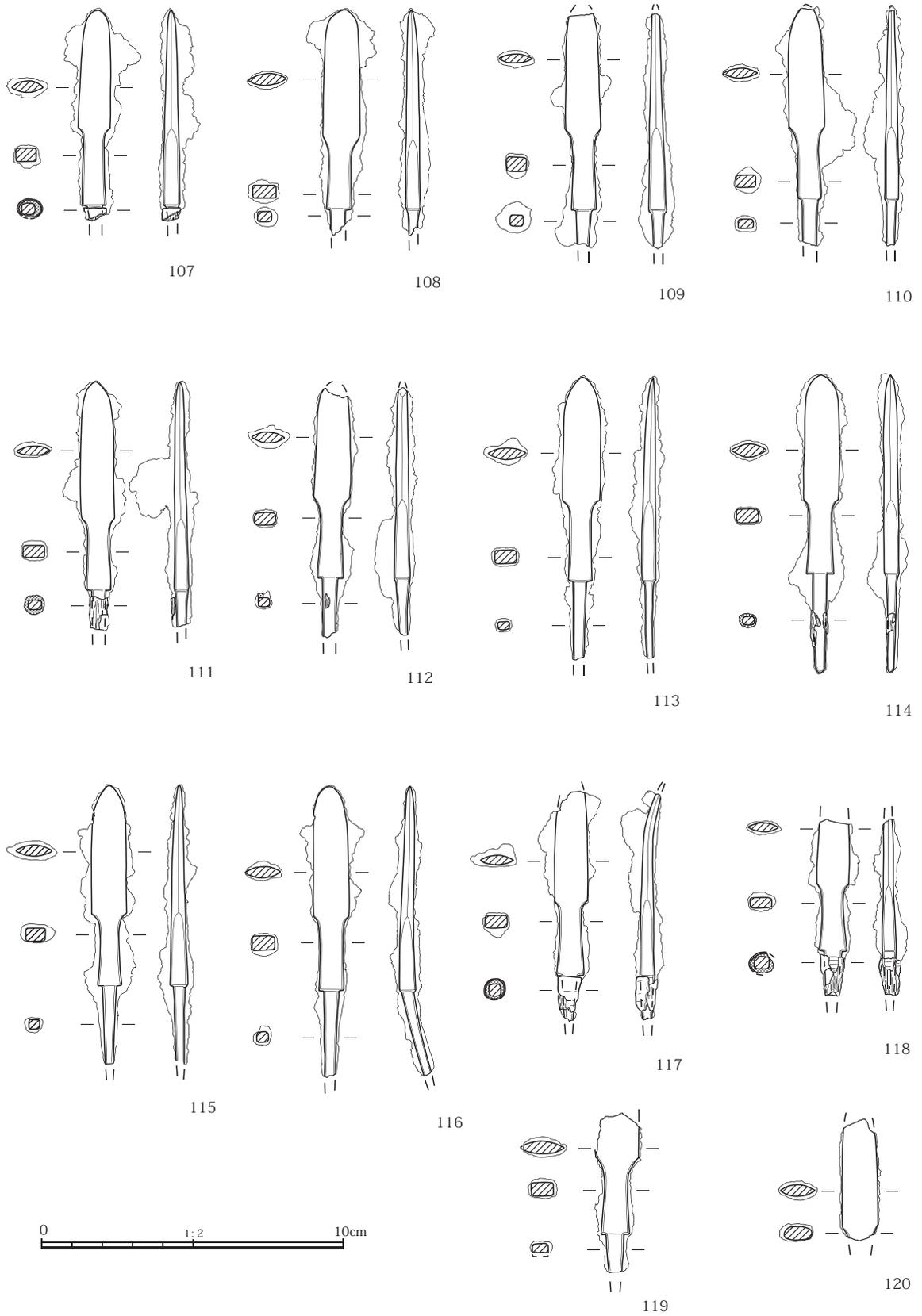
矢柄にともなう有機質の遺存状態は悪いが、先細りの矢柄先端に口巻きとして樹皮が巻かれていたとみられる。現状では茎巻きは確認していない。

段違い柳葉式 (121～130) 10点ある。本報告にともなう整理作業によって新たに認識した形式である。丸みを帯びた切先から左右両側で上下に位置が異なる腸袂を経て鍔身下半部に至り、鍔身下半部から直角の茎関を経て茎部に至る。刃部の幅は切先側と刃部関（腸袂）でほぼ一定である。腸袂の深さは3～4mmほどで切り込みは弱い。刃部関（腸袂）の位置が切先に近い側を左側、茎部に近い側を右側とした際に、左側刃部長は2.4～3.1cm、右側刃部長は3.3～4.6cmで、切先から茎関までの長さは5.7～6.7cm、茎部長は唯一完存している126で3.2cmである。刃部最大幅は0.9～1.2cm、茎関部幅は0.7～0.9cmである。

刃部の横断面形はレンズ形で、鍔身下半部から茎部の横断面形は長方形から隅丸方形である。刃部最大厚はもっとも薄い122で4mmで、ほかは6～7mmほどである。122は鍔身下半部もやや薄く6mmほどであるが、ほかは7～9mmほどあり、刃部幅に対して全体的にかなり厚手の印象を受ける。いずれも鍔身下半部と茎部の間に明確な段差があり、側面形態は短頸柳葉式のうちの厚手のものに近い。

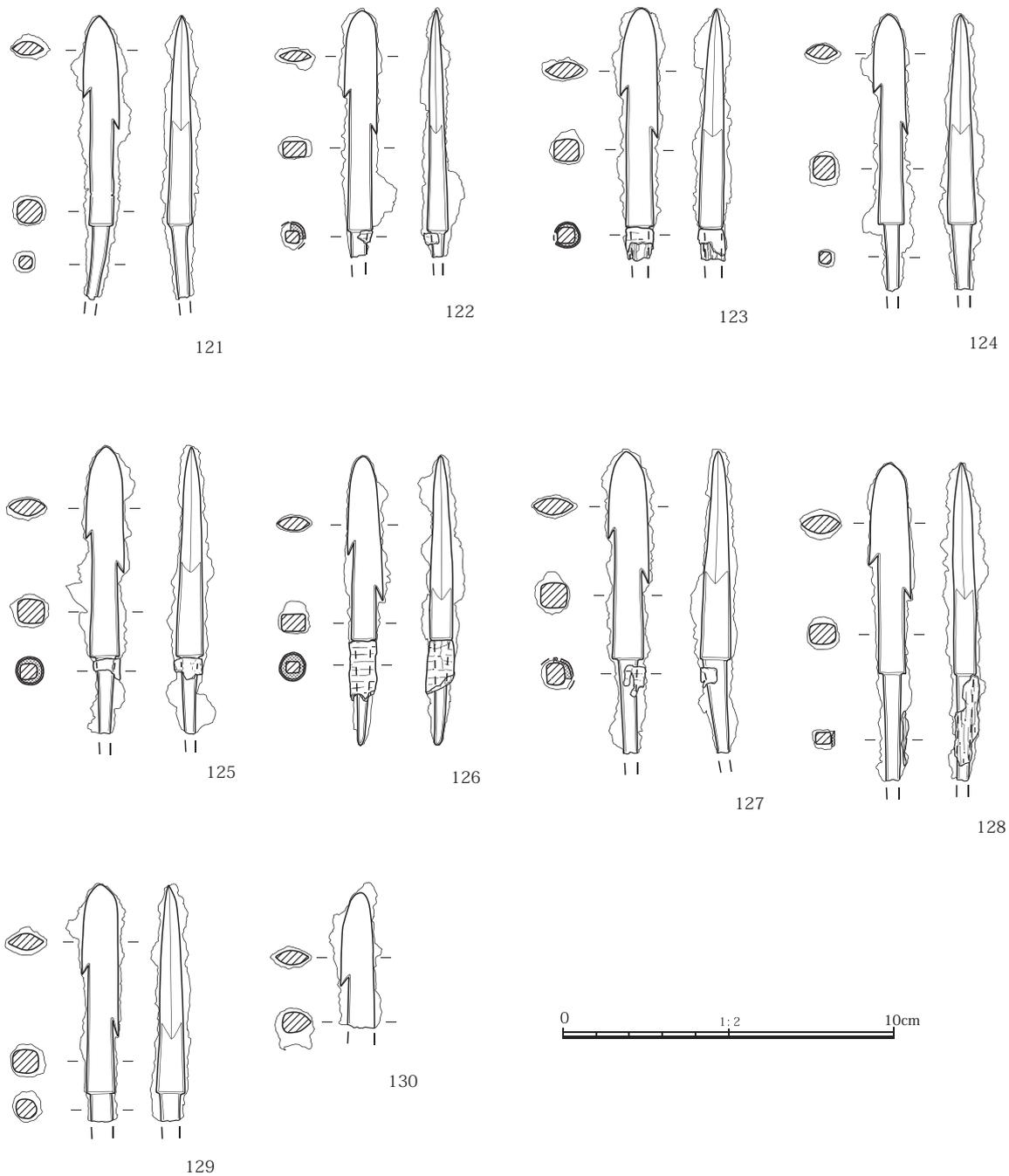
126には比較的良好に矢柄先端の有機質が遺存しており、平面形ではそれほど矢柄先端の幅を減じないが、側面からみると先端で幅を減じている。口巻きには樹皮を用いている。現状では茎巻きは確認していない。

鳥舌式 (131～148) 細片化のため図化しなかった個体を含めて24点ある。切先付近で幅が最大となる柳葉形の鍔身部から鍔身下半部へと向かって徐々に幅を減じ、山形関を経て茎部へと至る。鍔身



第38図 鉄鍔実測図(7): 剣身式

6 武器



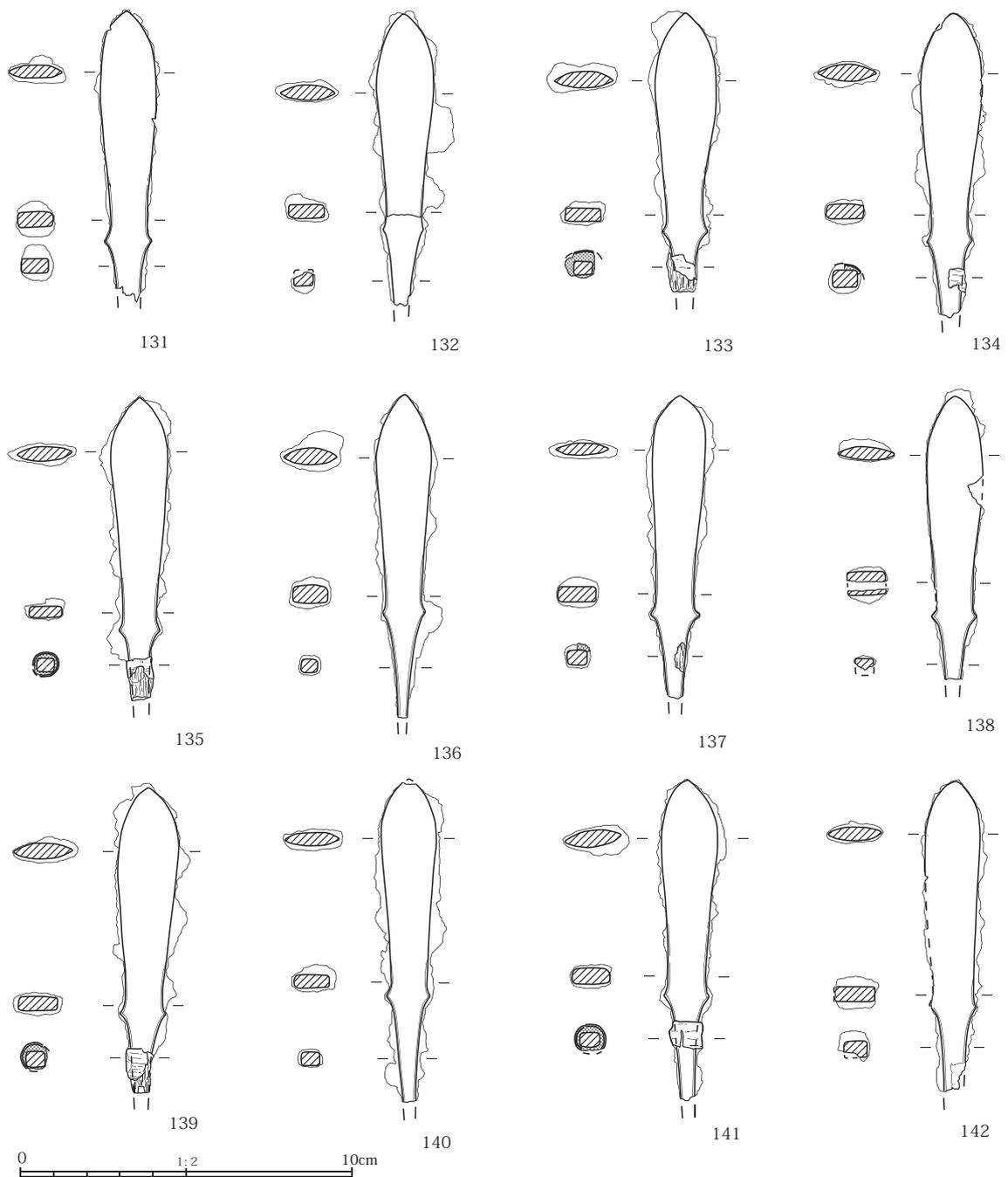
第39図 鉄鏃実測図(8): 段違い柳葉式

部長は6.5～7.1cmで、茎部長は唯一山形関から茎部先端を遺存する148で4.9cmである。

刃部横断面形はレンズ形だが、刃部の研ぎ出しは鏃身部全体には及んでおらず、鏃身下半部から茎部の横断面形は長方形となる。刃部最大厚は4～5mmで、鏃身下半部から茎部の厚さも同様である。

矢柄にともなう有機質の遺存状態は悪く、矢柄先端の形態は復元できないが、口巻きとして樹皮を用いている。現状では茎巻きは確認していない。

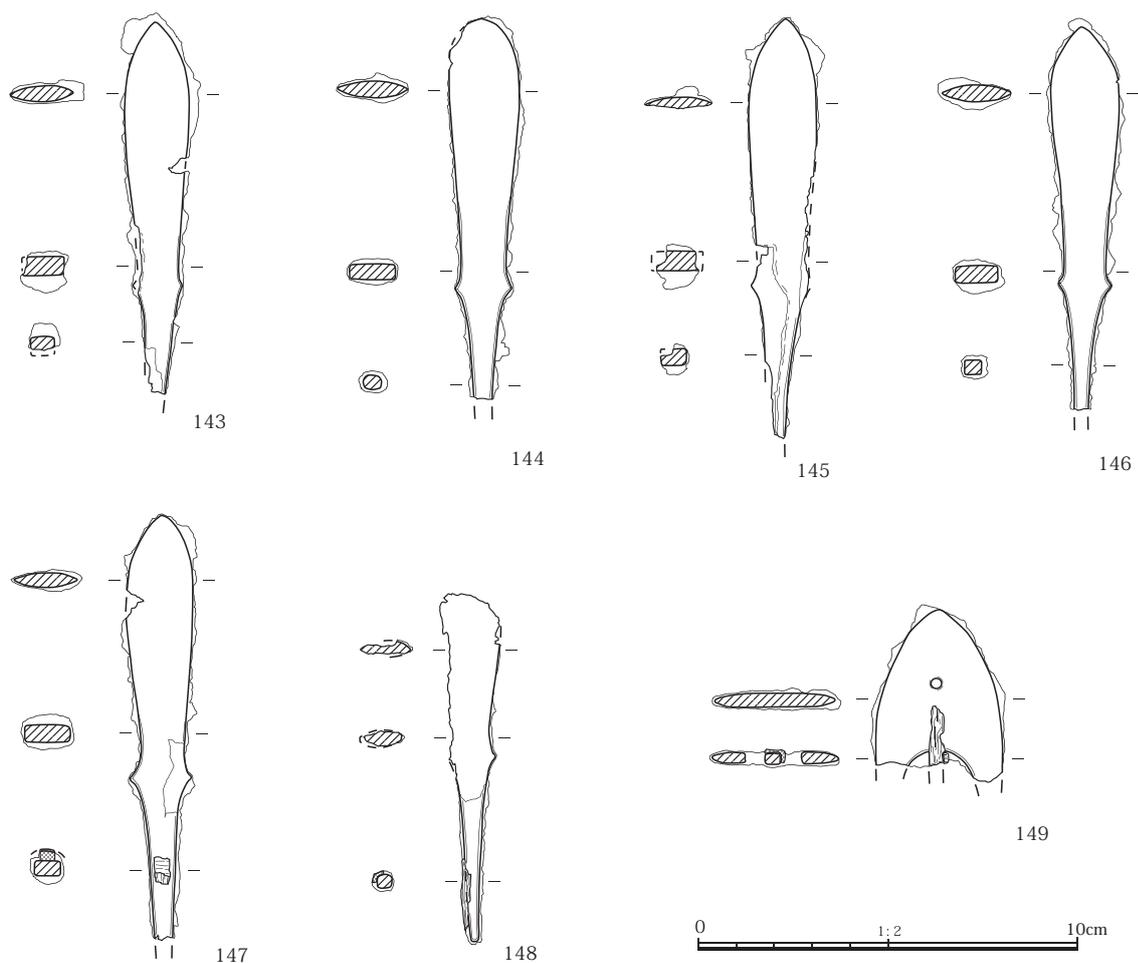
短茎長三角式 (149) 1点ある。長三角形の鏃身部の左右両側が腸袂をなし、腸袂の間に偏平短小



第40図 鉄鎌実測図(9):鳥舌式(1)

な短茎部を持つ。ただし、腸袂先端を左右いずれも欠失しており、二重腸袂の有無などは不明である。鎌身部中央に径2mmほどの穿孔を持つ。

現存長4.6cm、現存幅3.3cmで、茎部幅0.4cmである。鎌身部最大厚は3mmほどで、横断面形は偏平なレンズ形をなす。茎部から鎌身部にかけて縦方向の木質が付着しており、根挟みが装着されていたことがわかる。根挟みの外形は遺存状態が悪く確定できないが、細長い先細りの形態とみてよい。茎部には根挟み基部の緊縛用の糸巻きが遺存している。



第41図 鉄鏃実測図(10)：鳥舌式(2)・短茎式

小 結 短頸三角式や短頸柳葉式、鳥舌式などは中期前半段階の典型的な形式である。いずれもおおよそ漸次的に長身化・大型化する傾向があるとされており、石槨内出土鉄鏃は比較的長身で大型のもので占められており、中期前半段階でも新しい段階に位置づけられる。ただし、福岡県月岡古墳例などと比較すればいずれも短身・小型であり、形態的な特徴からその前段階とできる〔児玉 2005〕。短頸柳葉式は厚手で立体的な造りのものと扁平薄手のものに2分できるが、その意味については考察で検討したい。
(川畑 純)

(2) 鉄刀・鉄剣(図版42・43、第42図)

発掘報告では鉄鏃の出土は記されるが、刀剣が出土したという記録はみられない。以下報告する刀剣については、いずれも短甲や鉄鏃といった石槨内から出土したことの確実な資料とともに収蔵されていた点を最大限に評価して、竪穴式石槨に副葬されていたものと判断したものである。したがって、発掘調査によって明確に出土位置がおさえられた状態で出土した資料ではない点を取りわけ強調しておきたい。また本来、どの程度の数量の刀剣が竪穴式石槨内に収められていたのかは不明といわざるを得ない。現状においては、鉄刀が1点以上、鉄剣が2点以上副葬された可能性を指摘しうるに留まる。

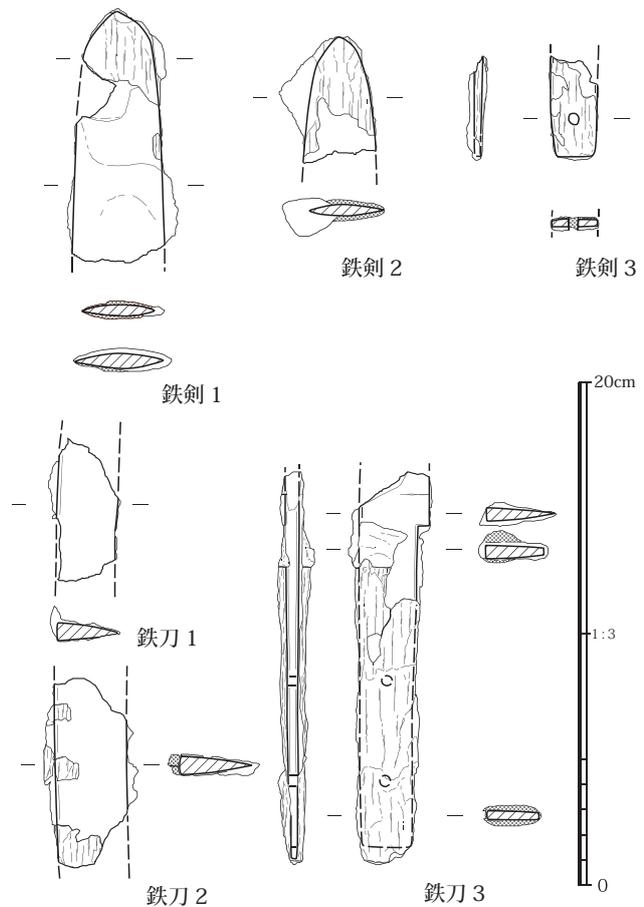
①鉄 刀

竪穴式石槨内から出土した鉄刀は、破片で3点を数えるのみである。2点が刃部だけの細片、1点が茎部を中心に一部刃部を残す破片である。これらの破片が同じ個体を構成するものかどうかは判断がつかない。もっとも少なくとも見積もった場合には1点、最大でも3点の存在を指摘しうるのみである。

1は刃部の破片である。現存長5.7cm、幅2.4cm、厚さは7mmほどである。断面が楔形を呈する平造の刃部であり、鉄刀であることがわかる。木質などの有機質の付着は認められない。

2も刃部の破片である。現存長7.5cm、幅2.9cm、厚さは8mmほどである。断面が楔形を呈する平造の刃部であることから、鉄刀と判断しうる。刃部には鞘に由来するものと思われる木質が僅かに遺存する。木質には、刃部の背にあたる部分の中央付近において、部材を接着した痕跡があり、二枚合わせの鞘身であることがわかる。

3は茎部の全体と刃部の一部を残す破片である。装具を含めた現存長は15.4cmである。刃部は長さ1.6cmとごく僅かを残すのみで、関部で幅2.8cmほど、厚さが6mmほどとなる。刃部は断面形態が楔形をなす、平造のものである。関部から切先方向へ1.3cmほどの位置において、刃部の両面に本来は有機質が付着していたであろう痕跡を認めることができる。おそらくは鞘身の端を反映した痕跡と推測するが、遺存状況が悪いために確定はできない。茎部は長さ12.8cm、関付近で幅2.3cm、厚さが6mm前後である。深さ5mmの直角に落ちる関を持つ。断面形状は僅かに腹側が薄いもの、おおむね長方形に近い形状を呈する。茎部は茎尻に向かってほぼ直線的にあまり幅を狭めることなくのびる。茎尻は直線的に終わり、一文字をなす。その幅は2.0cmほどである。厚みは関付近から茎尻に向かって徐々に薄くなり、茎尻付近で2mmほどとなる。目釘孔は、X線画像の観察では、茎の中央付近に二つ穿たれており、その直径は4mm程度である。目釘の材質は不明である。茎部には有機質が遺存する。有機質には2種類が認められる。1種は、鹿角と判断しうるもので、表面に漆状の物質が塗布される。茎部の関からおおよそ2cmの範囲に付着しており、両端が直線的に収束しており、把縁装具に由来する部品と考えうる。茎部に巻き付くように全体に付着する。もう1種類の有機質は木質であり、鹿角製の部品に接合するように関部側から始まり、茎尻まで茎部全体を覆うものである。ただし、背側には木質が一切付着しておらず、本来的



第42図 鉄刀・鉄剣実測図

6 武器

に背側が開放する構造を持つ木製部品であることをうかがわせる。木製の把間装具と判断しうる。このように、残存した有機質の様相から、本例は把間に木製部品を使用し、把縁に鹿角製部品を組み合わせる把装具を持つ鉄刀であると観察しうる。注目できるのが、把間の背側に溝がかけられる構造でありながら、把縁の背側に溝がない構造である点である。すなわち、把装具はいわゆる「落とし込み式」〔置田 1985〕ではなく、把装具に茎を挿し込む形式であることが確かである。そうした例で現状においてもっとも共通点の多い把装具としては、把縁が左右対称形にならない突起をもつ「有突起型 B 2 類」をあげうる〔岩本 2006〕。ただし、全体の遺存状態が極めて限定されるため、ここでは該当する可能性があることを指摘するに留めたい。

②鉄 剣

竪穴式石槨内から出土した鉄剣と確認できる資料は、破片で 3 点を数えるのみである。2 点が刃部片、1 点が茎部片である。切先に相当する破片が 2 点存在するので、2 点以上の鉄剣が副葬されたのは確かである。

1 は切先を含む刃部の破片である。現存長が 9.9cm、最大幅が 3.6cm、最大厚が 6 mm である。切先は明瞭なふくらを持ち、幅を広げながら関部へと達する形状をなすものと考えられる。断面形状はレンズ形を呈する。全体に幅が広く重厚な造りの鉄剣である。表面には鞘身に由来すると思われる木質が付着するが、遺存状態に限られることからその構造については不明な点が多い。

2 は切先を含む刃部の破片である。現存長が 5.0cm、最大幅が 2.9cm、最大厚が 5 mm である。切先のふくらはやや弱く、幅を広げながら関部へと達する形状をなす。断面形状はレンズ形である。表面には鞘身に由来すると思われる木質が付着する。ただし、遺存状態がさほど良好でないため、構造については不明である。

3 は茎部でも茎尻に相当する部分の破片である。現存長が 4.0cm、最大幅がおよそ 1.9cm、最大厚が 3 mm ほどの破片である。断面形状は中央部分がやや厚くなる長方形を呈する。関からは茎尻に向かって、直線的にあまり幅を変えずにのびる形状であったと推測しうる個体であり、茎尻は直線的に終わって一文字をなす。X 線画像の観察では、茎部の中央付近の茎尻から関部方向へおよそ 1.5cm の位置に目釘孔が一つかけられる。目釘孔の直径は 4 mm ほどで、内部には木製と想定される目釘が残存する。茎部の表面には木質が全体に付着する。把装具に由来するものと考えられ、詳細に観察すると部品を組み合わせた痕跡が認められる。部品の接合線は、茎部の側縁に沿って認めることができるものであり、三つないしは四つの部材からなるいわゆる「四枚合わせ式」〔田中 1991〕の把となる可能性が高い。そうであるならば、ほかの類例から、本例には鉄槍として使用された可能性を考慮することができるであろう。

(3) 鉄鉾・石突 (図版 42・43、第 43 図)

鉄鉾は 4 点、石突は 1 点が出土した。いずれも現状における遺存状態が悪く、発掘報告の時点から大きく変形した個体もある。ただし、法量については発掘報告段階の数値を復元することが困難であるため、現状のデータを提示することとしたい。

鉄銚については4点が竪穴式石槨の北半部において散乱した状態で出土したことが確認されている。なお、石突についても銚身と比較的近接した地点で出土している点は注目される。そのため、石突がどの銚身と対応するものであるかは明らかでない。

①鉄 銚

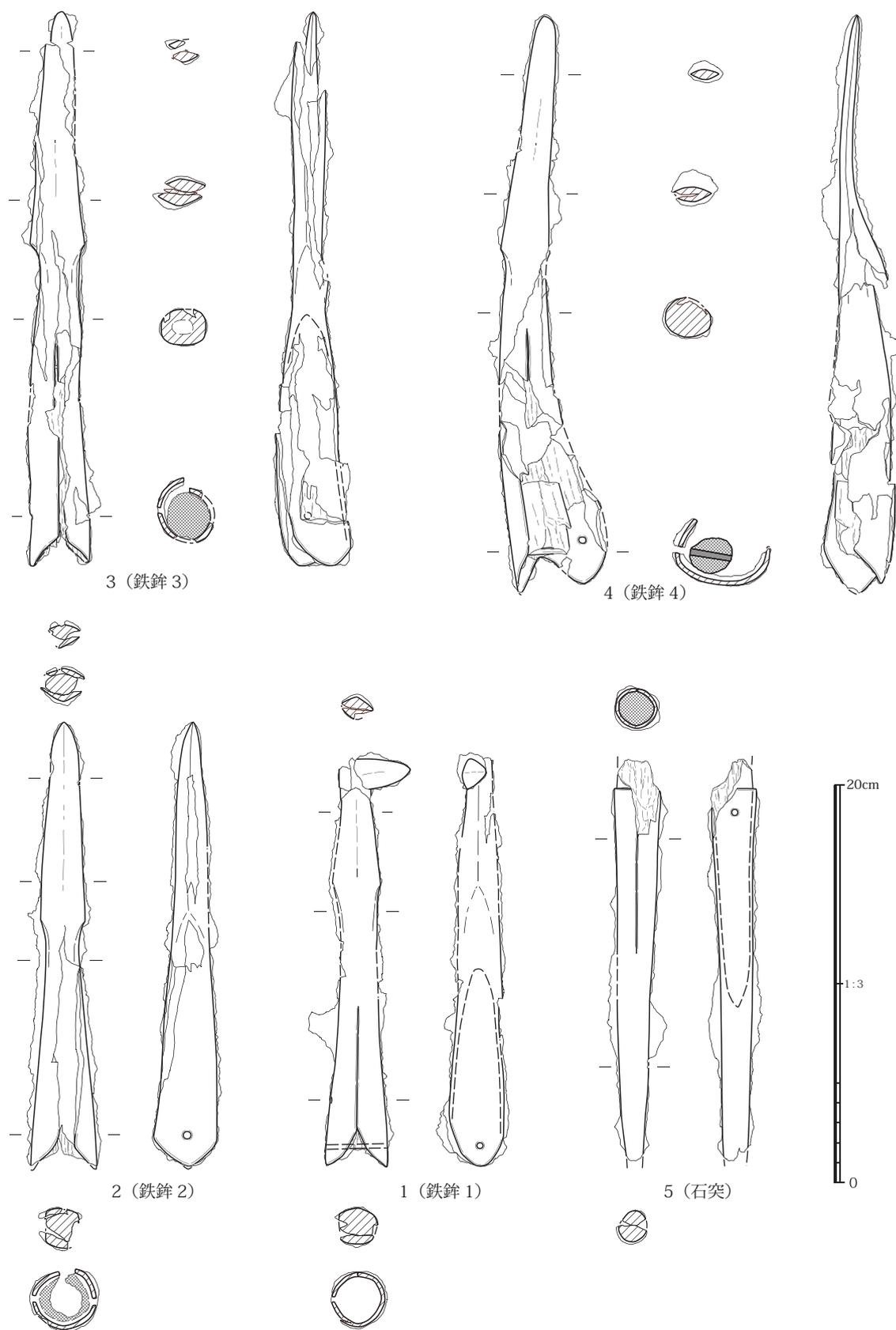
1は切先が折れ曲がった状態となっており、現存長が22.1cmとなる鉄銚である。復元すると全長は22.7cmほどになるものと思われる。刃部は極めて弱いふくらをなすようであり、長さ8.5cm、関部の幅が2.4cm、最大厚が2.0cmである。刃部の断面形状は厚みが大きい菱形を呈するものである。刃部の中央には鑄が形成される。袋部は長さ14.2cm、袋部端幅3.1cmである。関は浅く緩やかに落ちる形態を持つ。袋部は断面円形であり、全体の形状は関から袋部端へ向かって緩やかに広がるものとなる。平面の片側において、袋部の合わせ目を1箇所確認できる。袋部端には山形抉りを有する。袋部端より1.2cmほど関寄りの位置の側縁には、銚身と直交する方向に目釘孔があげられる。また、袋部端より3.2cmほど関寄りの位置にも目釘孔があげられるが、こちらは対応する孔がなく、1孔のみである。目釘孔の直径はいずれも4mm程度である。袋部端に近い方の目釘孔には、鉄製と思われる目釘が残存する。なお、袋部の内部には長柄に由来する木質が残存する。

2は現存長が22.4cmの鉄銚である。刃部はふくらのほぼない鋭い切先であり、長さ10.0cm、関部の幅が2.1cm、最大厚が1.7cmである。刃部の断面形状は大きく変形しているが、厚みが大きい点から本来は菱形を呈するものであったと考える。刃部の中央に鑄が形成されているのを観察することが可能である。袋部は長さ12.4cm、袋部端幅3.3cmである。関は浅く緩やかに落ちる形態を持つ。袋部は断面円形であり、全体の形状は関から袋部端へ向かって緩やかに広がるものとなる。平面の片側において、袋部の合わせ目を1箇所確認できる。袋部端には山形抉りを有する。袋部端より1.6cm関寄りの位置の側縁には、銚身と直交する方向に目釘孔があげられる。目釘孔の直径は4mm程度である。袋部の内部には長柄に由来する木質が残存する。

3は全長27.8cmの鉄銚である。刃部はふくらのほぼない鋭い切先であり、長さ11.7cm、関部の幅が2.7cm、最大厚が1.4cmである。刃部の断面形状は大きく変形しているが、本来は菱形を呈するものであったことが現状の観察においても可能である。刃部の中央に鑄が形成される。袋部は長さ16.1cm、袋部端幅3.0cmである。関は浅く緩やかに落ちる形態を持つ。袋部は断面円形であり、全体の形状は関から袋部端へ向かって緩やかに広がるものとなる。平面の片側において、袋部の合わせ目を1箇所確認できる。袋部端には山形抉りを有する。袋部端より2.5cm関寄りの位置の側縁には、銚身と直交する方向に目釘孔があげられる。目釘孔の直径は3mm程度である。使用される目釘の材質は不明である。袋部の内部には長柄に由来する木質が残存する。

4は全長29.1cmの鉄銚である。刃部はかるうじて弱いふくらをなすようであり、長さ11.9cm、関部の幅が2.4cmとなる。最大厚については、銹膨れにより情報がうしなわれているが、比較的良好に遺存する部分を参考にすれば1cm程度になるものと思われる。刃部の断面形状は大きく変形しているが、本来は薄い菱形を呈するものであったと判断される。刃部の中央には弱いながらも鑄が形成される。袋部は長さ17.2cmである。袋部端幅については変形が著しく不明である。おそらくは3.0～3.5cm程度にな

6 武器



第 43 図 鉄鉾・石突実測図

るものとする。関は浅く緩やかに落ちる形態を持つ。袋部は断面円形であり、全体の形状は関から袋部端へ向かって緩やかに広がるものとなろう。平面の片側において、袋部の合わせ目を1箇所確認できる。袋部端には山形抉りを有する。袋部端より2.3cmほど関寄りの位置の側縁には、銚身と直交する方向に目釘孔がつけられる。目釘孔の直径は4mm程度である。木製と思われる目釘が内部に残存する。また、袋部の内部には長柄に由来する木質が認められる。

②石 突

5は現存長18.8cmの鉄製の石突である。先端部を欠損しているため、本来の全長は不明である。基部付近で直径は2.3cm前後である。基部は直線的な形状をなす。全体として断面形状は整った円形であり、基部から石突先端に向かって徐々に細くなる形状を呈する。長さ11cm程度に渡って上部に袋部を形成する。袋部の合わせ目は1箇所を確認できる。基部端より1.2cmほど先端寄りの位置に、目釘孔が1対つけられる。目釘孔の直径は4mm程度である。使用される目釘の材質については不明である。袋部には長柄に由来する木質が良好に残存し、基部の外側においては本来の長柄の表現を留める部分がある。長柄には段差加工などは認められず、石突の内寸と長柄の外寸が一致する構造となる。(岩本 崇)

7 農 工 具

斧1点、鑿1点、鉋4点、刀子3点を竪穴式石槨内の出土と判断した。石槨内にも農工具が副葬されたことを新たに確認することができた。

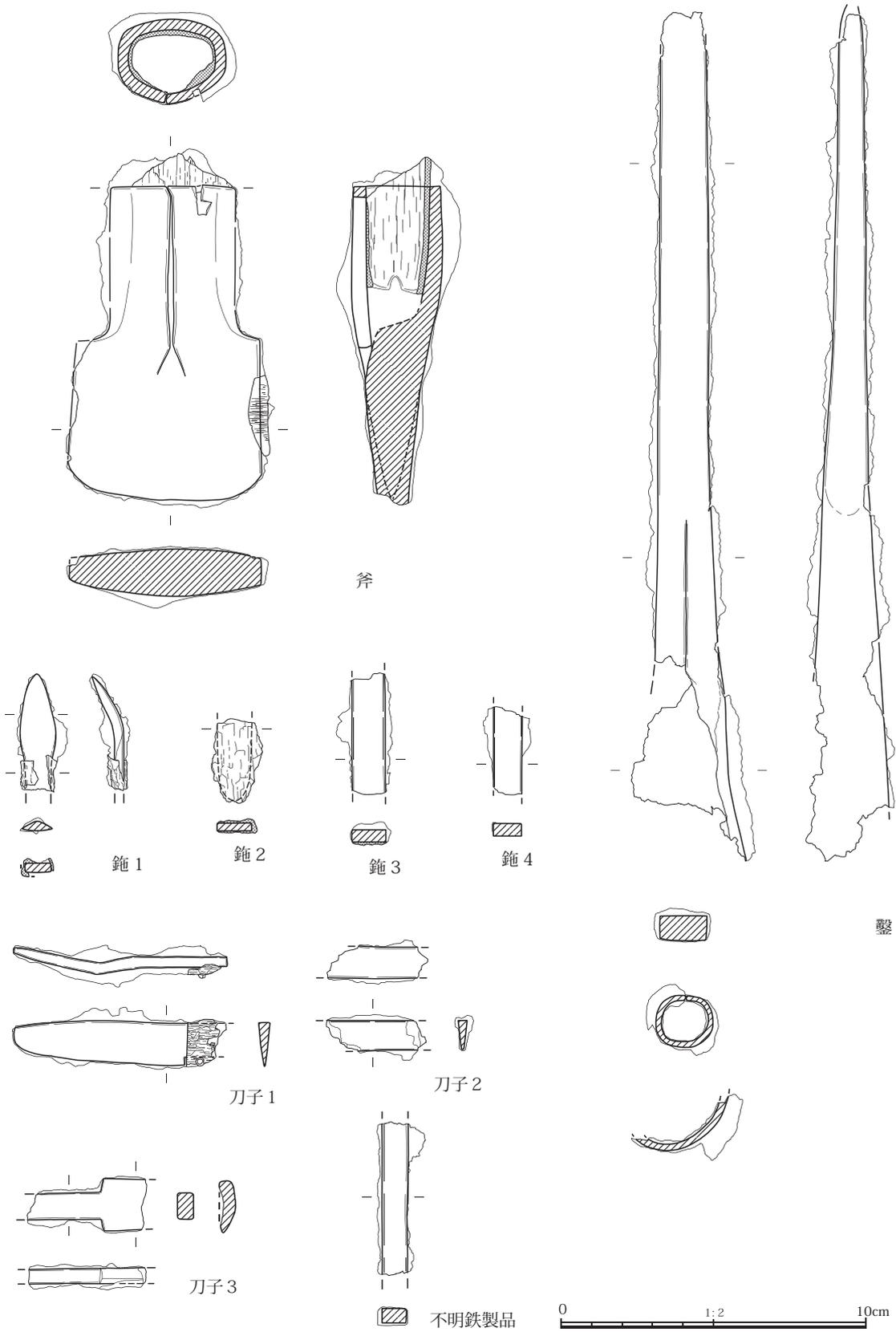
(1) 斧(図版44、第44図)

肩部と袋部の一部を欠損するものの、ほぼ完形品である。刃部は錆膨れのため本来の厚さを保っていない。全長12.0cm、袋部幅5.9cm、袋部厚3mm、刃部幅6.3cm、最大厚1.9cmである。外側に大きく広がる肩を持つ。袋部の横断面は楕円形で、袋部合わせ目の下部はハの字状に広がる。袋部合わせ目は現状で2mm程度開いているが、本来は密着していたとみられる。縦断面は袋部から中央付近にかけて急激に厚さを増す。中央から刃部にかけては本来の厚さを保っていないため不明瞭であるが、徐々に厚さを減じていったものと判断できる。袋部と中央部分の厚さの差が大きいことから、1枚の鉄板を整えた上で刃部にもう1枚の鉄板を用いたB I技法と想定できる〔金田1995〕。袋部内には木柄が良好に残存し、袋部端から3.4cmのところ木柄の端部を確認することができる。木柄端部中央付近の窪みは、柄の先端を先細りとするように加工して装着した結果とみることもできる。刃部の一部に有機質が付着する。

(2) 鑿(図版44、第44図)

刃部先端と袋部の一部を欠損する。残存長28.0cm、刃部先端側で幅1.5cm、厚さ8mm。平面形は先端側の幅がやや狭くなる長方形である。刃部側から16.7cm以降が袋部となる。刃部の横断面は長方形であり、袋部の横断面は楕円形で、合わせ目は密着する。側面形は袋部から刃部に向かって徐々に厚さを減じる。袋部の残存状況が不良で、目釘孔などは確認できない。

7 農工具



第44図 農工具・不明鉄製品実測図

(3) 鉈 (図版 45、第 44 図)

1 は刃部から茎部にかけての破片である。残存長 3.9cm、刃部長 2.8cm、刃部幅 1.2cm、茎部幅 8.5mm である。刃部が鐔形を呈し、ややくびれて茎部に至る。刃部の横断面は三角形を呈する。鏑はなく、裏透きを持たない。茎部の横断面は長方形。茎部には柄に由来するとみられる木質が残る。柄の表面とみることのできる部分がある。古瀬清秀氏による分類の I a 類に属する〔古瀬 1991〕。

2 は茎部端の破片である。残存長 2.7cm、幅 1.1cm。端部がやや円味を帯びる。横断面は長方形。ほぼ全体に木質が残存する。表面の一部に漆膜と考えられるものが観察できる。

3 は茎部の破片である。残存長 4.0cm、幅 1.1cm である。横断面は長方形を呈する。

4 は茎部の破片である。残存長 2.9cm、幅 9mm である。横断面は長方形を呈する。

(4) 刀子 (図版 45、第 44 図)

1 は茎部の端を欠損するものの、ほぼ完形品である。刃部が「く」字状に屈曲しているが、本来の形状か土圧などによる二次的な変形か判断できない。残存長 6.9cm、最大刃部幅 1.4cm、茎部幅 1.1cm である。関部は片関で、直角に屈曲する。刃部の横断面は楔形を呈する。茎部には木質が良好に残存する。茎部の外側に木製の目釘が残る。

2 は刃部の破片である。残存長 3.3cm、刃部最大幅 1.0cm である。刃部の横断面は楔形を呈する。

3 は刃部から茎部にかけての破片である。刃部の残りはやや不良である。残存長 3.9cm、刃部最大幅 1.7cm、茎部幅 9mm である。関部は両関で、ほぼ直角に屈曲する。茎部の横断面は長方形を呈する。(鈴木康高)

8 不明鉄製品 (図版 45、第 44 図)

器種を確定できない鉄製品が 1 点ある。

身部の破片とみられる。残存長 5.1cm、身部幅 8mm である。長方形の鉄板で、横断面は長方形を呈する。鉈や鑿などの茎部とみることのできる。 (鈴木康高)

<参考文献>

- 網干善教 1962 『五条猫塚古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第 20 冊 奈良県教育委員会
- 岩本 崇 2006 「古墳出土鉄剣の外装とその変遷」『考古学雑誌』第 90 巻第 4 号 日本考古学会 pp.1-34
- 置田雅昭 1985 「古墳時代の木製刀把装具」『天理大学学報』第 145 輯 天理大学学術研究会 pp.39-63
- 金田善敬 1995 「有袋鉄斧の製作技術の検討」『古代吉備』第 17 集 古代吉備研究会 pp.61-79
- 北野耕平 1976 『河内野中古墳の研究』大阪大学文学部国史研究室研究報告第 2 冊 大阪大学文学部国史研究室
- 児玉真一 (編) 2005 『若宮古墳群 III 一月岡古墳』吉井町文化財調査報告書第 19 集 吉井町教育委員会
- 小林謙一 1974 「甲冑製作技術の変遷と工人の系統 (下)」『考古学研究』第 21 巻 第 2 号 考古学研究会 pp.37-49
- 阪口英毅 1998 「長方板革綴短甲と三角板革綴短甲—変遷とその特質—」『史林』第 81 巻 第 5 号 史学研究会 pp.1-39

8 不明鉄製品

- 末永雅雄 1934 『日本上代の甲冑』岡書院
- 杉井 健・上野祥史(編) 2012 「マロ塚古墳出土品を中心にした古墳時代中期武器武具の研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』第173集 国立歴史民俗博物館
- 鈴木一有 1996 「三角板系短甲について—千人塚古墳の研究(2)—」『浜松市博物館館報』Ⅷ 浜松市博物館 pp.22-45
- 高橋 工 1993 「革綴甲冑の技術」『月刊考古学ジャーナル』No.366 ニュー・サイエンス社 pp.17-21
- 高橋 工 1995 「東アジアにおける甲冑の系統と日本—特に5世紀までの甲冑製作技術と設計思想を中心に—」『日本考古学』第2号 日本考古学協会 pp.139-160
- 田中新史 1991 「神門三・四・五号墳と古墳の出現」『邪馬台国時代の東日本』国立歴史民俗博物館 pp.130-136
- 西田 弘・鈴木博司・金関 恕 1961 「栗東町安養寺古墳群」『滋賀県史跡名勝天然記念物調査報告書』第12冊 滋賀県教育委員会
- 橋本達也 1995 「古墳時代中期における金工技術の変革とその意義—眉庇付冑を中心として—」『考古学雑誌』第80巻第4号 日本考古学会 pp.1-33
- 橋本達也 1996 「古墳時代前期甲冑の技術と系譜」『雪野山古墳の研究』考察篇 八日市市教育委員会 pp.255-292
- 橋本達也 2005 「稲童21号墳出土の眉庇付冑」『稲童古墳群』行橋市文化財調査報告書第32集 行橋市教育委員会 pp.276-285
- 初村武寛 2011 「古墳時代中期における小札甲の変遷」『古代学研究』192号 古代学研究会 pp.1-19
- 林修平・細川修平 2012 『古代甲賀の首長と副葬品—塚越古墳出土遺物調査報告—』甲賀市史編纂叢書第8集 甲賀市教育委員会
- 藤田和尊 1984 「頸甲編年とその意義」『関西大学考古学研究紀要』4 関西大学文学部考古学研究室 pp.55-72
- 藤田和尊 2006 「第二節 甲冑の編年と生産組織」『古墳時代の王権と軍事』学生社 pp.31-66
- 古瀬清秀 1991 「農工具」『古墳時代の研究』第8巻 古墳Ⅱ 副葬品 雄山閣 pp.71-91
- 古谷 毅 1988 「久津川車塚古墳出土の甲冑—いわゆる“一枚鍛”の提起する問題」『MUSEUM』No.445 東京国立博物館 pp.4-17
- 古谷 毅 2012 「3.2号頸甲」『国立歴史民俗博物館研究報告』第173集 国立歴史民俗博物館 pp.159-167
- 吉村和昭 1988 「短甲系譜試論—鋌留技法導入以後を中心として—」『橿原考古学研究所紀要 考古学論攷』第13冊 奈良県立橿原考古学研究所 pp.23-39

五條猫塚古墳の研究

報告編

発行年月日 2014（平成26）年3月31日

発行 奈良国立博物館
〒630-8213 奈良市登大路町50番地
TEL 0742-22-7771

印刷 株式会社 天理時報社
〒632-0083 天理市稲葉町80番地